

志木市の文化財 第59集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 5

城山遺跡第26地点

2014

埼玉県志木市教育委員会



113号住居跡出土遺物



113号住居跡出土の耳環（金環）展開写真

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書 5』は、志木市遺跡調査会が、平成 6 年度に発掘調査を実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心から 25km 圏内という距離にあるため、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

当市を地理的に見てみると、市域には、荒川・新河岸川・柳瀬川といった大きな 3 つの河川が流れていることから、古より自然豊かな環境に恵まれていたものと想像できます。このことから、こうした柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺や荒川低地の自然堤防上には 14 カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

今回報告する城山遺跡ですが、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世、近代までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。特に、遺跡内には、平成 2 年度に市指定文化財に登録された「城山貝塚」、大石信濃守の居城跡と考えられる「柏の城」をはじめ、日本最古の土器群に位置付けられる「爪形文系土器」が発見されるなど、一言では言い表せないほどの貴重な文化財が数多く発見されています。

平成 24 年度には新たに考古資料としては、初めて市指定文化財に登録された、「城山遺跡 128 号住居跡出土の銅印ほか 9 点」と「城山遺跡 241 号住居跡出土の富壽神寶ほか 2 点」の 2 件が加わり、大変喜ばしいことと思います。

発掘調査・整理作業及び調査報告書刊行につきましては、関係各位の皆様からは多くのご協力をいただきました。ここに、心から感謝申し上げます次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財の理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶための一助になれば幸いに存じます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する城山遺跡（県No.09-003）の第26地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、開発主体者のダイキハウス株式会社（代表取締役 大谷 徹）から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行作業は、志木市教育委員会が実施した。なお、志木市における志木市遺跡調査会は、今日における様々な管理上の問題点などの指摘により、平成22年12月28日付けで解散している。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、近世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤 均氏にご教示を頂いた。
深井恵子 第3章第2～4節の遺構
青木 修 第3章第1節、第5節の縄文時代の土器
4. 遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。遺物の写真撮影は青木 修が行った。
5. 表土剥ぎ及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託し、重機オペレータは田中三二が担当した。
6. 石器の実測については、有限会社アルケアーリサーチに委託した。
7. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財保護課・（財）埼玉県埋蔵文化財事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館
江原 順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・斎藤 純・齋藤欣延・
斯波 治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・
前田秀則・松本富雄・柳井彰宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁
9. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。
○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
平成6年9月13日付け 教生文第3-312号
○埋蔵文化財発掘調査について（通知）
平成6年9月13日付け 教生文第2-95号
○埋蔵物の文化財認定について
平成17年12月1日付け 教生文第5-320号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個別別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7. 第17表の遺構外出土の縄文土器の記述の中で使用した色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。

8. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

H＝古墳時代～平安時代の住居跡 D＝土坑 M＝溝跡

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会長	長	秋山太藏（志木市教育委員会教育長）（昭和63年7月～平成12年6月）
		細田信良（　　　　　　）（平成12年7月～平成17年6月）
		柚木博（　　　　　　）（平成17年10月～平成20年3月）
		白砂正明（　　　　　　）（平成20年4月～平成22年12月）
会長職務代理者		新井茂（　　　　　　）（平成17年7月～9月）
副会長		川目憲夫（志木市教育委員会教育総務部長）（平成7年4月～平成12年3月）
		谷合弘行（志木市教育委員会教育政策部長）（平成12年4月～平成15年3月）
		白砂正明（　　　　　　）（平成15年4月～平成16年3月）
		杉山勇（　　　　　　）（平成16年4月～平成17年3月）
		新井茂（　　　　　　）（平成17年10月～平成22年12月）
理事		神山健吉（志木市文化財保護審議会委員長）
		井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
		高橋長次（　　　　　　）
		高橋豊（　　　　　　）
		内田正子（　　　　　　）
理事兼事務局長		並木勝司（志木市教育委員会教育総務部参事兼生涯学習課長） （平成3年4月～平成8年3月）
		鈴木重光（生涯学習課長）（平成8年4月～平成12年3月）
		土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長） （平成12年4月～平成16年3月）
		大熊章只（生涯学習課長）（平成16年4月～平成18年3月）
		宮川英夫（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長） （平成18年4月～平成19年3月）
		吉田洋（志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長） （平成19年4月～平成22年12月）

〈監査〉

監事		武川洋子（志木市郷土資料館長）（平成5年4月～平成8年3月）
		萩原洋子（　　　　　　）（平成8年4月～平成14年3月）
		鈴木憲三（社会教育指導員）（平成5年4月～平成9年3月）
		佐藤茂（　　　　　　）（平成6年4月～平成10年3月）
		永田伸夫（　　　　　　）（平成10年4月～平成14年3月）
		福田鮎子（　　　　　　）（平成14年4月～平成16年3月）
		金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月、平成15年8月～平成16年3月）
		荒井正夫（生涯学習課主査）（平成14年8月～平成15年7月）

樺嶋秀俊(生涯学習課主任)(平成16年4月～平成18年3月)
並木貴子(〃)(平成16年4月～平成17年3月)
古屋大輔(〃)(平成17年4月～平成18年3月)
原田隆一(志木市教育委員会教育総務課長)(平成18年4月～平成20年3月)
菊原龍治(〃)(平成20年4月～平成22年12月)
鈴木幸治郎(志木市出納室長)(平成18年4月～平成20年3月)
宮川英夫(志木市出納室長)(平成20年4月～平成22年12月)

〈事務局〉

担当課

志木市教育委員会教育総務部社会教育課(～平成12年3月)
志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課(平成12年4月～平成14年3月)
志木市教育委員会教育政策部生涯学習課(平成14年4月～平成22年12月)

事務局

尾崎健市(生涯学習課長補佐兼生涯学習課係長)(平成7年4月～平成10年3月)
金子雅佳(生涯学習課主幹)(平成14年8月～平成16年3月、平成16年8月～平成17年3月)
下河辺信行(生涯学習課主幹)(平成14年4月～8月)
醍醐一正(〃)(平成16年4月～平成18年3月)
今野美香(〃)(平成19年4月～11月)
大熊克之(〃)(平成19年12月～平成22年12月)
土岐隆一(生涯学習課副課長)(平成20年4月～平成22年12月)
岡本孝(生涯学習課係長)(平成3年4月～平成9年3月)
関根正明(生涯学習課主査)(平成9年4月～平成15年7月)
内田誠(〃)(平成18年4月～7月)
佐々木保俊(〃)(～平成20年8月)
清水隆(〃)(平成19年5月～7月)
今野美香(〃)(平成15年8月～平成19年3月)
尾形則敏(〃)(平成20年4月～平成22年12月)
清水あや子(生涯学習課主任)(平成8年4月～平成12年3月)
新井由紀子(〃)(平成12年4月～平成14年3月)
尾形則敏(〃)(～平成20年3月)
倉部恵子(〃)(平成14年4月～平成18年3月)
松永真知子(〃)(平成18年4月～平成22年12月)
高野雅也(〃)(平成20年4月～平成22年12月)
徳留彰紀(生涯学習課主事)(平成22年4月～平成22年12月)
徳留彰紀(生涯学習課主事補)(平成21年4月～平成22年3月)

調査担当者

佐々木保俊

調査員

内野美津江

発掘協力員

阿部公子・足立裕子・岩森 都・海野ひとみ・岸田純一・熊谷秀子・
桑原美保子・須藤京子・高橋恭子・塚田和枝・二階堂美知子・
成田しのぶ・森 文子・柳沢美子・矢野恵子

志木市教育委員会組織

教 育 長	尾崎健市（平成24年7月～）
教 育 政 策 部 長	菊原龍治（平成25年4月～）
生 涯 学 習 課 長	松井俊之（平成25年4月～）
生 涯 学 習 課 副 課 長	伊藤久峰子（平成25年4月～）
生 涯 学 習 課 主 査	尾形則敏（平成21年4月～）
〃	浅見千穂（平成21年4月～）
〃	武井香代子（平成24年4月～）
生 涯 学 習 課 主 任	松永真知子（平成18年4月～）
生 涯 学 習 課 技 師	矢田佳生（平成23年4月～）
生 涯 学 習 課 主 事	徳留彰紀（平成22年4月～平成25年3月）
〃	大久保 聡（平成25年4月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）（平成24年4月～）
	高橋長次（委員）（昭和63年4月～）
	高橋 豊（委員）（平成8年4月～）
	深瀬 克（委員）（平成24年4月～）
	上野守嘉（委員）（平成24年4月～）

〈整 理 作 業〉

担 当 者	尾形則敏・大久保 聡
調 査 員	深井恵子・青木 修
調 査 補 助 員	星野恵美子・鈴木浩子
整 理 協 力 員	江口美千子・大橋康弘・高田美智子・林ゆき子・一二三英文・ 増田千春・松浦恵子・村田浩美

目 次

巻頭図版

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 城山遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 発掘調査の経過	10
第3章 検出された遺構と遺物	13
第1節 縄文時代	13
第2節 古墳時代後期	14
第3節 奈良・平安時代	33
第4節 中世以降	42
第5節 遺構外出土遺物	51
第4章 調査のまとめ	61

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図	城山遺跡の調査地点 (1/3,000)	8
第3図	遺構分布図 (1/200)	12
第4図	92号土坑・出土遺物 (1/60・1/3)	13
第5図	105号住居跡 (1/60)	14
第6図	107号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)	15
第7図	108号住居跡 (1/60)	16
第8図	108号住居跡遺物出土状態 (1/60)	17
第9図	108号住居跡カマド (1/30)	17
第10図	108号住居跡出土遺物1 (1/4)	18
第11図	108号住居跡出土遺物2 (1/4)	19
第12図	108号住居跡出土遺物3 (1/4)	20
第13図	111・114号住居跡 (1/60)	22
第14図	111号住居跡出土遺物 (1/4)	23
第15図	113号住居跡 (1/60)	24
第16図	113号住居跡出土遺物1 (1/4)	25
第17図	113号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)	26
第18図	115号住居跡 (1/60)	27
第19図	115号住居跡出土遺物 (1/4)	27
第20図	106号住居跡 (1/60)	33
第21図	106号住居跡出土遺物 (1/4)	33
第22図	109号住居跡 (1/60)	34
第23図	109号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	35
第24図	110号住居跡 (1/60)	36
第25図	110号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	37
第26図	112号住居跡 (1/60)	38
第27図	112号住居跡出土遺物 (1/4)	38
第28図	91号土坑・出土遺物 (1/60・1/4)	39
第29図	97号土坑 (1/60)	39
第30図	土坑1 (1/60)	45
第31図	土坑2 (1/60)	46
第32図	土坑出土遺物 (1/3・1/4・1/1)	47
第33図	23号溝跡 (1/60)	48
第34図	24号溝跡 (1/80)	49
第35図	24号溝跡出土遺物 (1/4)	50
第36図	遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)	52
第37図	遺構外出土遺物2 (1/3)	53
第38図	遺構外出土遺物3 (1/3・1/4)	54
第39図	遺構外出土遺物4 (1/4・1/3)	55

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	城山遺跡第26地点の発掘調査工程表	11
第3表	107号住居跡出土土器一覧	28
第4表	108号住居跡出土土器一覧(1)	28
	108号住居跡出土土器一覧(2)	29
	108号住居跡出土土器一覧(3)	30
第5表	111・114号住居跡出土土器一覧	30
第6表	113号住居跡出土土器一覧(1)	31
	113号住居跡出土土器一覧(2)	32
第7表	115号住居跡出土土器一覧	32
第8表	106号住居跡出土土器一覧	40
第9表	109号住居跡出土土器一覧	40
第10表	110号住居跡出土土器一覧	41
第11表	112号住居跡出土土器一覧	41
第12表	91号土坑出土土器一覧	41
第13表	97号土坑出土土器一覧	41
第14表	98号土坑出土錢貨一覧	47
第15表	土坑・溝跡出土の陶磁器・土器一覧	50
第16表	遺構外出土の旧石器・縄文時代の石器一覧	56
第17表	遺構外出土の縄文土器一覧(1)	56
	遺構外出土の縄文土器一覧(2)	57
	遺構外出土の縄文土器一覧(3)	58
第18表	遺構外出土の弥生～平安時代の土器・陶器一覧(1)	58
	遺構外出土の弥生～平安時代の土器・陶器一覧(2)	59
第19表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	60

図版目次

- 図版1 1. 92号土坑 2. 105号住居跡 3. 107号住居跡・90号土坑
4～8. 108号住居跡遺物出土状態
- 図版2 1. 108号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 2. 108号住居跡カマド遺物出土状態
3. 108号住居跡貯蔵穴 4. 108号住居跡カマド掘り方 5・6. 108号住居跡
7. 111・114号住居跡 8. 発掘風景
- 図版3 1～3. 113号住居跡遺物出土状態 4. 113号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
5・6. 115号住居跡遺物出土状態 7. 106号住居跡 8. 109号住居跡遺物出土状態
- 図版4 1・2. 109号住居跡遺物出土状態 3. 109号住居跡 4. 109号住居跡掘り方
5. 110号住居跡 6. 110号住居跡掘り方 7. 112号住居跡 8. 112号住居跡掘り方
- 図版5 1. 91号土坑 2. 97号土坑 3. 93号土坑竪坑 4. 93号土坑内部
5. 93号土坑内部 6. 94号土坑竪坑 7. 94号土坑連絡部 8. 94号土坑主体部
- 図版6 1. 95号土坑 2. 96号土坑 3. 98・99・100号土坑 4. 23号溝跡
5. 24号溝跡（東から） 6. 24号溝跡（西から） 7. 24号溝跡
8. 24号溝跡発掘風景
- 図版7 1. 92号土坑出土遺物 2. 107号住居跡出土遺物 3. 108号住居跡出土遺物 1
- 図版8 108号住居跡出土遺物 2
- 図版9 108号住居跡出土遺物 3
- 図版10 1. 111号住居跡出土遺物 2. 113号住居跡出土遺物 1
- 図版11 113号住居跡出土遺物 2
- 図版12 1. 115号住居跡出土遺物 2. 106号住居跡出土遺物 3. 109号住居跡出土遺物 1
- 図版13 1. 109号住居跡出土遺物 2 2. 110号住居跡出土遺物
- 図版14 1. 112号住居跡出土遺物 2. 91・97号土坑出土遺物 3. 土坑出土遺物
- 図版15 1. 98号土坑出土遺物 2. 24号溝跡出土遺物 3. 遺構外出土遺物 1
- 図版16 遺構外出土遺物 2
- 図版17 遺構外出土遺物 3
- 図版18 遺構外出土遺物 4

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71 km、東西4.73 kmの広がりを持ち、面積は9.06㎢、人口約7万3千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	81,310㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	52,980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ビット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	10,300㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		489,570㎡					

平成25年12月27日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点出土している。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。

平成22（2010）年に発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5ヶ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層の第Ⅵ層を中心とする3ヶ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

最新では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東

側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡や土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。最新資料では、今年度（平成25年度）に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が590軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こ

うした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品1点と西原大塚遺跡17号方形周溝墓から出土した、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21（2008～2009）年の城

山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶^{ふじゆしんぼう}が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸軛が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村日記』^{たてむらきゆうき}（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雑記』^{かいこくざつき}（註2）に登場する「大石信濃守館」^{おおししののかみのやかた}が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」^{おおつかじゆうぎよくぼう}についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋破り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札^{よろい さね}である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村日記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村日記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「しょうりんざんかんのんじだいじゆいん松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 城山遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2km、柳瀬川駅の東約0.8kmに位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、ここ5・6年の間は、毎年のように市内では比較的に規模の大きい開発が増加しており、最近では平成22・23年に分譲住宅建設に伴う第62地点、平成23年度に共同住宅建設に伴う第72地点や分譲住宅建設に伴う第71地点が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況で、一帯がほぼ住宅地と言える。

城山遺跡は、これまでに82回の調査（平成25年11月30日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

以上、城山遺跡における今までの調査成果をまとめると、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であり、また、複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密な地区であることが判明してきている。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

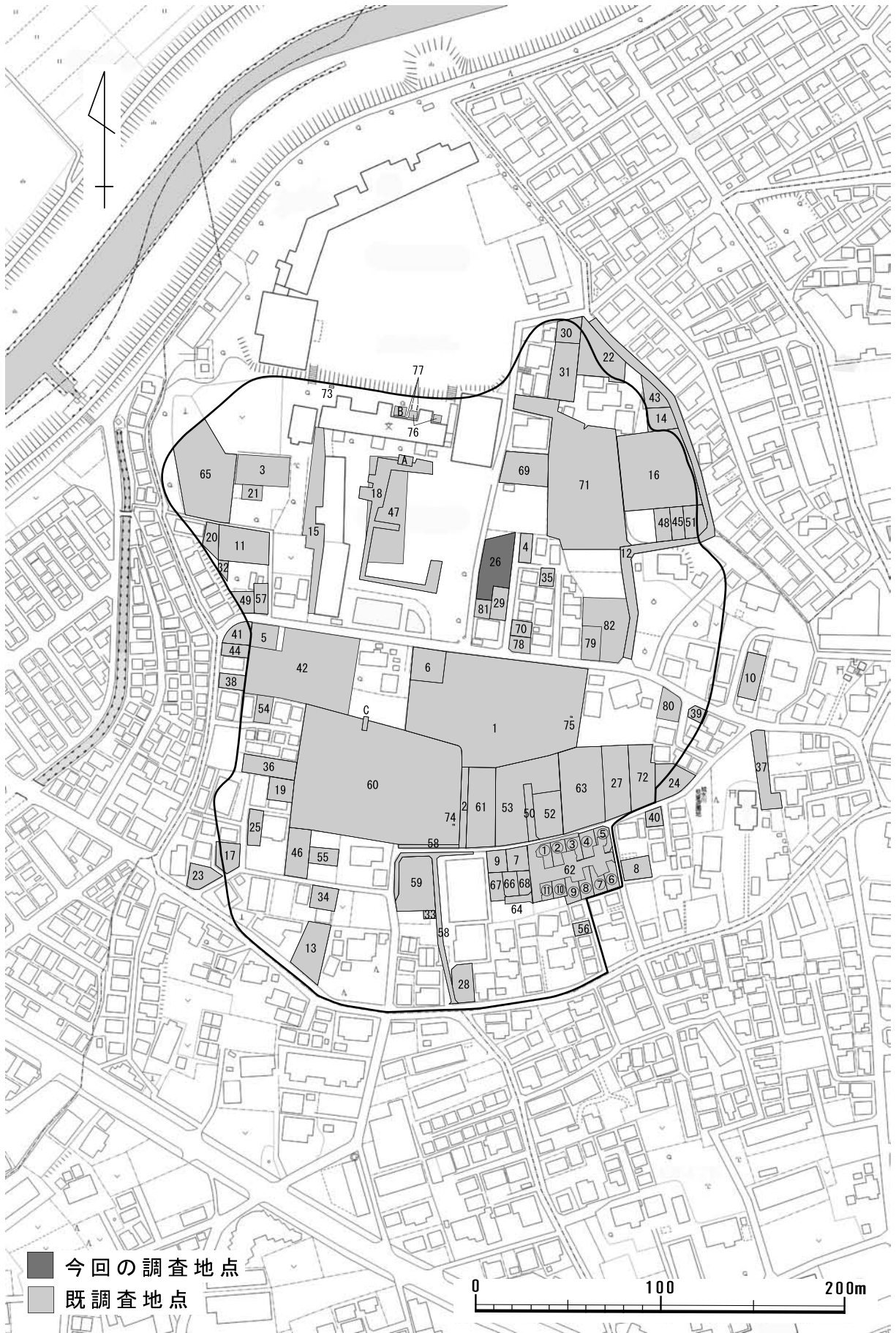
○旧石器時代 石器ブロックは第42地点から2ヶ所、第62地点から1ヶ所が検出されている。

第71地点から礫群2ブロックが検出される。

○縄文時代 第16・22地点から草創期の爪形文系土器1点ずつ出土している。

第21地点から草創期の多縄文系土器3点が出土している。

市指定文化財「城山貝塚」。平成3（1991）年3月29日指定。前期の斜面貝塚。



第2図 城山遺跡の調査地点 (1 / 3,000)

前期の諸磯式期の住居跡が昭和49（1974）年の市史編さん事業における調査において1軒、第59地点から1軒が検出されている。また、第46地点から詳細時期は決定できなかったが、前期末葉の住居跡1軒が検出されている。

第4地点から中期の住居跡1軒が検出されている。時期は加曾利EⅡ式期。

○弥生時代 後期の住居跡4軒。第71地点から住居跡2軒が検出されている。

○古墳時代 前期の住居跡2軒が検出されている。

中期から後期の大量集落。現在、5世紀中葉から7世紀後葉にかけての住居跡の検出数は、220軒を超えている。

○奈良時代 検出される住居跡は大部分が平安時代に比定されるものであり、現在のところ、第1地点から1軒、第71地点から2軒の合計3軒である。

第42地点の1号ピットから偏行唐草文の軒平瓦片1点出土している。

○平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡は、45軒ほど検出されている。

第35地点128号住居跡から、印面に「富」と書かれた銅印が出土している。

第42地点から方形区画の溝を伴う遺構が検出され、溝跡からは中国・同安窯系の青磁碗1点（13世紀前半）出土している。

第62地点241号住居跡から、富壽神寶2枚とその周辺から鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、当地における古代銭貨の受容を示す一例につながった。

※以下の2件は、平成24年3月30日付け市指定文化財。

「城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点」

「城山遺跡241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点」

○中・近世 「柏の城」関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑が多数検出されている。

第1地点では、「三の丸」曲輪に関連する大規模の堀跡と大手門の位置を特定する箇所が判明した。第71地点では、南北に延びる「二の丸」曲輪に関連する中規模の堀跡が検出されている。

第29地点の127号土坑は馬の埋葬土坑が検出されている。

第35地点からは鑄造関連遺構が検出されている。130号土坑は鑄造土坑。134号土坑は溶解炉と考えられる。第71地点でも第35地点の鑄造関連遺構に係る遺物が多数出土している。

[註]

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成6年6月、(株)ダイキハウス(代表取締役 大谷 徹)から志木市教育委員会(以下、教育委員会)へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2618-14、2620-1・13・14(面積410.00㎡)において、共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡(コード1128-09-003)に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講じること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成6年6月30日、教育委員会は、開発者である(株)ダイキハウスより埋蔵文化財確認調査依頼書・発掘届を受理し、8月18日に確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区北半部を中心に柏の城関連のものと思われる大堀跡の一部と古墳時代後期の住居跡1軒を検出した。

教育委員会は、この結果を直ちに開発者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会では、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会(以下、遺跡調査会)を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、(株)ダイキハウスと委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成6年8月18日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。

第2節 発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

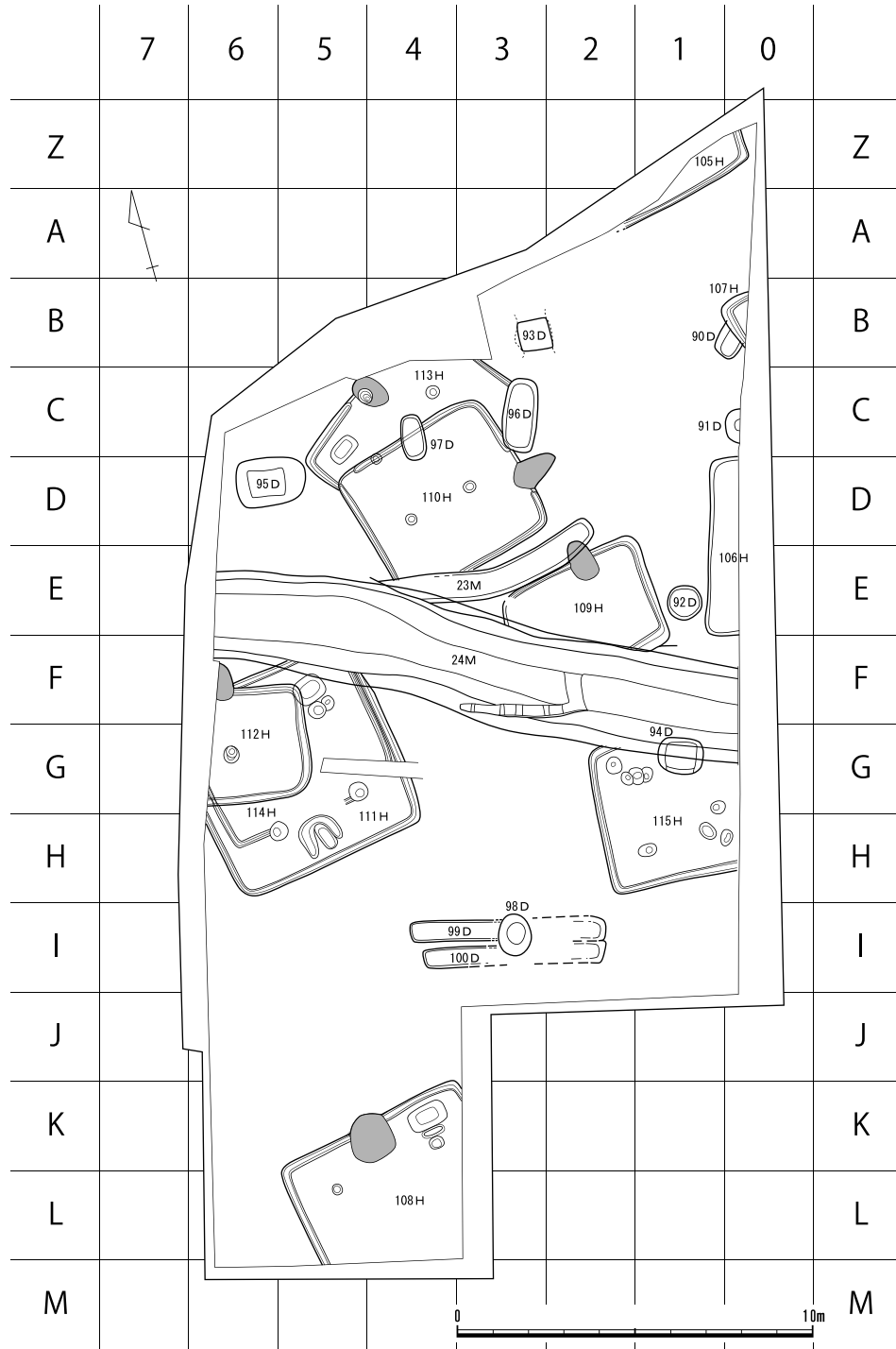
8月18日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。今回は残土搬出作業を行わず、調査区内に残土置場を確保することとし、調査区をほぼ東西に2分し、まず先行して東半部の調査を行

い、終了後に西半部の調査を行う予定とし、20日に終了した。

- 22日 人員導入による発掘作業を開始し、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行ったが、雨天のため、午後2時で作業を中止した。
- 23日 基準点測量を行う。
- 24日 105・107 Hと中世以降の土坑（90 D）の精査を開始する。
- 25日 105・107 Hの精査と併行し、106 Hと中世以降の土坑（93 D）の精査を開始する。
- 29日 93 Dは入口竪坑部を挟み、南北に延びる横坑をもつ地下室（地下坑）であることが判明したが、危険を伴うものと判断したため、写真のみで図面をとることができなかった。さらに24 Mの精査を開始する。この溝跡は、柏の城関連の大堀と考えられる。また、途中溝底面に延びるスロープ状の掘り残し部分が検出されている。
- 9月上旬 105・106 H・93 Dの精査を終了し、調査区南端部の108 Hの精査を開始する。この住居跡については、北壁にカマドを有し、比較的に土器が多く出土している。時期については、出土土器から6世紀中葉に位置付けられる。94・95 Dの精査を開始する。94 Dについては深い遺構であり、1 竪坑 1 主体部の形態をもつ地下室であることが判明した。
- 9月中旬 109・110 Hの精査を継続する。時期は出土土器から109 Hが8世紀後葉、110 Hが9世紀末葉に位置付けられる。108 Hについては、調査範囲をやや拡大することにし、調査を再開する。
- 9月下旬 108～110 Hの精査を継続し、さらに111～113 Hの精査を開始する。112 Hは出土土器から8世紀中葉に位置付けられる。
- 10月上旬 111～113・115 Hの精査を終了する。111 Hについては、床面から壁溝が検出されたことにより、114 Hとした。111・114 Hは同一住居における拡張住居の可能性がある。
- 10月15日 重機による埋戻し作業を開始する。本日は24 Mの埋戻しを終了した。
- 17～20日 埋戻し作業を完了する。

	平成6年8月				9月					10月					
	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日
表土剥ぎ作業	8.18														
基準点測量		8.23													
105 H		8.24													
106 H		8.25													
107 H		8.24													
108 H				9.2											
109 H						9.19									
110 H						9.19									
111 H						9.19			10.3						
112 H										10.6					
113 H										10.6					
114 H												10.12			
115 H												10.13			
90D		8.24													
91D		8.25													
92D				8.31											
93D		8.29													
94D						9.9									
95D						9.6									
96D											10.7				
97D											10.12				
98D															
99D											10.7				
100D										10.5					
23M										10.6					
24M		8.29								10.5					
埋戻し作業												10.15		10.20	

第2表 城山遺跡第26地点の発掘調査工程表



第3図 遺構分布図 (1/200)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

本地点からは、縄文時代のものと思われる土坑1基(92D)を検出した。時代は、出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(2) 土坑

92号土坑

遺構 (第4図)

[位置] (E-1) グリッド。

[検出状況] 106Hと109Hの間から検出され、他の遺構との重複はない。

[構造] 平面形：ほぼ円形。規模：直径0.96m／深さ49cm。壁：80°前後の角度で立ち上がる。坑底はほぼ平坦だが中央部がやや窪む。

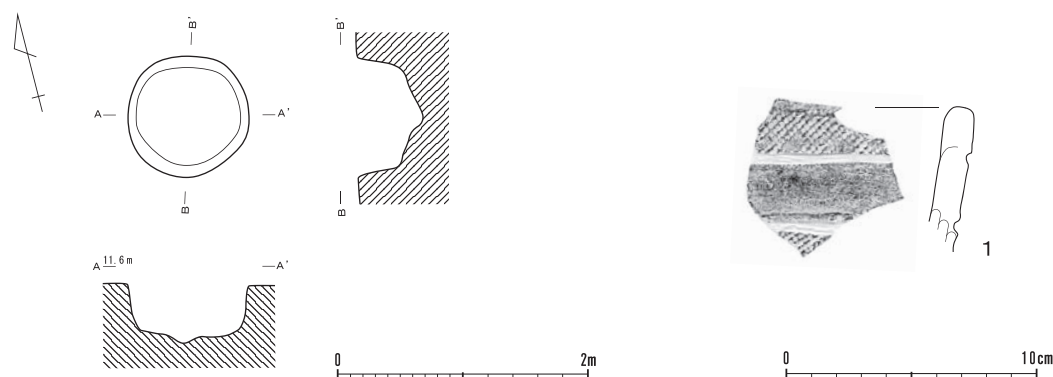
[覆土] 暗茶褐色土。ローム粒子を含む。

[遺物] 土器1点が出土した。

[時期] 縄文時代後期前葉。

遺物 (第4図1)

沈線と縄文LRによる帯縄文が施文される口縁部片である。色調は7.5YR6/4にぶい橙色を基調とする。胎土には砂粒を顕著に含む。称名寺I式であろう。



第4図 92号土坑・出土遺物(1/60・1/3)

第2節 古墳時代後期

(1) 概要

古墳時代後期の遺構については、後期の住居跡7軒（105・107・108・111・113～115H）が検出された。住居跡の分布は、調査区全域に広がっており、調査区北半部では数軒が重複する状況である。住居跡の時期については、105・107・108・111・114Hの5軒が6世紀中葉、113・115Hの2軒が7世紀中葉に比定できるであろう。なお、111Hと114Hについては、別住居番号を付けているが、同一住居における拡張住居の可能性がある。

出土遺物として特筆すべきは、113Hから耳環（金環）1点が出土したことである。

(2) 住居跡

105号住居跡

遺 構 (第5図)

[位 置] (Z・A-0～2) グリッド。

[検出状況] 大部分が調査区域外にあり、南東コーナー付近のみの検出である。

[構 造] 平面形：方形か。規模：不明／確認面からの深さ23～44cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：上幅14～24cm／下幅4～14cm／深さ6～10cm。床面：硬化しており、ほぼ直床である。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：確認できなかった。

[覆 土] 上層がローム粒子を含む黒褐色土、下層がローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺 物] 土器小破片が僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

[時 期] 古墳時代後期（6世紀中葉か）。

107号住居跡

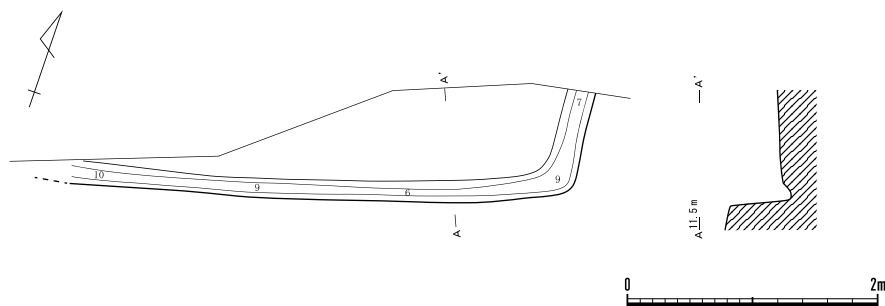
遺 構 (第6図)

[位 置] (B-0) グリッド。

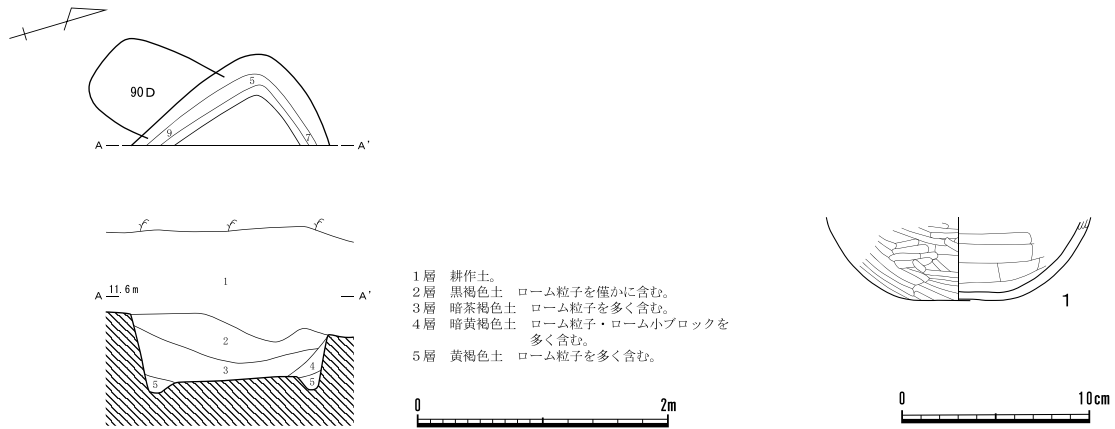
[検出状況] ほとんどが調査区域外であるため、西コーナーのみの検出である。90Dに切られる。

[構 造] 平面形：方形か。規模：不明／確認面からの深さ46～56cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

長軸方位：不明。壁溝：上幅22～29cm／下幅6～10cm／深さ5～9cm。カマド：確認できなかった。



第5図 105号住居跡（1／60）



第6図 107号住居跡・出土遺物（1/60・1/4）

貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：確認できなかった。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 土師器埴形土器1点が出土した。

[時 期] 古墳時代後期（5世紀後葉か）。

遺 物（第6図1、第3表）

[土 器]（第6図1、第3表）

土師器埴形土器と思われる。

108号住居跡

遺 構（第7～9図）

[位 置]（K・L-4・5）グリッド。

[検出状況] 南半部は調査区域外である。

[構 造] 平面形：方形。規模：5.62m／不明／確認面からの深さ41～48cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では、カマドを除き巡らされていた。上幅18～24cm／下幅6～14cm／深さ9～16cm。床面：カマド前面と南側の一部に硬化した面が確認できた。カマド：北壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-5°-W。長さ130cm／幅110cm／壁への掘り込み32cm。袖部と天井部は灰褐色粘土で構築されていたと思われる。燃焼部と思われる被熱した部分が35×50cmの範囲で確認できた。貯蔵穴：カマドの右側に位置する。平面形は長方形。長軸108cm／短軸63cm／深さ114cm。柱穴：主柱穴は4本と思われるが、検出されたのはP1とP2の2本である。深さ99・95cm。

[覆 土] 7層に分層できた。

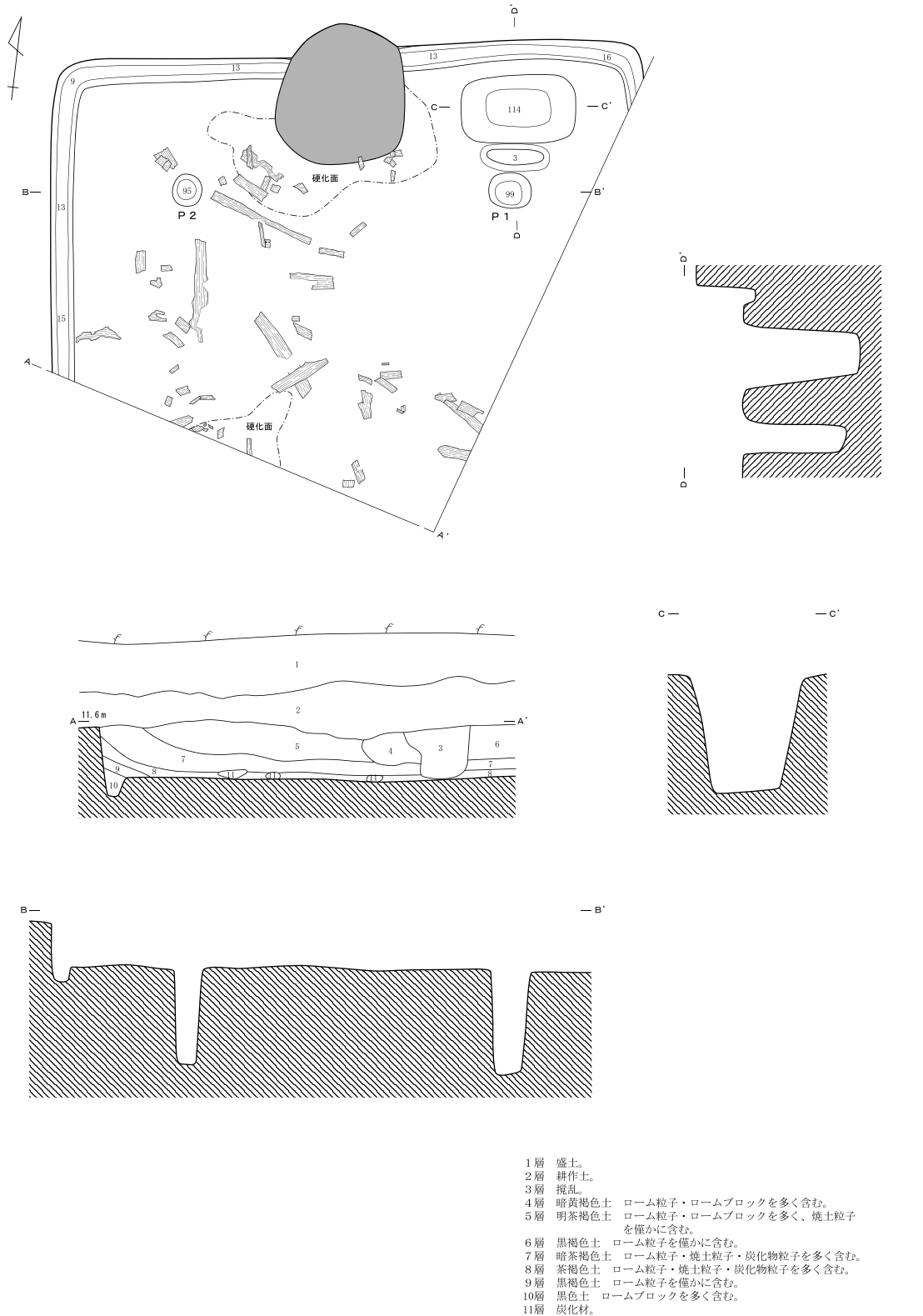
[遺 物] 土師器坏・壺・鉢・甕・甑形土器、土製品（支脚）が出土した。なお、支脚については、被熱による遺存状態が悪く、取り上げることができなかった。

[時 期] 古墳時代後期（6世紀中葉）。

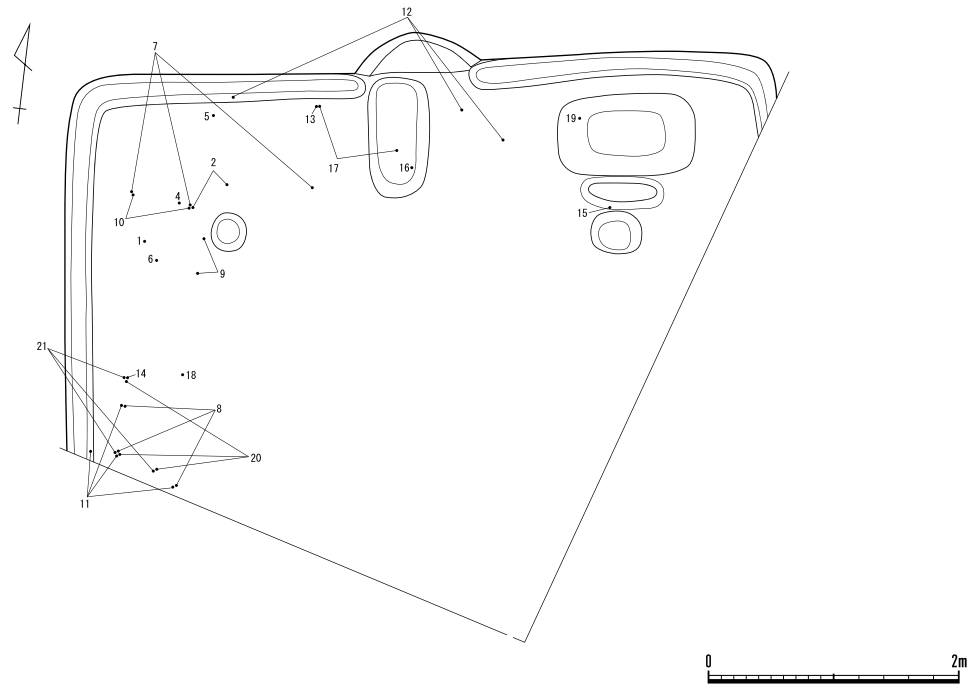
[所 見] 炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と思われる。

遺 物（第10～12図、第4表）

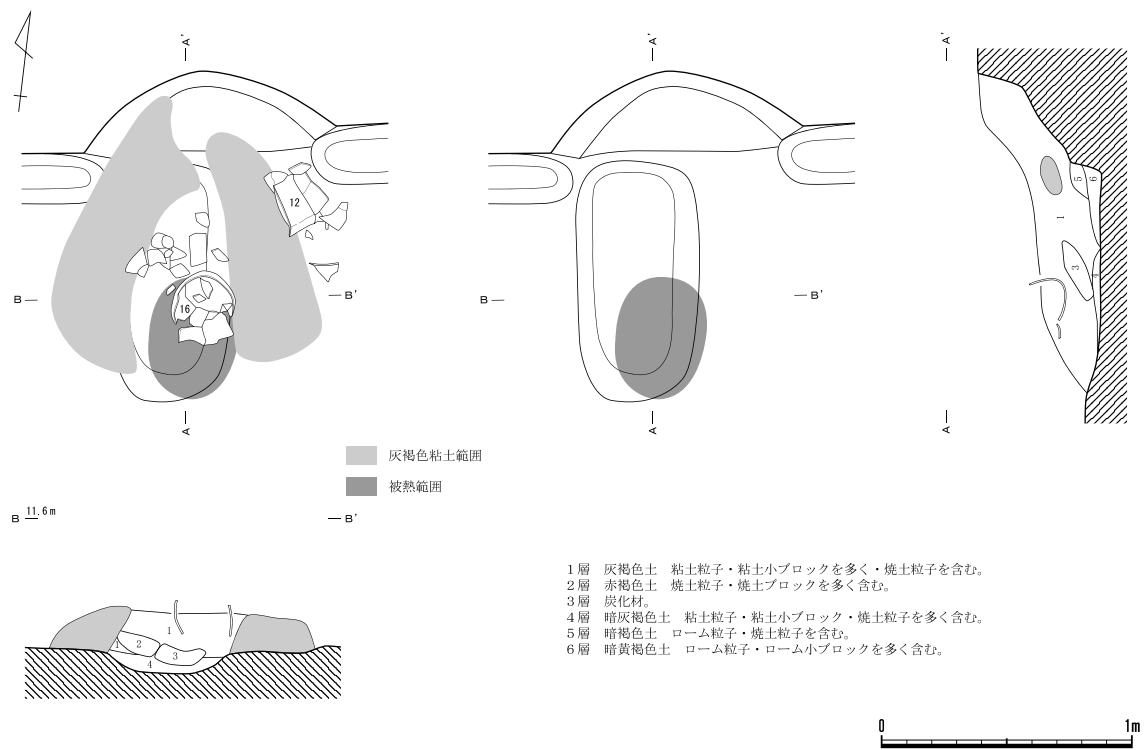
[土 器] 第10図1～10、第11図11～16、第12図17～21、第4表）



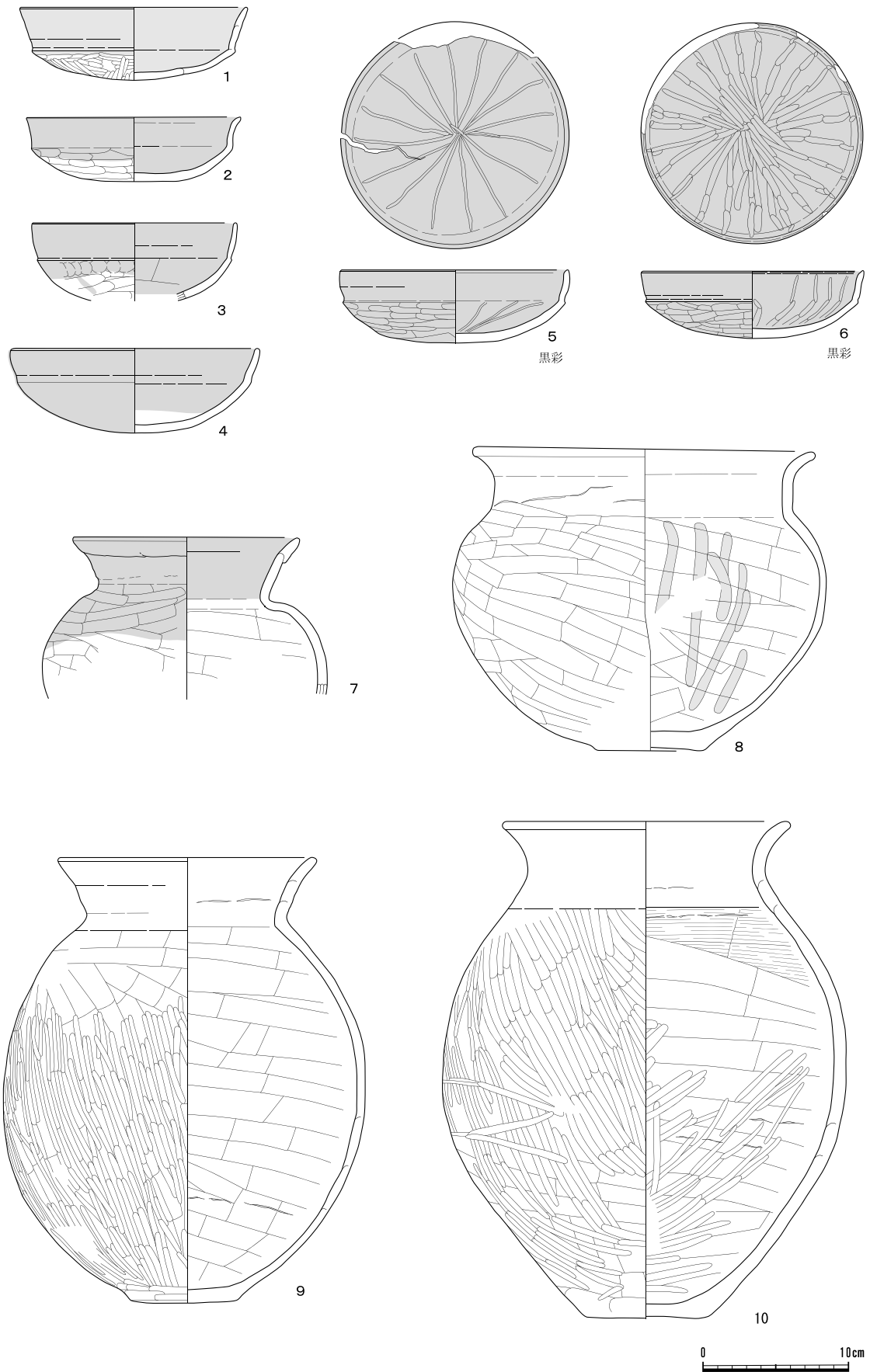
第7図 108号住居跡(1/60)



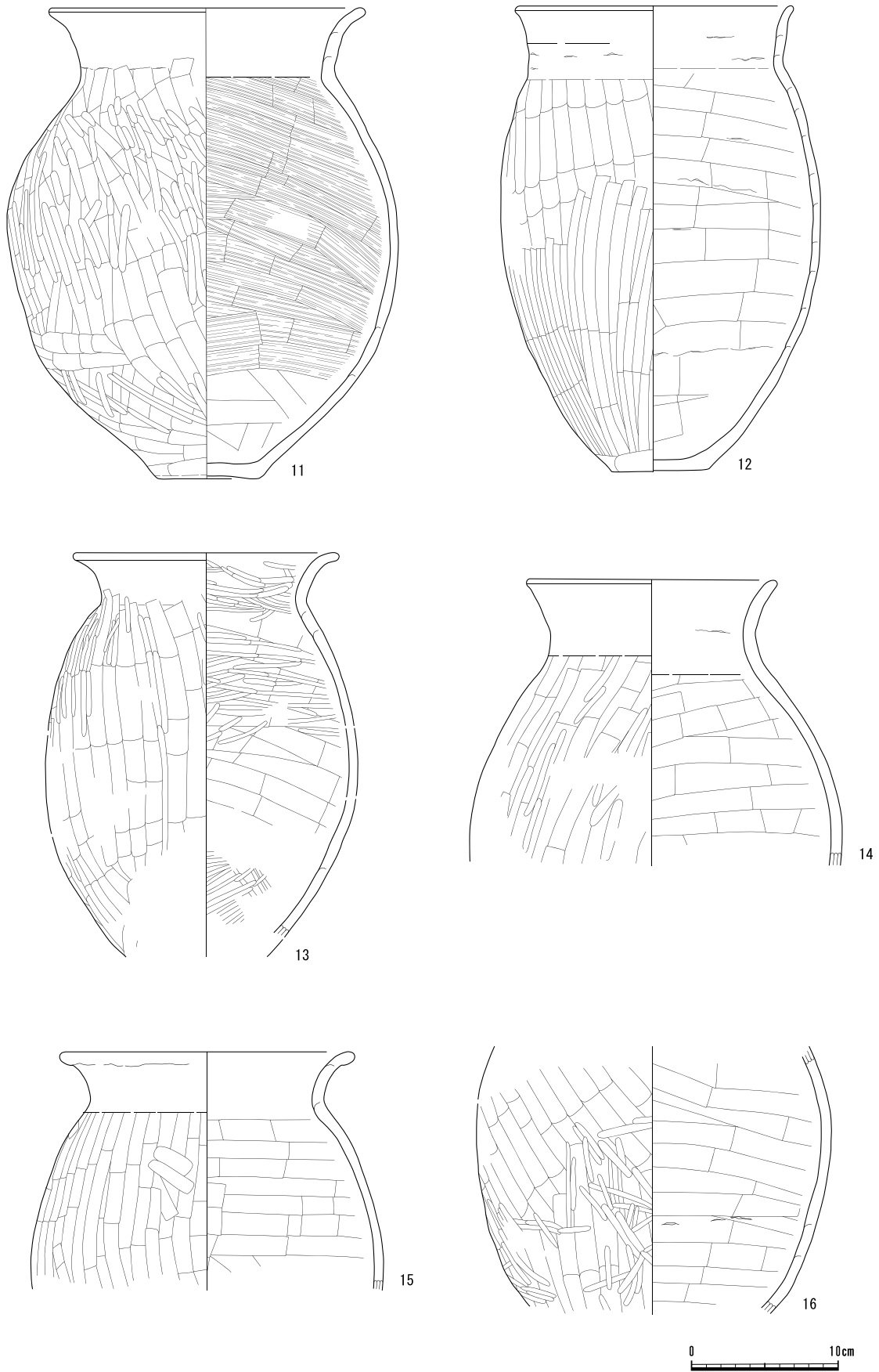
第8図 108号住居跡遺物出土状態 (1/60)



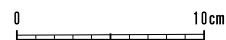
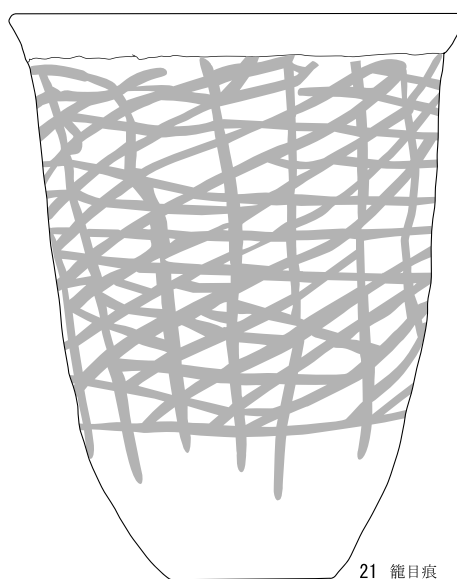
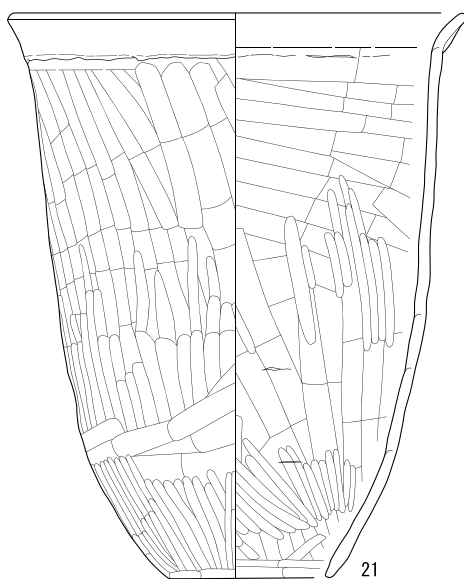
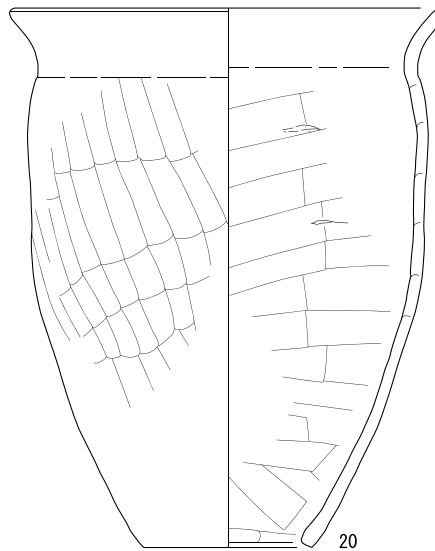
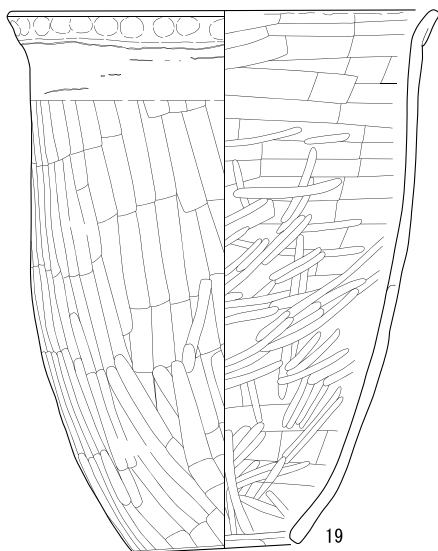
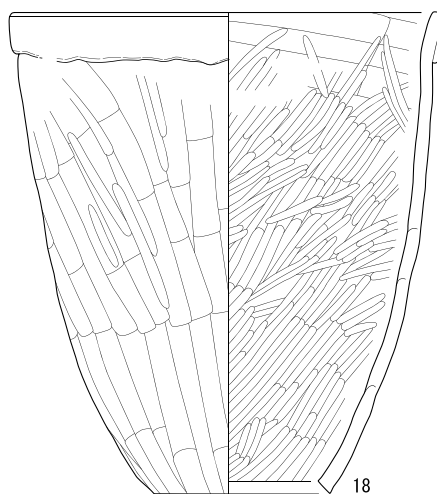
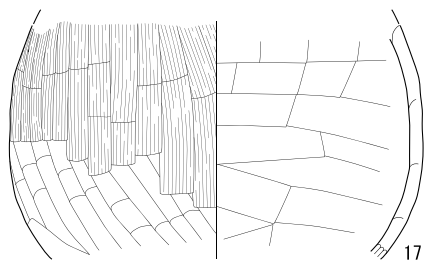
第9図 108号住居跡カマド (1/30)



第10図 108号住居跡出土遺物1 (1/4)



第11図 108号住居跡出土遺物2 (1/4)



第12図 108号住居跡出土遺物3 (1/4)

1～6は土師器坏形土器、7は土師器壺形土器、8は土師器鉢形土器、9～17は土師器甕形土器、18～21は土師器甑形土器である。特に21の土師器甑形土器は、表面に格子目状の籠目痕が見られ、大変珍しいものである。

111・114号住居跡

遺 構 (第13図)

[位 置] (F～H・4～6) グリッド。

[検出状況] 調査時において、2軒の住居跡として取り扱われたが、114Hは拡張前住居の可能性がある。112H・24Mに切られる。

[構 造] 平面形：正方形。規模：長軸（東西）5.80m／短軸（南北）5.74m／確認面からの深さ33～46cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N－80°－E。壁溝：111Hは確認できた範囲では巡らされていた。上幅15～18cm／下幅6～12cm／深さ10～18cm。114Hでは南西コーナー付近と東側で確認された。上幅15～18cm／下幅4～8cm／111H床面からの深さ10～20cm。床面：図示した部分が硬化していた。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：北東コーナー寄りに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸88cm／短軸73cm／深さ61cm。柱穴：P1～P4の4本が支柱穴と思われる。深さ76～87cm。P6は住居に伴うものか不明である。入口施設：P5は周囲に高さ2～3cmの凸堤が巡らされているため入口施設に伴うものと考えられる。

[覆 土] 10層に分層できた。

[遺 物] 須恵器坏蓋形土器、土師器坏・甕形土器が出土した。

[時 期] 古墳時代後期（6世紀中葉）。

[所 見] 2軒の住居跡として取り扱ったが、111・114Hは拡張住居である可能性があるため、遺物の混在が考えられる。特に、本住居跡の時期を3・4の土師器坏形土器と5・6の土師器甕形土器から、6世紀中葉としたが、1の須恵器坏蓋形土器は湖西製品（湖西Ⅲ期）であることから、7世紀後葉に比定でき、時期的に符号しない。2の土師器坏形土器は5世紀後葉に比定できるものか。

遺 物 (第14図、第5表)

[土 器] (第14図1～6、第5表)

1は須恵器坏蓋形土器、2～4は土師器坏形土器、5・6は土師器甕形土器である。

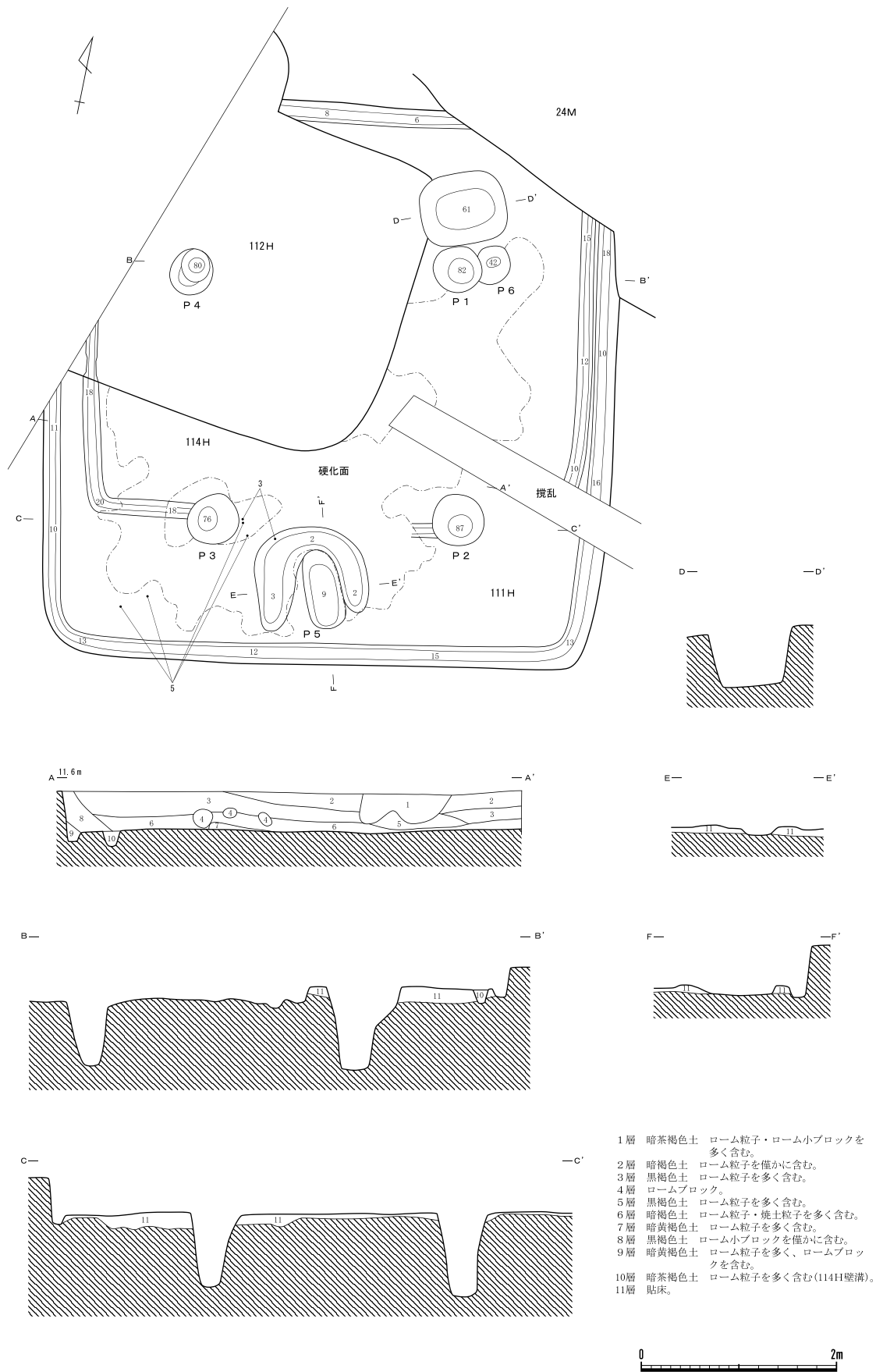
113号住居跡

遺 構 (第15図)

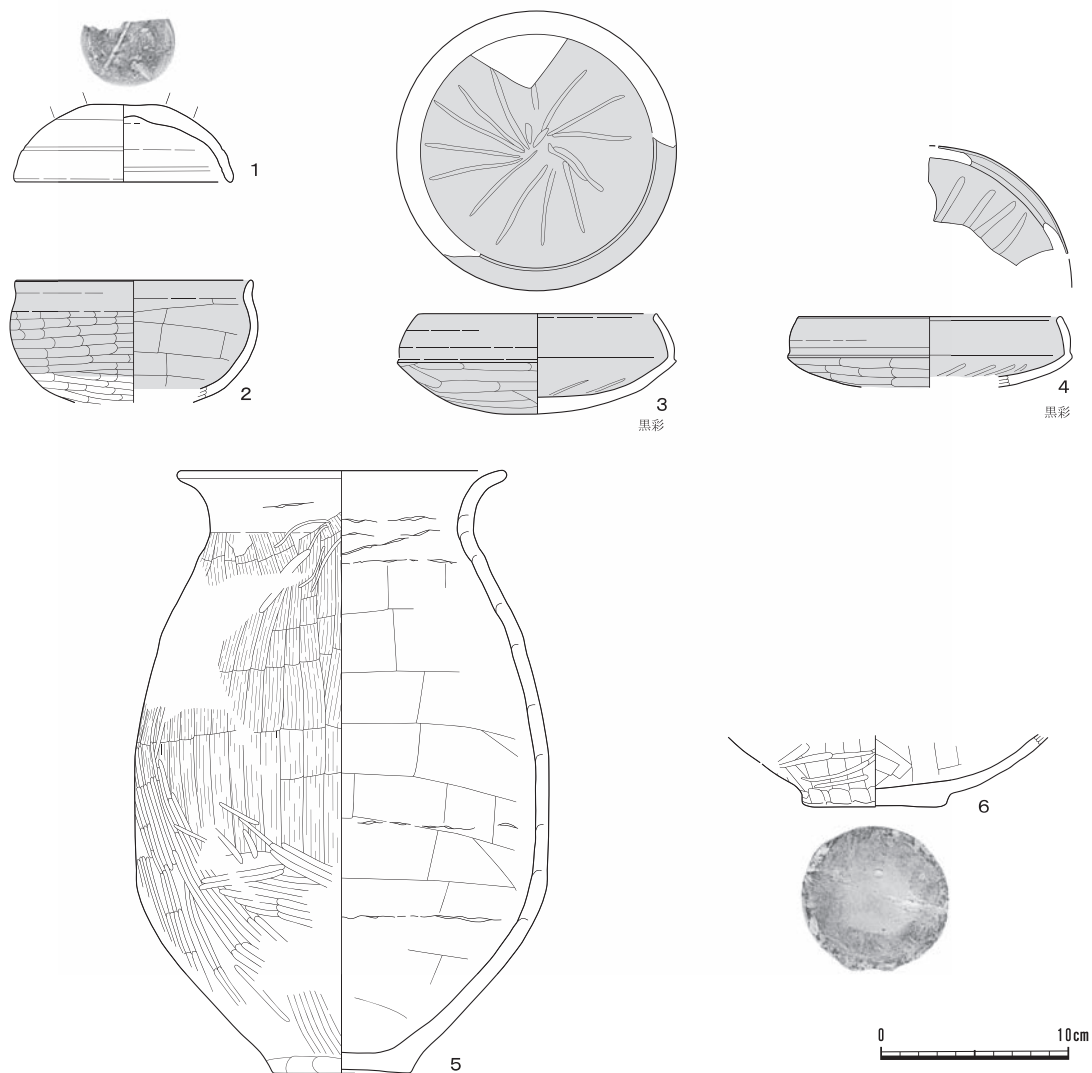
[位 置] (C・D－3～5) グリッド。

[検出状況] 北コーナー付近は調査区域外であり、さらに110H・96D・97Dに切られている。

[構 造] 平面形：方形。規模：5.40m／不明m／確認面からの深さ30～39cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲ではカマドを除き巡らされていた。上幅12～26cm／下幅4～11cm／深さ8～18cm。床面：図示した部分が硬化していた。ほぼ直床と思われる。カマド：北西壁のほぼ中央に位置するものがカマドと思われるが、後世のピットに壊されているため遺存状態は良くなかった。長さ106cm／幅70cm／壁への掘り込み20cm。貯蔵穴：西コーナーに位置する。平面形は長方形。長軸83cm／短軸50cm／深さ70cm。土器が出土している。柱穴：支柱穴は4本と思わ



第13図 111・114号住居跡 (1/60)



第14図 111号住居跡出土遺物（1／4）

れるが、そのうちの2本しか確認できなかった。P 2は110 Hの貼床下からの検出である。床面からの深さ44cm。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 須恵器坏身形土器、土師器坏・甕・甕形土器、耳環（金環）1点が出土した。

[時 期] 古墳時代後期（7世紀中葉）。

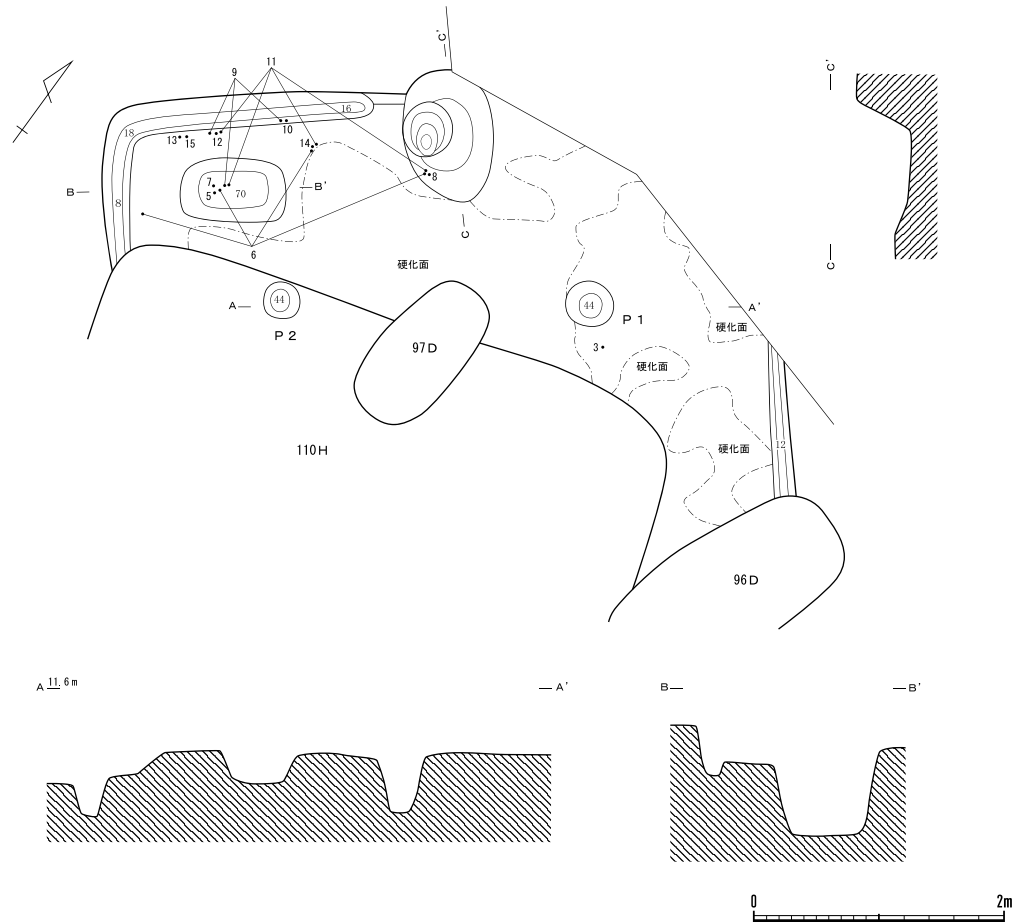
遺 物（第16・17図、第6表）

[土 器]（第16図1～9、第17図10～15、第6表）

1は須恵器坏身形土器、2・3は土師器坏形土器、4～14は土師器甕形土器、15は土師器甕形土器である。4は小型丸甕として扱った。

[金属製品]（第17図16）

耳環（金環）である。やや横長の環状を呈し、大きさは長径3.1cm・短径2.8cm・厚さ0.9cm・重さ27.8gである。遺存状態は、本体の銅部分の酸化が見られるが、メッキ状態も含め全体的にやや良好であろう。覆土中からの出土で、完形品である。



第15図 113号住居跡 (1/60)

115号住居跡

遺 構 (第18図)

[位 置] (G・H-0~2) グリッド。

[検出状況] 北側は94D・24Mに切られ、東側は調査区域外である。

[構 造] 平面形：方形。規模：不明/確認面からの深さ20~40cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅20~28cm/下幅6~16cm/深さ7~10cm。床面：壁際を除いて硬化した面が確認できた。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。

柱穴：主柱穴は4本と思われるが、確認できたのはP1・P2の2本である。深さ52・46cm。

[覆 土] 上層がローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土、中層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層がローム粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土。

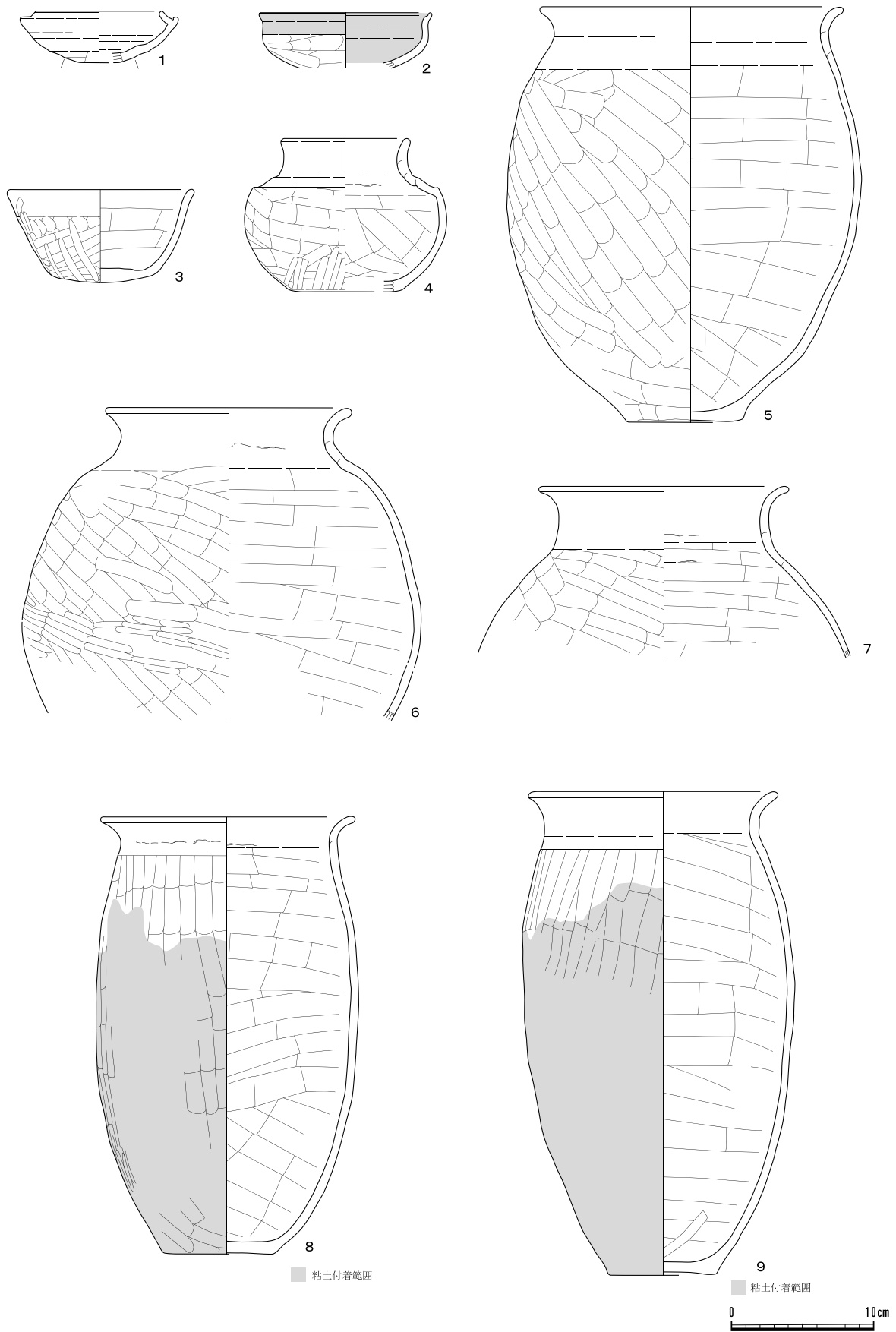
[遺 物] 土師器坏・鉢・甕形土器、炭化種実(モモと思われる)1点が出土した。

[時 期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

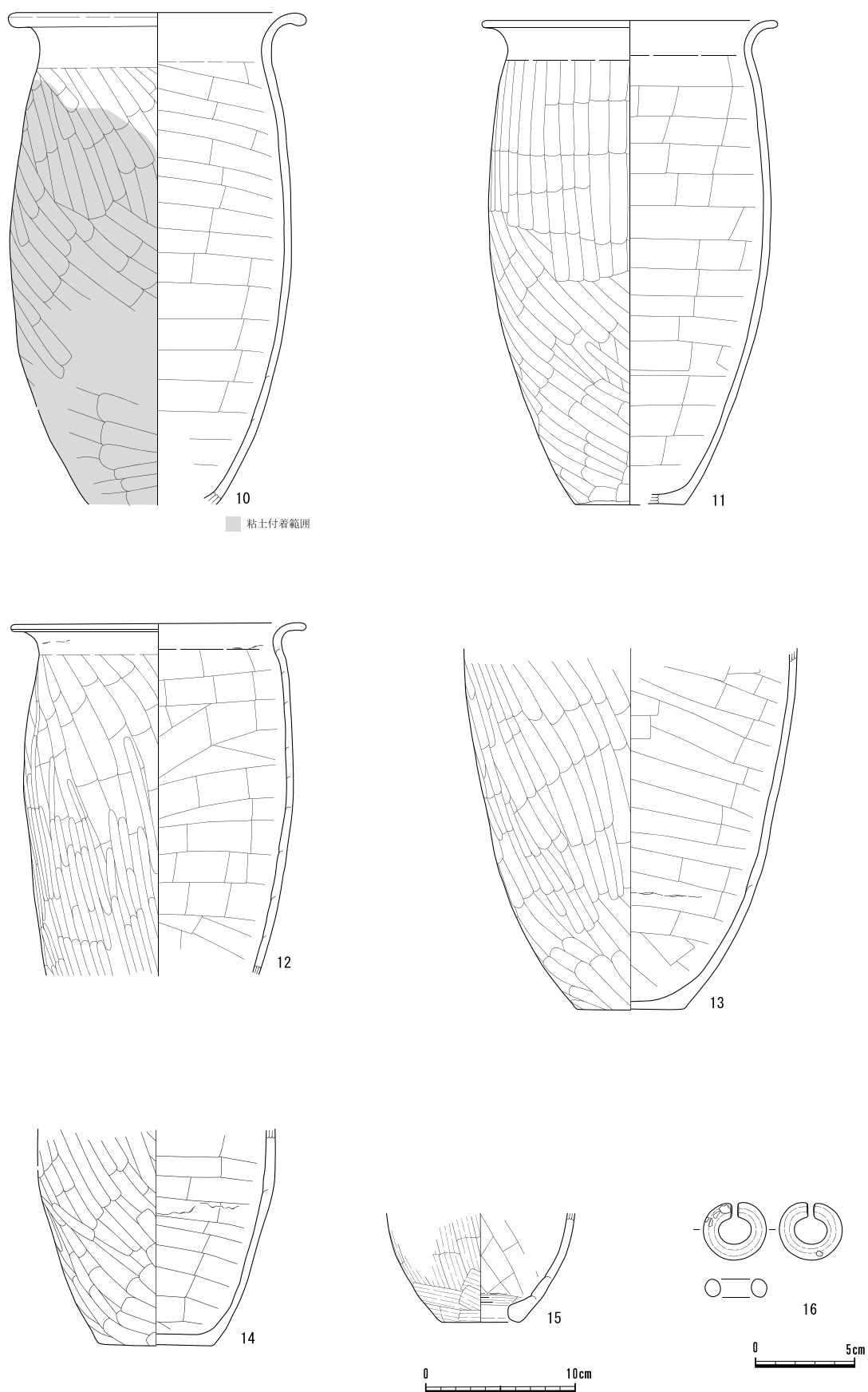
遺 物 (第19図、第7表)

[土 器] (第19図1~6、第7表)

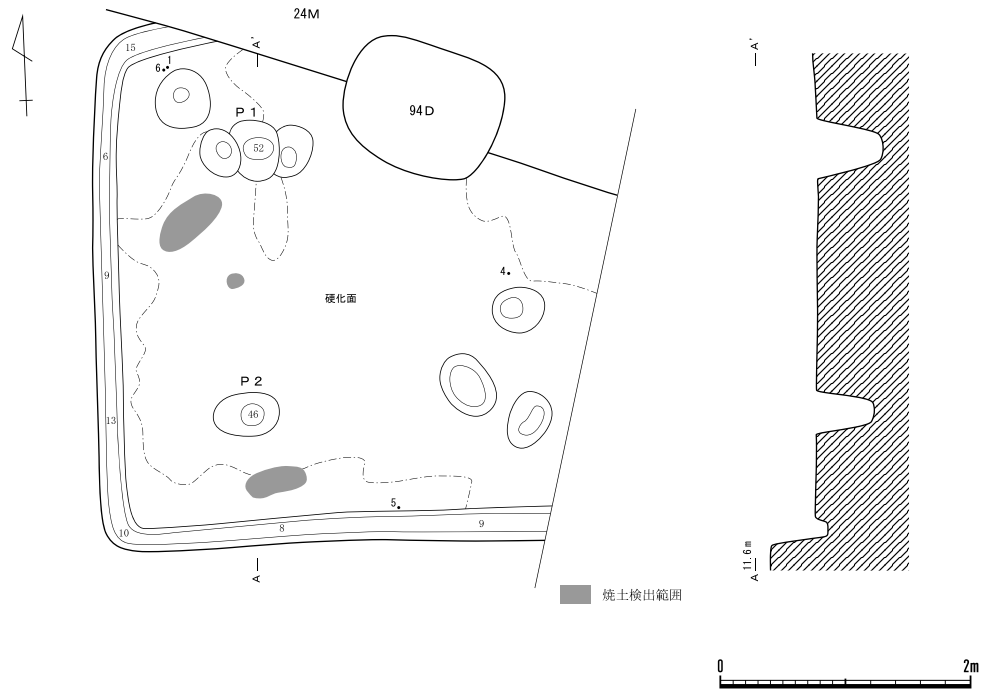
1~3は土師器坏形土器、4は土師器鉢形土器、5・6は土師器甕形土器である。



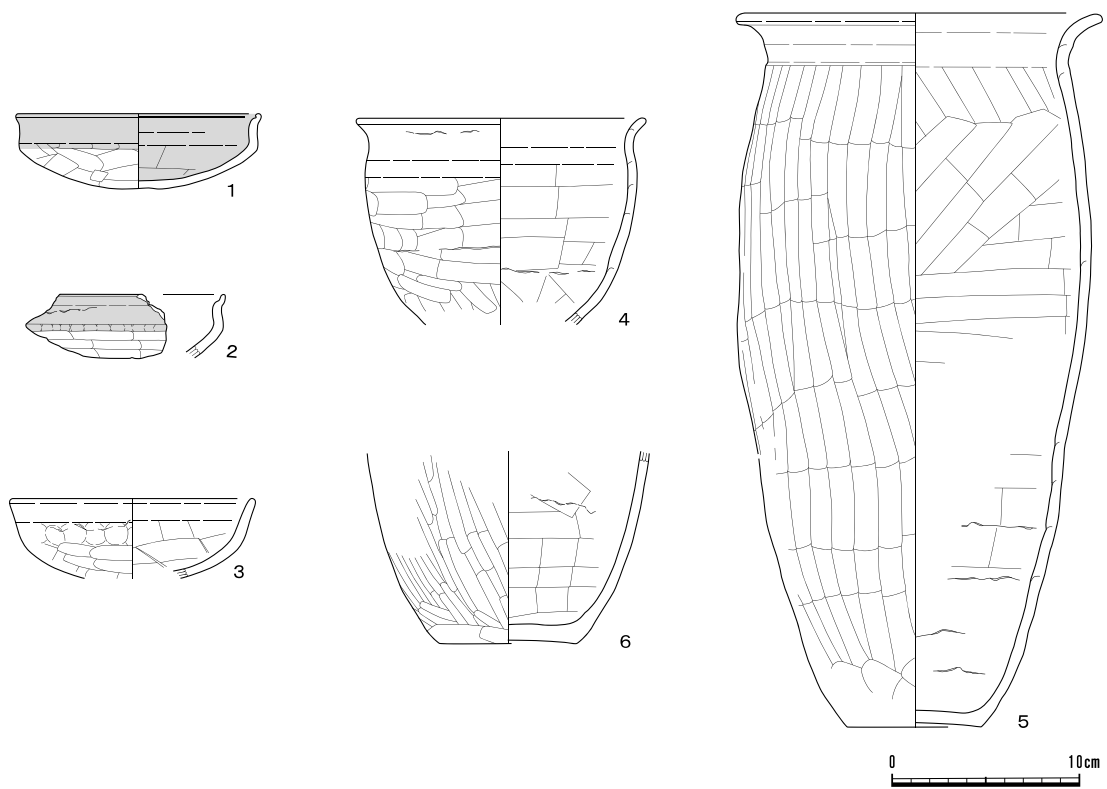
第16図 113号住居跡出土遺物1 (1/4)



第17図 113号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第18図 115号住居跡 (1 / 60)



第19図 115号住居跡出土遺物1 (1 / 4)

第3章 検出された遺構と遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第6図1	土師器 壺?	(4.4)	—	—	埴の可能性あり/口縁部を欠損/深身タイプ/底部はやや平底気味/外面は赤彩か	色調は暗褐色を基調	砂粒をやや多く、石英を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後ヘラ磨き調整	覆土中	体部中位～底部50%

第3表 107号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図1	土師器 杯	5.0	(15.6)	—	大型有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境は段を有する/薄手で精巧な作りの土器/内面及び外面口縁部は赤彩/黒斑後に赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北西コーナー付近の覆土中	30%
第10図2	土師器 杯	4.4	14.6	—	大型有段杯/口縁部は外反する/口縁部と底部との境は弱い段を有する/内面及び外面口縁部は赤彩/黒斑後に赤彩/入間系土師器	胎土は淡赤褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北西コーナー付近の覆土中	80%
第10図3	土師器 杯	(5.2)	14.0	—	大型有段杯/口縁部はやや内湾気味に外傾する/口縁部と底部との境は段を有する/内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は淡黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・石英を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が観察できる	覆土中	20%以下
第10図4	土師器 杯	5.8	17.0	—	大型有段杯/口縁部はやや内湾気味に外傾する/口縁部と底部との境は段を有する/内面底部を除き赤彩/外面は剥離が著しく調整が不明/入間系土師器か	胎土は暗赤褐色～淡茶褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部は剥離が著しく不明	北西コーナー付近の覆土中	完形品
第10図5	土師器 杯	5.0	15.4	—	大型有段杯/口唇部は面取りされる/口縁部は途中稜をもち直立する/口縁部と底部との境は段を有する/内面底部に放射状の暗文あり/精巧な作りの土器/全面黒彩/北関東系	胎土は淡茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデ)、/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北西コーナー北壁近くの床面上	90%
第10図6	土師器 杯	4.6	15.0	—	大型有段杯/口唇部はややシャープに面取りされる/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境は段を有する/内面底部に放射状の暗文あり/精巧な作りの土器/全面黒彩/北関東系	胎土は淡茶褐色	砂粒を含む	内面：横ナデ(回転ナデ)、/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北西コーナー柱穴の西側の床面上	90%
第10図7	土師器 壺	(10.3)	15.6	—	複合口縁/頸部は外傾する/最大径は胴部上半にもつ/外面口縁部～胴部上半及び内面口縁部は赤彩/内面は全面黒く煤けているが、赤彩はその後に施されていることが観察できる/入間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面：口頸部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口頸部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデか	北西コーナー付近の覆土中	口縁部～胴部中位70%

(単位：cm)

第4表 108号住居跡出土遺物一覧(1)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図8	土師器鉢	20.6	23.3	7.3	口縁部は「コ」の字状／最大径は胴部上半にもつ／内外面黒く焼けており黒色系土器の可能性あり／内面には液体が垂れたような細長い痕跡が見られる	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	西壁近くの覆土中～床面上	80%
第10図9	土師器甕	30.4	17.7	7.5	「く」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／底部は丸底気味／精巧な作りの土器／外面胴部中位以下は黒く焼けている	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ、その後胴部中位以下はヘラ磨き調整	北西コーナー柱穴の西側の床面上	90%
第10図10	土師器甕	34.0	(19.6)	8.7	口縁部は外反する／最大径は胴部上半～中位にもつ／全体に黒く焼けている	淡茶褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ、その後胴部中位以下は粗いヘラ磨き調整、口縁部直下にハケ目痕が残る／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラ磨き調整	北西コーナー付近の覆土中	50%
第11図11	土師器甕	31.8	21.4	6.9	口縁部は外反する／最大径は胴部上半～中位にもつ／全体に黒く焼けている	淡茶褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗いハケ目調整（ハケナデ？）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	西壁近くの覆土中～床面上	70%
第11図12	土師器甕	31.5	18.8	6.6	口縁部は直立気味に外傾する／最大径は胴部中位にもつ／底部は平底	淡黄褐色～暗橙色	砂粒・小石をやや多く、角閃石・雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面胴部中位以下のヘラ削りは下方でやや細長い	カマド内及び北壁寄りの床面上	80%
第11図13	土師器甕	(27.3)	18.0	—	「く」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／胴部下半の一部に縄目の弱い圧痕が観察できる	淡黄褐色～暗橙色	砂粒・小石をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ後横方向に粗いヘラ磨き調整、以下はヘラナデ後横方向に粗いヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後縦方向に粗いヘラ磨き調整	カマド内及び袖部左側の床面上	口縁部～胴部下半 60%
第11図14	土師器甕	(19.2)	17.0	—	口縁部は外反する／最大径は胴部中位にもつ／全体に黒く焼けている	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後縦方向に粗いヘラ磨き調整	西壁近くの覆土	口縁部～胴部中位 30%
第11図15	土師器甕	(16.0)	(20.0)	—	壺であろうか／複合口縁／口縁部は外反する／最大径は胴部中位にもつ／全体に黒く焼けている	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	西壁近くの覆土中	口縁部～胴部中位 70%
第11図16	土師器甕	(18.1)	—	—	壺であろうか／最大径は胴部上半にもつ／外面赤彩か	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・小石を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド内	胴部上半～下半 80%
第12図17	土師器甕	(12.6)	—	—	壺であろうか／最大径は胴部中位にもつ／遺存状態がやや不良で外面の調整は不鮮明／外面赤彩か	胎土の色調は淡黄褐色	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：口縁部上半はハケ目調整、以下はヘラ削り	カマド内及び袖部左側	胴部上半～下半 40%

(単位：cm)

第4表 108号住居跡出土遺物一覧(2)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第12図18	土師器 甗	25.5	23.0	9.3	底部は筒抜け式／口縁部は複合口縁／最大径は口縁部にもつ	暗茶褐色を基調	砂粒・小石をやや多く含む	内面：ヘラナデ後斜方向に粗いヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上半は上方向にヘラナデ、その後粗いヘラ磨き調整か	西壁近くの覆土中～床面上	70%
第12図19	土師器 甗	28.8	23.0	9.0	底部は筒抜け式／口縁部は複合口縁／最大径は口縁部にもつ	暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ後斜方向に粗いヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（ハケナデ？）／外面複合部には指頭による押捺痕が観察できる	貯蔵穴内	ほぼ完形品
第12図20	土師器 甗	28.6	(23.0)	(9.0)	底部は筒抜け式／口縁部は単純口縁部で外反する／最大径は口縁部にもつ	暗黄褐色を基調	白色粒子・砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（ハケナデか？）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	西壁近くの覆土中～床面上	40%
第12図21	土師器 甗	30.0	24.3	8.6	底部は筒抜け式／口縁部は複合口縁／最大径は口縁部にもつ／全体的に黒く煤けている／外面胴部には樽状の籠目痕が観察できる	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後斜方向に粗いヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（ハケナデ？）	西壁近くの覆土中～床面上	90%

第4表 108号住居跡出土遺物一覧（3）

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第14図1	須恵器 环蓋	4.0	(11.5)	—	天井部径4.2cm／天井部と口縁部との境には沈線が回る／湖西製品	暗灰色	黒色粒子・白色砂粒を含む	ロクロ成形／ロクロ回転は左回転か／外面天井部には周辺ヘラ削り／天井部には線状の圧痕か	覆土中	50%
第14図2	土師器 环	(6.6)	(12.6)	—	深身タイプ／口縁部は短く外反する／最大径は体部上半にもつ／外面底部を除き赤彩	胎土は淡茶褐色	黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は横方向のヘラ磨き調整	覆土中	20%
第14図3	土師器 环	15.3	12.7	—	大型有段环／須恵器环身模倣／受部径14.8cm／全面黒彩／内面には放射状の暗文あり／北関東系	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	南西コーナー柱穴付近の床面上	70%
第14図4	土師器 环	(3.7)	(13.8)	—	大型有段环／須恵器环身模倣／受部推定径15.0cm／全面黒彩／内面には放射状の暗文あり／北関東系	胎土は淡暗褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ（回転ナデか）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	20%以下
第14図5	土師器 甗	31.5	(17.4)	7.5	口縁部は外反する／最大径は胴部下半にもつ／底部は平底／外面胴部中位以下は黒く煤けている	暗茶褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部は上半～中位はハケ目調整、下半は粗いヘラ磨き調整	南西コーナー付近の床面上	60%
第14図6	土師器 甗	(3.8)	—	7.6	底部は輪台状に中央がやや窪んでいる／外面に黒斑あり	暗黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	覆土中	胴部下半～底部60%

(単位：cm)

第5表 111・114号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第16図1	須恵器 坏身	(3.6)	(8.8)	—	受部径11.0cm/口唇部は丸い/受部と口縁部との境には沈線がまわる/湖西製品と思われる	灰褐色を基調/やや酸化した部分は淡茶褐色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/外面底部は回転ヘラ削り	覆土中	25%
第16図2	土師器 坏	(3.9)	(12.0)	—	いわゆる比企型坏/口縁部は短く外反する/口唇部内面に沈線あり/内面及び外面口縁部赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石をく含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	40%
第16図3	土師器 坏	6.5	13.0	—	深身の堦タイプ/口縁部は僅かに外反する/平底気味/在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後斜方向の粗いヘラ磨き調整か?、口縁部直下は指頭押捺による成形痕あり	P1の南東の床面上	ほぼ完形品
第16図4	土師器 壺	10.7	(9.0)	(7.6)	小型丸甕の類か/口縁部は直立気味に外反する/胴部上半に最大径をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り、底部は縦方向のヘラ磨き調整か	覆土中	40%
第16図5	土師器 甕	29.0	21.2	8.1	長甕/底部は平底/外面は黒く焼けている/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後縦方向の粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴内	胴部下半～底部30%
第16図6	土師器 甕	(21.8)	(17.2)	—	丸甕/口縁部は大きく外反する/最大径は胴部中位にもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後胴部中位に粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴内及びその周辺の床面上	口縁部～胴部下半40%
第16図7	土師器 甕	(11.9)	17.4	—	丸甕/口縁部は大きく外反し、やや「コ」の字状/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下は斜方向のヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴内	口縁部～胴部中位30%
第16図8	土師器 甕	30.6	17.7	7.6	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径をもつ/底部は平底/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	西コーナーの北西壁近くの床面上	90%
第16図9	土師器 甕	33.6	17.4	7.5	長甕/口縁部は外反する/胴部上半に最大径をもつ/底部は平底/外面胴部上半以下には粘土付着/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びカマド内	90%
第17図10	土師器 甕	(32.6)	19.8	—	長甕/口唇部は丸く肥厚する/口縁部は外反する/口縁部に最大径をもつ/外面胴部上半以下には粘土付着/在地系土師器	暗黄褐色～明橙色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	北西壁の壁溝上層	口縁部～底部80%(底部欠損)
第17図11	土師器 甕	32.1	19.6	7.3	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径をもつ/底部は平底/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴内及び北西壁近くの床面上	70%

(単位：cm)

第6表 113号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図12	土師器 甕	(23.2)	19.6	—	長甕／口縁部は外反する／口縁部に最大径をもつ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、石英・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）、胴部下半には細長く粗いヘラ磨き調整	西コーナー北西壁近くの床面上	口縁部～胴部下半 80%
第17図13	土師器 甕	(24.0)	—	7.2	長甕／底部は平底／内面底部はやや丸底気味／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	西コーナーの床面上	胴部中位～底部 50%
第17図14	土師器 甕	(14.3)	—	7.4	長甕／底部は平底／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒やや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：ヘラナデ／外面：胴部中位は斜方向のヘラナデ、下半はヘラ削り	カマド左横の北西壁近くの床面上	胴部中位～底部 60%
第17図15	土師器 甕	(7.3)	—	5.5	小型甕／底部は筒抜け式／底部はやや肥厚	淡黄褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石をやや多く含む	内面：胴部下半はヘラナデ、底部付近はハケ目調整／外面：粗いハケ目調整	西コーナーの床面上	胴部下半～底部 60%

第6表 113号住居跡出土遺物一覧（2）

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第19図1	土師器 環	4.0	(13.0)	—	いわゆる比企型環／口縁部は短く外反する／口唇部内面に沈線あり／内面及び外面口縁部赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	北西コーナーの床面上	40%
第19図2	土師器 環	(3.4)	—	—	いわゆる比企型環／口縁部は屈曲／口唇部内面にやや太い沈線あり／内面及び外面口縁部赤彩／入間系土師器と考えられる	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り、外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が観察できる	覆土中	口縁部～体部下半破片
第19図3	土師器 環	(34.3)	(13.0)	—	口縁部は外傾する／口縁部と底部との境は稜をもつ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り、外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が観察できる	覆土中	20%
第19図4	土師器 鉢	(11.9)	(15.4)	—	小型鉢か／口縁部は外反する／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ（スリップか）	住居中央から東寄りの床面上	口縁部～胴部下半 30%
第19図5	土師器 甕	37.8	19.4	7.1	長甕／口縁部は外反する／口縁部と底部との境は段をもつ／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置にもつ／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒・金雲母をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ（スリップか）	南壁の中央近くの床面上	70%
第19図6	土師器 甕	(10.2)	—	7.3	長甕／底部は平底／在地系土師器	淡茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨きか	北西コーナーの床面上	胴部下半～底部 30%

(単位：cm)

第7表 115号住居跡出土遺物一覧

第3節 奈良・平安時代

(1) 概要

奈良・平安時代の遺構については、住居跡4軒（106・109・110・112 H）・土坑2基（91・97 D）が検出された。住居跡の時期については、112 H－8世紀前～中葉、109 H－8世紀中葉、106・110 H－9世紀後～末葉に比定される。土坑については、特に91 Dから酸化炎焼成の須恵器環形土器1点が出土している。この製品については、内外面に煤が付着し、口縁部内面にタール状の付着物が見られるため、灯明具として使用されたものと考えられる。

(2) 住居跡

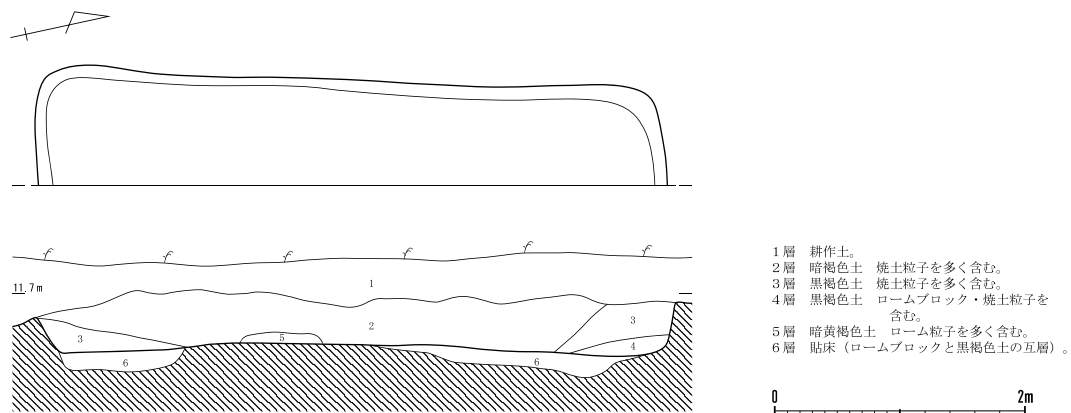
106号住居跡

遺 構（第20図）

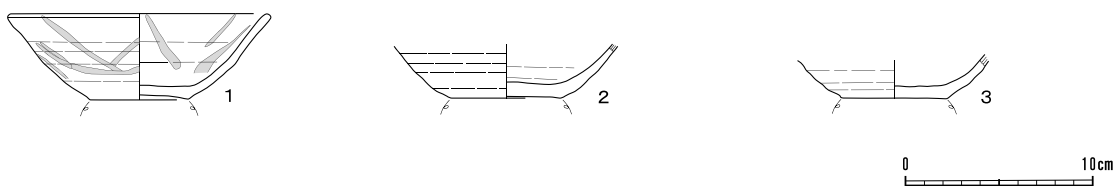
[位 置]（D・E－0・1）グリッド。

[検出状況] 大部分が調査区域外であり、西壁付近のみの検出である。

[構 造] 平面形：方形。規模：5.00m／不明m／確認面からの深さ18～36 cm。壁：北壁はほぼ垂直に、南壁は57°の程の角度で立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：壁近く



第20図 106号住居跡（1／60）



第21図 106号住居跡出土遺物（1／4）

に20cm前後の貼床か施されていた。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：確認できなかった。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 須恵器坏形土器が出土した。

[時 期] 平安時代（9世紀後～末葉）。

遺 物（第21図、第8表）

[土 器]（第21図1～3、第8表）

1～3は須恵器坏形土器である。

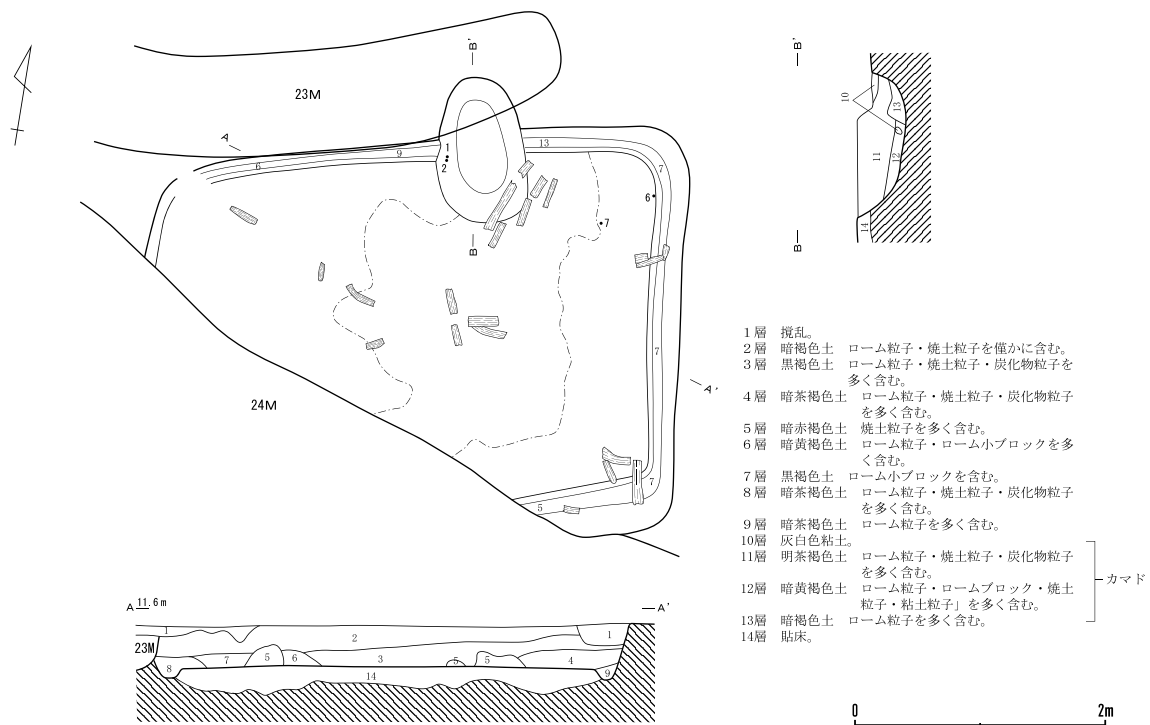
109号住居跡

遺 構（第22図）

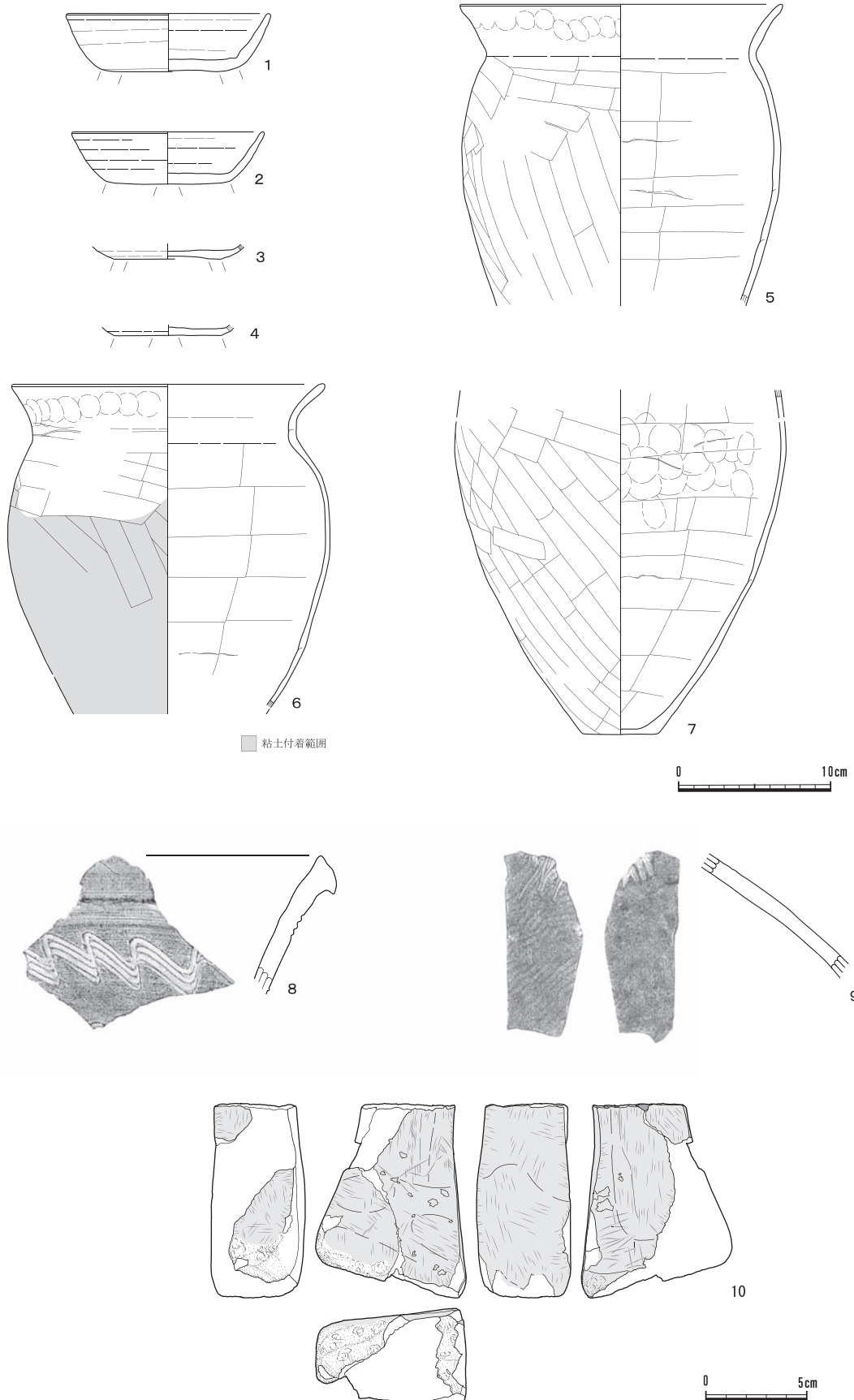
[位 置]（D～F-1～3）グリッド。

[検出状況] 23・24Mに切られる。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸4.25m／短軸3.25m／残りの良い確認面からの深さ38～47cm。壁：75°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N-78°-E。壁溝：カマドを除き巡らされていたと思われるが、北西コーナー付近は遺存状態が悪く確認できなかった。上幅20～42cm／下幅6～13cm／深さ5～13cm。床面：カマドから中央にかけて、硬化した面が確認できた。カマド：北壁のやや東側に偏って位置するが、遺存状態は良くなかった。主軸方位はN-11°-W。長さ114cm／幅70cm／壁への掘り込み42cm。灰白色粘土が検出されていることから、袖部は粘土で構築されていたと考えられる。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：検出されなかった。



第22図 109号住居跡（1／60）



第23図 109号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

[覆 土] 8層に分層できた。

[遺 物] 須恵器坏・甕形土器、土師器甕形土器、石製品（砥石）が出土した。

[時 期] 奈良時代（8世紀後葉）。

[所 見] 多くの炭化材が出土し、覆土中に焼土粒子が多く含まれていることから、焼失住居と思われる。

遺 物（第23図、第9表）

土 器（第23図1～9、第9表）

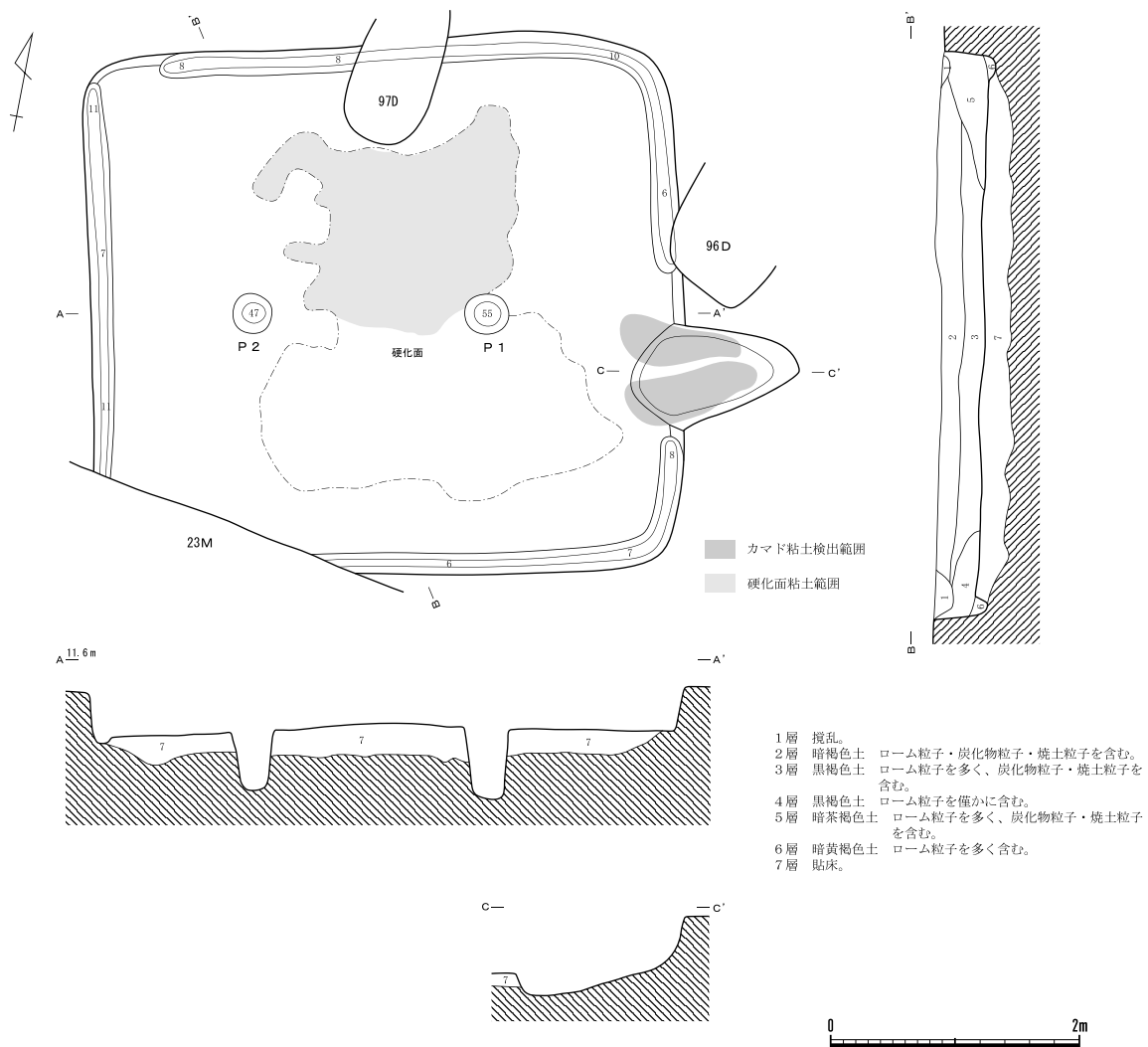
1～4は須恵器坏形土器、5～7は土師器甕形土器、8・9は須恵器甕形土器である。

石 製 品（第23図10）

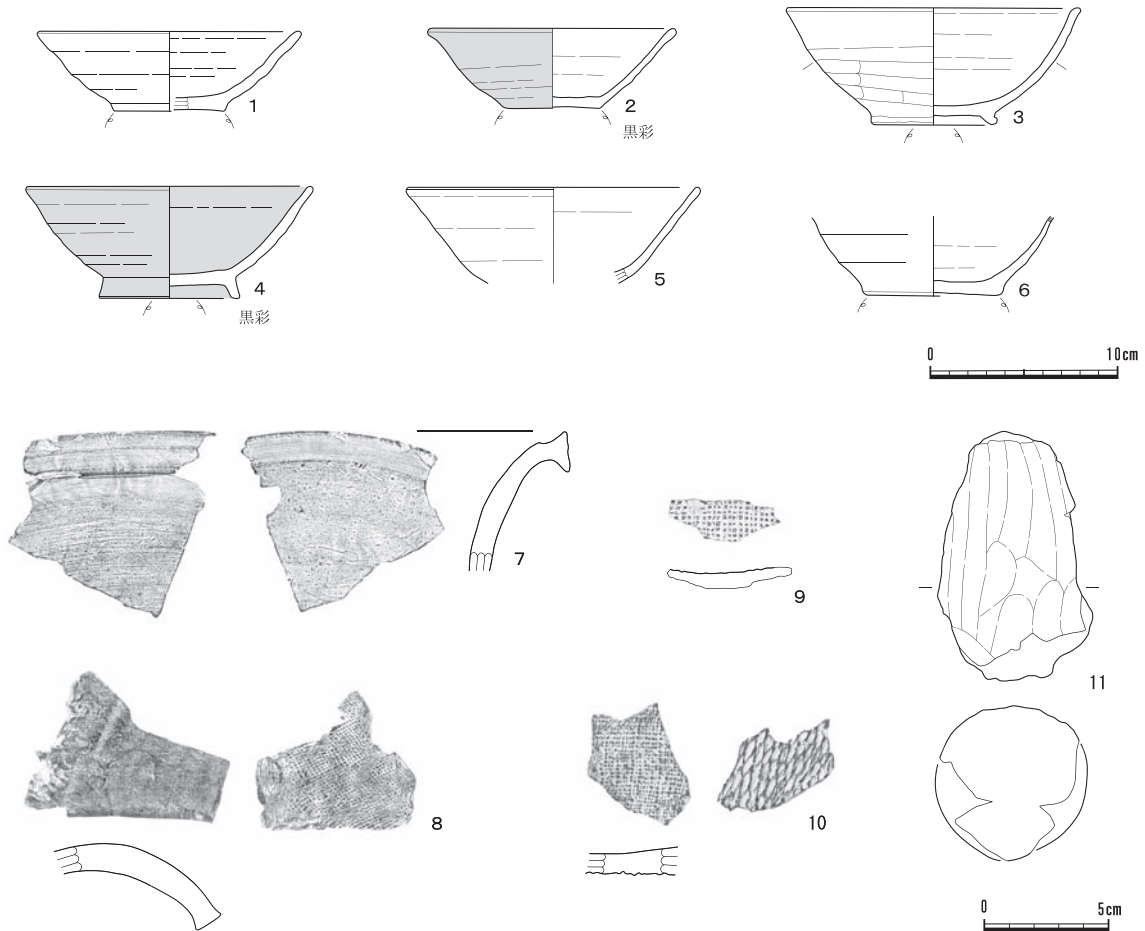
砥石である。長さ9.5cm・幅7.4cm・厚さ4.6cm・重さ399.7g。使用面は3面で、擦痕が顕著に観察できる。石質は凝灰岩である。

110号住居跡

遺 構（第24図）



第24図 110号住居跡（1／60）



第25図 110号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

[位置] (C～E-3～5) グリッド。

[検出状況] 113Hを切り、96D・97D・23Mに切られる。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸4.74m／短軸4.32m／確認面からの深さ27～46cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-80°-E。壁溝：北西コーナーとカマドで途切れている。上幅13～22cm／下幅4～10cm／深さ6～11cm。床面：住居中央が良く硬化しており、北側は粘土が貼られ踏み固められていた。貼床は10～25cmの厚さで施されていた。カマド：東壁の中央よりやや南に偏って位置する。主軸方位はN-73°-E。長さ134cm／幅86cm／壁への掘り込み90cm。袖部と天井部は灰褐色粘土で構築されていたと思われる。覆土は上層が粘土粒子・焼土粒子多く含む暗褐色土、下層が焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：P1・P2の2本が主柱穴と考えられる。深さ55・47cm。入口施設：検出されなかった。

[覆土] 5層に分層できた。

[遺物] 須恵器杯・甕形土器、布目瓦、土製品（支脚）が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀後～末葉）。

遺物（第25図、第10表）

[土器]（第25図1～7、第10表）

1～6は須恵器坏形土器、7は須恵器甕形土器である。

[瓦] (第25図8～10)

8～10は布目瓦で、8は丸瓦、9・10は平瓦である。

8は長さ5.9cm・最大幅7.3cm・厚さ1.1cmである。端部は平坦に成形されている。外面にはヘラ削り調整が僅かに施される。色調は淡黄褐色を基調とし、粘土中には砂粒・小石を含み、金雲母を僅かに含む。

9・10は小破片で、9は長さ4.9cm・最大幅3.3cm、下端面は剥落している。色調は淡茶褐色を呈し、粘土中には砂粒を僅かに含む。

10は長さ5.3cm・最大幅4.0cm・厚さ1.0cmである。下端面には縄蓆文あり。色調は灰褐色を呈し、粘土中には砂粒を含む。

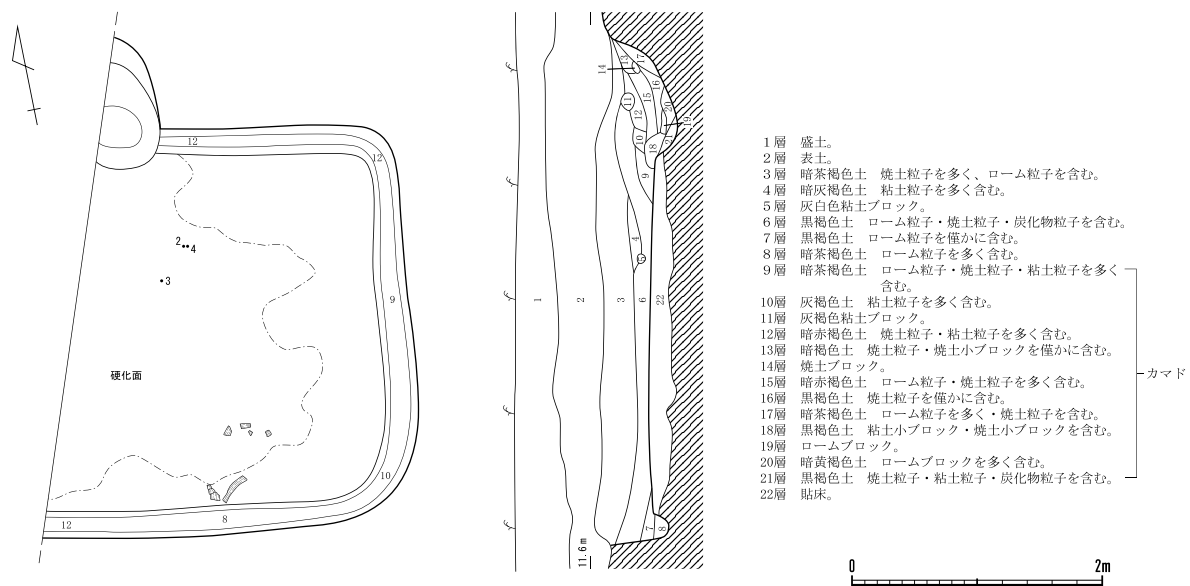
[土製品] (第25図11)

支脚である。現器高9.9cm・最大幅5.9cm・重さ185gである。表面には成形痕が残る。下端部分は欠損する。

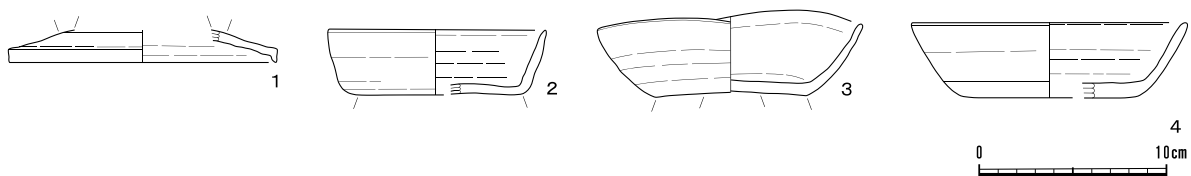
112号住居跡

遺構 (第26図)

[位置] (F・G-5・6) グリッド。



第26図 112号住居跡 (1/60)



第27図 112号住居跡出土遺物 (1/4)

[検出状況] 111・114 Hを切る。西側は調査区域外である。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸不明／短軸3.25m／確認面からの深さ40cm前後。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-80°-W。壁溝：上幅19~26cm／下幅7~15cm／深さ8~12cm。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。カマド：北壁に位置するが、西側は調査区域外であるため半分程度の検出である。主軸方位はN-10°-E。長さ105cm／幅不明／壁への掘り込み70cm。袖部は確認できなかったが、覆土から粘土ブロックが検出されていることから、粘土で構築されていたと思われる。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：検出されなかった。

[覆土] 8層に分層できた。

[遺物] 須恵器蓋・坏形土器が出土した。

[時期] 奈良時代（8世紀中葉）。

[所見] 床面上から炭化材が検出され、覆土中にも焼土粒子が多く含まれていたことから、焼失住居の可能性はある。

遺物 (第27図、第11表)

[土器] (第27図1~4、第11表)

1は須恵器蓋形土器、2~4は須恵器坏形土器である。

(3) 土坑

91号土坑

遺構 (第28図)

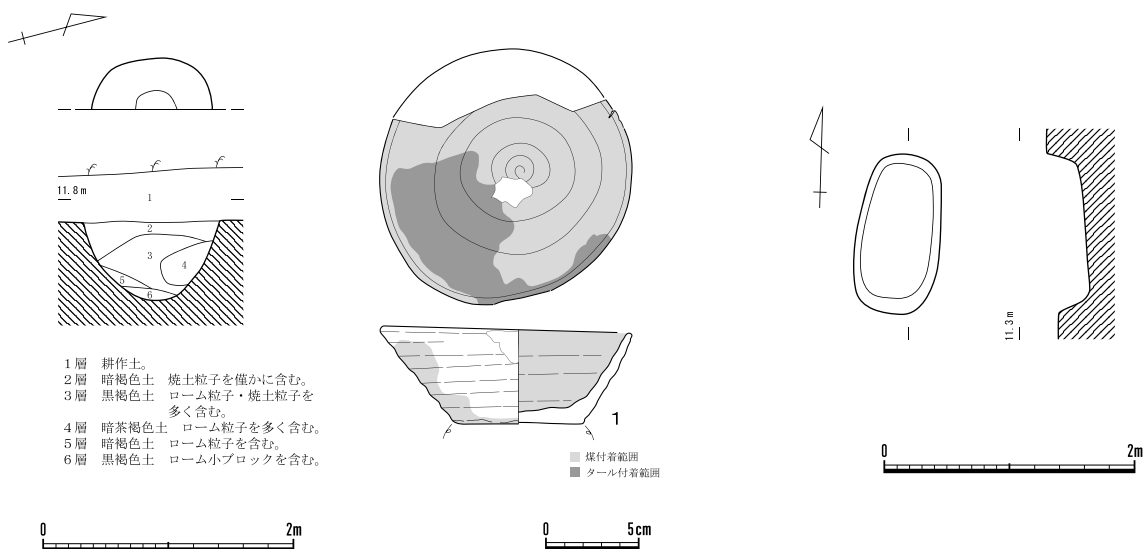
[位置] (C-0) グリッド。

[検出状況] 東側は調査区域外である。

[構造] 平面形：円形か。規模：不明／深さ63cm。壁：塼状に丸みを帯びて立ち上がる。

[覆土] 5層に分層できた。

[遺物] 須恵器坏形土器1点出土した。



第28図 91号土坑・出土遺物 (1/60・1/4)

第29図 97号土坑 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第21図1	須恵器 環	4.6	(14.0)	5.2	底部から口縁部にかけてやや体部下半に膨らみをもち開く／内外面に焼成時に付いた襷状の痕跡が残る	濃灰褐色	砂粒・小石を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	30%
第21図2	須恵器 環	(2.9)	—	6.0	底部から立ち上がりやや体部下半に膨らみをもつ	灰白色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	体部中位～ 底部50%
第21図3	須恵器 環	(2.4)	—	5.6	底部から立ち上がりやや体部下半に膨らみをもつ	灰褐色	砂粒・小石を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	体部下半～ 底部80%

(単位:cm)

第8表 106号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第23図1	須恵器 環	3.8	13.4	8.4	器形は底部から口縁部にかけて直線的に開く／外面のみ広い範囲で黒く煤けている／東金子製か	灰白色を基調	砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へラ削り	カマド内	ほぼ完形品
第23図2	須恵器 環	3.4	(12.6)	8.0	器形は底部から口縁部にかけて直線的に開く／内面及び外面口縁部は黒く煤けている／東金子製か	灰褐色を基調	砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へラ削り(中央付近まで)／外面体部は磨かれているものか?光沢をもつ	カマド内	50%
第23図3	須恵器 環	(1.0)	—	7.0	底部のみ／鳩山製品	灰褐色	白色針状物質・砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へラ削り	覆土中	底部のみ 50%
第23図4	須恵器 環	(0.7)	—	7.0	底部のみ／東金子製品か	灰白色	砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へラ削り(中央付近まで)	覆土中	底部のみ 80%
第23図5	土師器 甕	(19.7)	(21.0)	—	体部下半以下を欠損／口縁部は「く」の字状／最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置／胴部中位以下は黒斑あり／いわゆる「武蔵型甕」	淡茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はへラナデ／外面：口縁部は横ナデ、外面は斜方向のへラ削り／外面口縁部には指頭押捺痕が僅かに観察できる	覆土中	口縁部～ 胴部下半 40%
第23図6	土師器 甕	(21.6)	長径 21.8短 径20.4	—	体部下半以下を欠損／口縁部は「く」の字状／最大径は胴部上半／胴部上半以下は粘土が付着／いわゆる「武蔵型甕」	暗橙色	砂粒をやや多く、金雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はへラナデ／外面：口縁部は横ナデ、外面は斜方向のへラ削り／外面口縁部には指頭押捺痕が僅かに観察できる	北東コーナーの床面上	口縁部～ 胴部下半 80%
第23図7	土師器 甕	(22.5)	—	4.8	胴部最大径は中位にもつ／胴部下半に黒斑あり／いわゆる「武蔵型甕」	暗茶褐色	砂粒をやや多く、雲母・角閃石・小石を含む	内面：胴部はへラナデ／外面：胴部は斜方向のへラ削り／内面胴部中位には指頭押捺痕が観察できる	北東コーナーの床面上	胴部中位～ 底部50%
第23図8	須恵器 甕	(6.4)	—	—	口頸部／口唇部外面は面取りが施される／頸部には4本一単位の櫛波状文が施文される／東金子製品か	灰色	白色砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口唇部～直下はカキ目調整か、以下は回転ナデ	覆土中	口頸部破片
第23図9	須恵器 甕	—	—	—	胴部上半か／東金子製品か	灰色	白色砂粒を含む	内面：ナデられるが、当て道具痕が僅かに残る／外面：平行叩き目痕が残る	覆土中	胴部破片

(単位:cm)

第9表 109号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第25図1	須恵器 環	4.2	14.0	5.6	口縁部はやや外反する ／体部中位の稜がやや 強い	灰白色	砂粒・角 閃石・金 雲母を含 む	ロクロ回転は右回転/ 底部に回転糸切り痕が 残る	覆土中	40%
第25図2	須恵器 環	4.2	(13.1)	5.2	内外面全体が黒くぼん やり焼けているが、黒 色系土器の可能性あり	胎土は淡 灰褐色	砂粒・金 雲母を含 む	ロクロ回転は右回転/ 底部に回転糸切り痕が 残る	覆土中	60%
第25図3	須恵器 環	6.2	15.6	6.7	高台付碗／東金子製品 か	濃灰褐色	砂粒・小 石を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部に回転糸切り痕が 残る／外面体部中位以 下は回転ヘラ削り	覆土中	70%
第25図4	須恵器 環	6.0	(15.2)	7.4	高台付碗／酸化炎焼成 ／内外面全体に黒く焼 けているが、黒色系土 器の可能性あり	胎土は明 茶褐色	金雲母・ 砂粒・小 石を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部に中心に僅かに回 転糸切り痕が残る	覆土中	50%
第25図5	須恵器 環	(5.1)	(15.6)	—	底部から口縁部につ いて直線的に開く／東 金子製品か	灰褐色	砂粒を含 む	ロクロ回転は右回転	覆土中	口縁部～体 下半40%
第25図6	須恵器 環	(4.1)	—	7.2	底径が大きめ／体部は やや膨らみをもつか	灰白色	砂粒を含 み、金雲 母を僅か に含む	ロクロ回転は右回転/ 底部に回転糸切り痕が 残る	覆土中	体部中位～ 底部60%
第25図7	須恵器 壺	(4.1)	—	7.2	口唇部は面取り／内面 口唇部直下はやや窪ん でいる／頸部は外反す る／東金子製品か	灰褐色	白色 砂 粒・小石 を含む	内外面ロクロ目痕	覆土中	口縁部破片

(単位 :cm)

第10表 110号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第27図1	須恵器 蓋	(1.7)	(14.2)	—	天井部～口縁部／天井 頂部はやや水平化／紐 部分を欠損／東金子製	青灰色	白色砂粒 を含む	ロクロ回転は右回転/ 天井頂部に回転ヘラ削 りあり	住居中央や 北壁寄りの 床面上	天井部～口 縁部20% 以下
第27図2	須恵器 環	3.5	11.6	8.7	小型品／器形は逆台形 ／底部から口縁部につ いて直線的に外傾する	灰白色	砂粒を含 む	ロクロ回転は右回転/ 底部は全面回転ヘラ削 り	住居中央や 北壁寄りの 床面上	50%
第27図3	須恵器 環	4.0	長径 14.8 短径 12.8	8.2	歪みあり／底部から口 縁部にかけて直線的に 外傾する／外面には砂 粒付着／鳩山製品	灰色	砂粒・白 色針状物 質を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部は回転ヘラ削りが 施されるが、中心のみ 回転糸切り痕が残る	住居中央や 北壁寄りの 床面上	90%
第27図4	須恵器 環	4.0	(14.6)	(9.7)	器形は底部から口縁部 にかけて直線的に外傾 となす／鳩山製品	青灰色	白色針状 物質を多 く、砂粒 を含む	ロクロ回転は右回転/ 底部は全面回転ヘラ削 りか	住居中央や 北壁寄りの 床面上	20%

(単位 :cm)

第11表 112号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第28図1	須恵器 環	4.0	長径 14.8 短径 12.8	長径 14.8 短径 12.8	歪みあり／内外面に煤 が付着／口縁部にター ル状の付着物あり／灯 明具か／酸化炎焼成	胎土は暗 茶褐色	砂粒・小 石をやや 多く含む	ロクロ回転は右回転/ 底部に回転糸切り痕が 残る	覆土中	80%

(単位 :cm)

第12表 91号土坑出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版14- 1	須恵器 環	—	—	—	口縁部／口縁部は僅か に内湾する／鳩山製品	内部は橙 色／表面 は淡灰色	白色 砂 粒・白色 針状物質 を僅かに 含む	ロクロ回転は右回転	覆土中	口縁部小破 片

(単位 :cm)

第13表 97号土坑出土遺物一覧

[時期] 平安時代（9世紀末葉）。

遺物（第28図1、第12表）

須恵器环形土器で、灯明具に使用されたものと考えられる。

97号土坑

遺構（第29図）

[位置]（C-4）グリッド。

[検出状況] 110・111Hを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.26m／短軸0.68m／113H床面からの深さ30cm前後。壁：65°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N-6°-E。

[覆土] 粘土粒子を多く含む黒褐色土で良く締まっている。

[遺物] 須恵器环形土器の小破片1点が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀代）。

遺物（図版14-2-1、第13表）

須恵器环形土器である。

第4節 中世以降

（1）概要

中世以降の遺構としては、土坑9基（90・93～100D）と溝跡（23・24M）が検出された。土坑のうち、93・94Dの2基は地下室の形態をもつ。98Dは火葬墓と考えられ、六文銭と思われる銅銭も出土している。溝跡は中世以降のものと考えられるが、24Mについては、「柏の城」関連の堀跡である可能性がある。

（2）土坑

90号土坑

遺構（第30図）

[位置]（B-0・1）グリッド。

[検出状況] 107Hに切られる。

[構造] 平面形：方形。規模：長軸不明／短軸70cm／深さ41cm。壁：南東側は80°、北西側は47°程の傾斜角度で立ち上がる。長軸方位：N-47°-E。

[覆土] ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

93号土坑

遺構（第3図）

[位置] (B-2・3) グリッド。

[検出状況] 重複なし。

[構造] 地下室(地下坑)の形態をもつ。入口竪坑部を中心に南北方向にそれぞれ横坑が延びる。竪坑開口部は84×88cmの方形である。主体部の内部構造については、詳細不明である。

[遺物] 陶器・磁器・土器・石製品(砥石)・貝(アサリ)が出土した。遺物は混入品の可能性がある。

[時期] 近世(19世紀か)。

[所見] 危険を伴うものと判断したため、写真のみで図面をとることができなかった。

遺物 (第32図6、図版14-3-1~7、第15表)

[陶器・土器] (図版14-3-1~5、第15表)

1~3は陶器、4は磁器、5は土器である。

[石製品] (第32図6)

砥石である。長さ5.5cm・最大幅3.2cm・厚さ1.2cm・重さ29.8g。使用面は4面で、擦痕が観察できる。上下端は欠損している。石質は凝灰岩である。

[貝類] (図版14-3-7)

貝はアサリである。殻長3.3cm・殻高2.5cm。

94号土坑

遺構 (第31図)

[位置] (G・H-1) グリッド。

[検出状況] 115H・24Mを切る。

[構造] 地下室の形態をもつ。主軸方位：N-19°-E。入口竪坑部：平面形は主軸に対して横長の隅丸長方形を呈す。規模は開口部が長軸128cm/短軸100cm、坑底部が長軸86cm/短軸76cm、深さ3m。壁面には、足掛け穴と思われる小横穴が5ヶ所確認できた。主体部への連絡は、20cm程の比高差で移行する。主体部：底面は不整な方形で、前壁2.70m/奥壁2.84m/奥行き約3.00m/高さ1.50~1.70m。天井部の中央付近は一部崩落していた。西隅の坑底上から巻き貝の貝殻が検出された。

[覆土] 竪坑部はロームブロックを多く含む黒褐色土を基調とする。主体部は壁と天井部の崩落したロームブロックの下に、1cm程の黒色土が堆積していた。

[遺物] 陶器、土器、瓦、石製品(板碑)・貝(アカニシ)が出土した。

[時期] 中世(16世紀後半か)。

遺物 (第32図1、図版14-3、第15表)

[陶器・土器] (第32図1、図版14-3-1~3、第15表)

1は土器、2・3は陶器である。

[瓦] (図版14-3-4)

4は瓦である。長さ10.8cm・最大幅9.0cm・厚さ2.2・重さ243.0g。色調は灰白色を基調とする。

[石製品] (図版14-3-5)

5は板碑の小破片であろうか。長さ8.0cm・最大幅5.0cm・重さ51.0g。石質は緑色片岩である。

[貝類] (図版14-3-6)

貝はアカニシである。殻径7.0cm・殻高11.0cm。

95号土坑

遺 構 (第30図)

[位 置] (D-5・6) グリッド。

[検出状況] 113 Hの西側に近接する。

[構 造] 平面形：不整な長方形。規模：長軸1.95m／短軸1.36m／深さ1.45 m。壁：75°前後の角度で立ち上がる。長軸方位：N-80°-W。

[覆 土] 上層がロームブロックを含む暗褐色土、下層が灰褐色土を基調とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

96号土坑

遺 構 (第30図)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 110・111 Hを切る。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸2.05m／短軸0.96m／残りの良い上端からの深さ53cm。壁：70°前後の角度で立ち上がる。長軸方位：N-23°-E。

[覆 土] 黒色土を基調とする。

[遺 物] 土器1点が出土した。

[時 期] 近世(18世紀後半)。

遺 物 (図版14-3-1、第15表)

[土 器]

焙烙の小破片である。

98号土坑

遺 構 (第30図)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 99・100 Dを切る。周辺は攪乱されていた。

[構 造] 坑底は西側を除く上端と中央付近が被熱により赤化していた。平面形：楕円形。規模：長軸1.18m／短軸0.92m／深さ9cm。長軸方位：N-6°-E。

[遺 物] 銭貨4点が出土した。

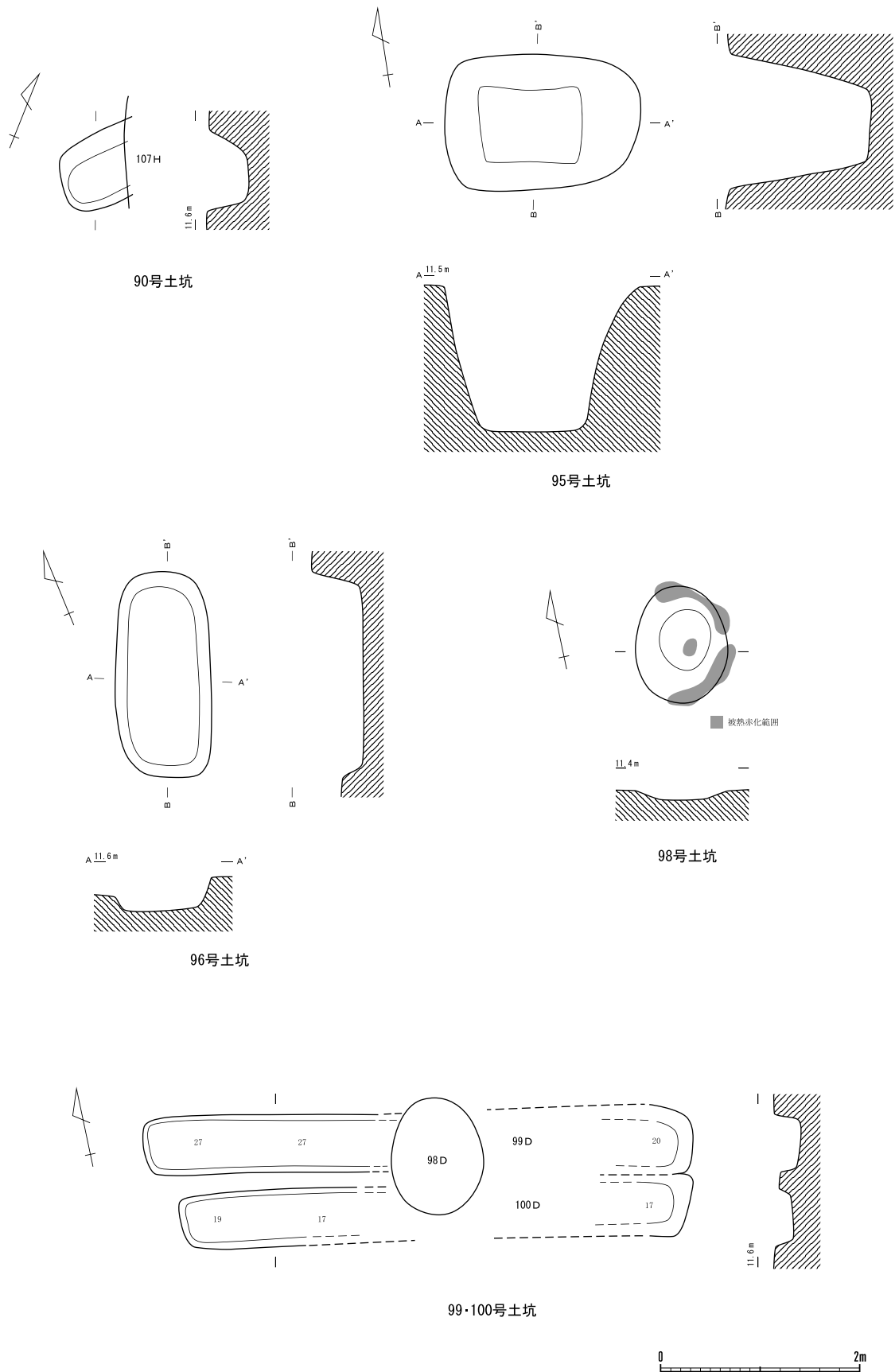
[時 期] 中世。

[所 見] 本遺構からは、銭貨4点が出土し、これらの銭貨はおそらく六文銭であると思われることから、本遺構は土坑墓と考えられる。さらに坑底が被熱により赤化している状況から、火葬墓である可能性がある。

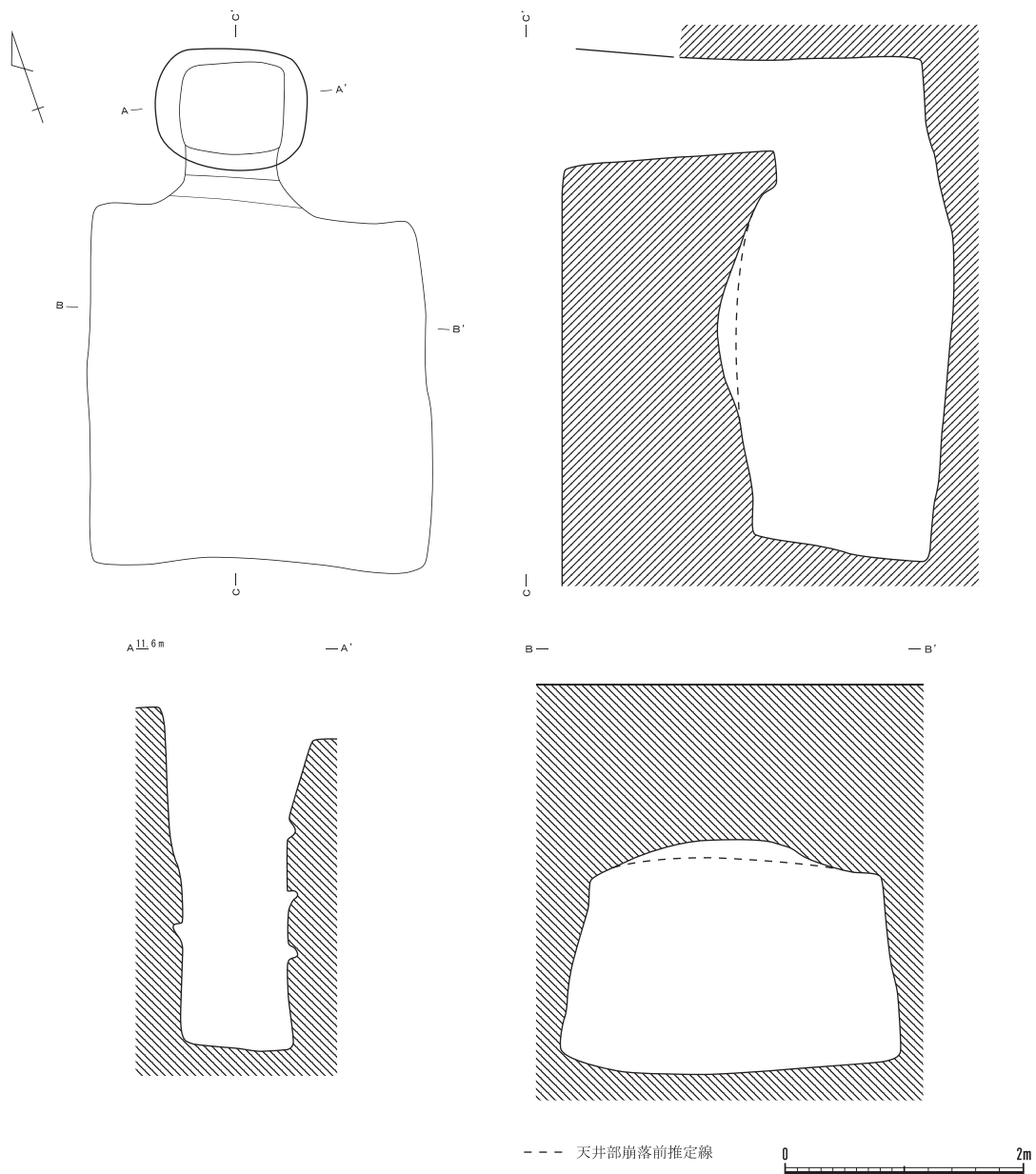
遺 物 (第32図、第14表)

[銭 貨]

1は皇宋通宝、2は元祐通宝、3は元豊通宝、4は開元通宝である。



第30图 土坑1 (1/60)



94号土坑

第31図 土坑2 (1/60)

99号土坑

遺 構 (第30図)

[位 置] (I-2~4) グリッド。

[検出状況] 中央部は98 Dに切られ、さらにその付近は攪乱されていた。

[構 造] 平面形：長方形の溝状。規模：長軸 5.50m / 短軸 0.58 ~ 0.68m / 深さ 20 ~ 27cm。壁：80°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N - 80° - W。

[覆 土] ローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

100号土坑

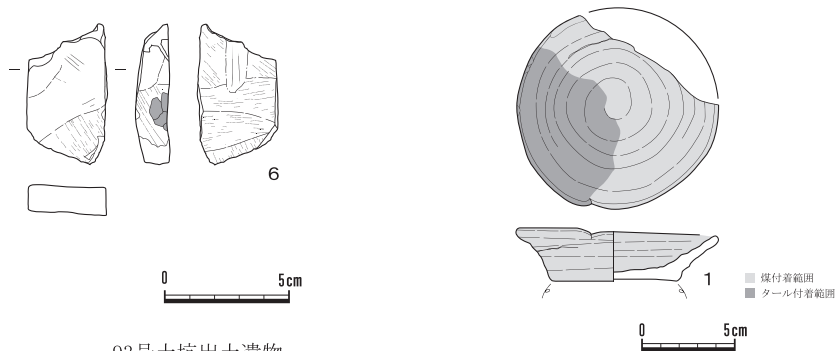
遺構 (第30図)

[位置] (I-2~4) グリッド。

[検出状況] 中央部は98 Dに切られ、さらにその付近は攪乱されていた。

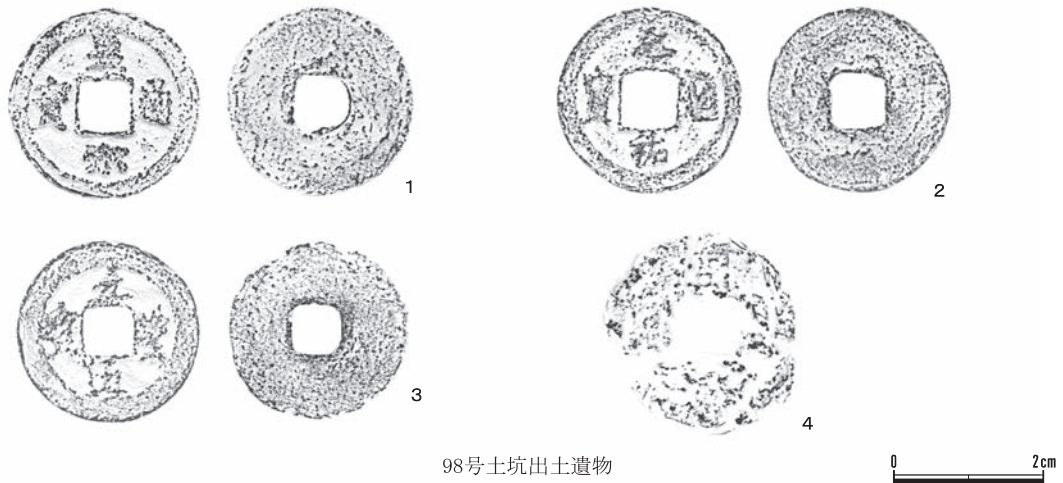
[構造] 平面形：長方形の溝状。規模：長軸 5.12m / 短軸 0.52 ~ 0.62m / 深さ 17 ~ 19cm。壁：70°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N - 80° - W。

[覆土] ローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。



93号土坑出土遺物

94号土坑出土遺物



98号土坑出土遺物

第32図 土坑出土遺物 (1 / 3・1 / 4・1 / 1)

挿図番号	銭貨名	外径	方孔一辺	重量	初鑄年	出土位置	遺存状態	備考
第32図1	皇宋通宝	2.5	0.7	3.1	1039年	覆土中	良好	北宋(宝元2年初鑄)
第32図2	元祐通宝	2.4	0.7	3.2	1086年	覆土中	良好	宋(元祐元年)
第32図3	元豊通宝	2.4	0.7	3.2	1078年	覆土中	良好	宋(元豊元年)
第32図4	開元通宝	2.4	0.8	2.0	621年	覆土中	不良のため、文字の解読も不鮮明 / 一部接合は不可能	唐(武徳4年)

(単位：cm・g)

第14表 98号土坑出土銭貨一覧

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

(3) 溝 跡

23号溝跡

遺 構 (第33図)

[位 置] (D・E-2~4) グリッド。

[検出状況] 109・110Hを切る。24Mとの新旧関係は不明。住居精査中に確認したため、詳細は不明である。

[構 造] 規模：調査区内での全長は約6m。溝幅は上幅80cm前後・下幅60cm前後・残りの良い確認面からの深さ23~28cm。走向方位：ほぼ東西方向であるが、東端に行くにつれてやや北向きにカーブしている。

[覆 土] ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

24号溝跡

遺 構 (第34図)

[位 置] (E~G-0~6) グリッド。

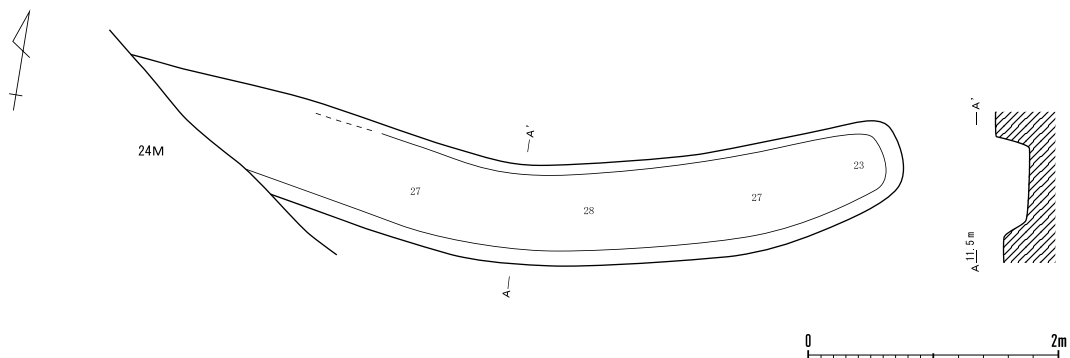
[検出状況] 109・111・114・115 Hを切り、94 Dに切られる。23Mとの新旧関係は不明。

[構 造] 規模：調査区内での全長は14.8m。溝幅は上幅2.4~3.0m・下幅68~122cm・確認面からの深さ132~154cm。走向方位：N-68°-W。その他施設：(F-2・3)グリッド部分で北側面からほぼ東向き(角度はN-78°-W)に溝底面に続く階段状までの段差はないが、スロープ状の掘り込み部分が検出されている。幅は25~35cm、勾配は20°である。

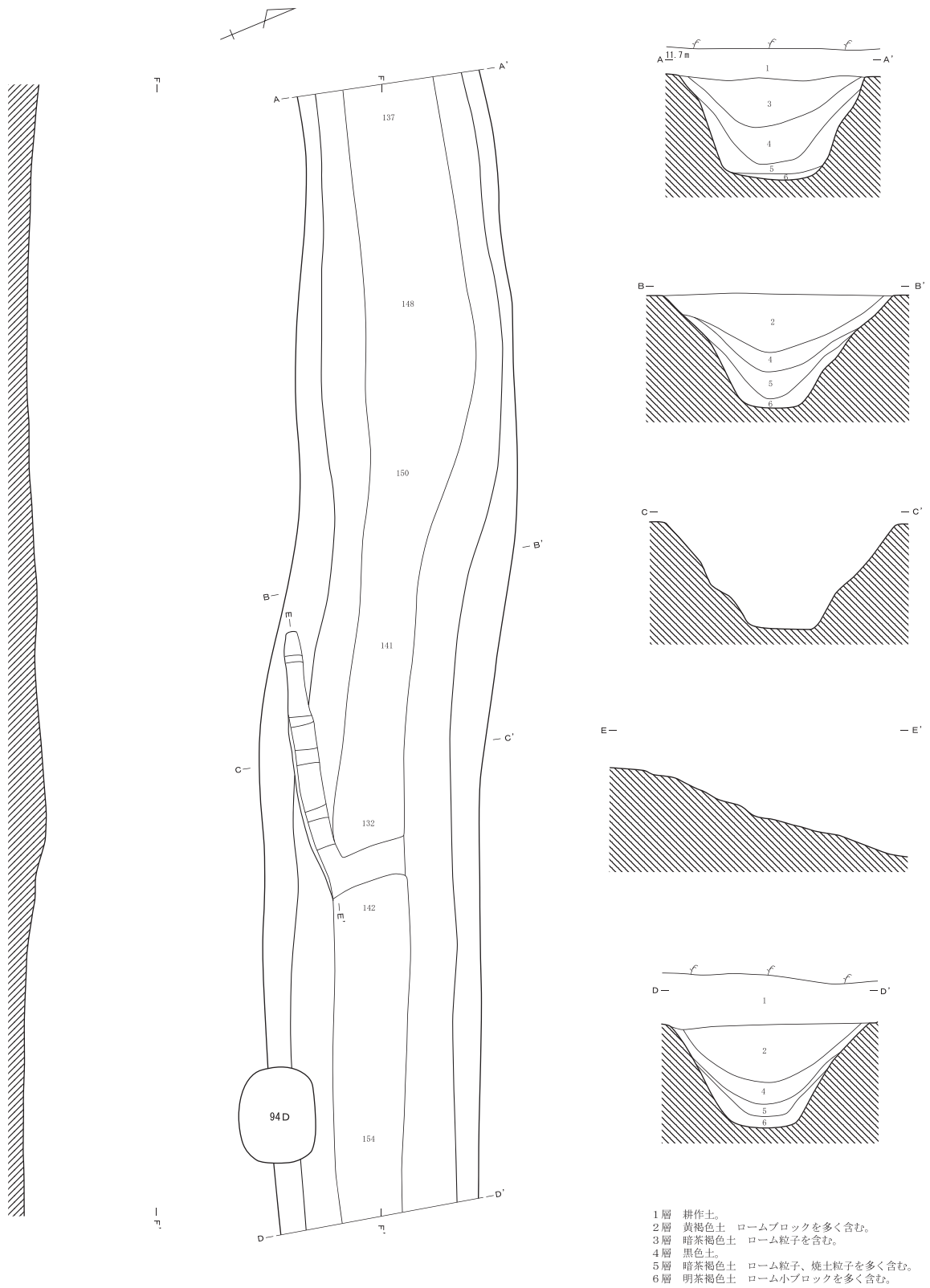
[覆 土] 5層に分層できた。

[遺 物] 陶器・土器が出土した。

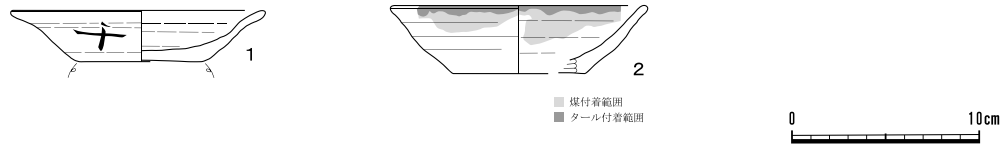
[時 期] 中世(16世紀後半)。



第33図 23号溝跡(1/60)



第34図 24号溝跡 (1/80)



第35図 24号溝跡出土遺物（1／4）

[所 見] 本遺構は、およそ東西方向に走向する「柏の城」関連の堀跡と考えられる。また、スロープ状の掘り込み部分は、溝底面への連絡通路と思われる。

遺 物（第35図1・2、図版15-2、第15表）

[陶器・土器]（第35図1・2、図版15-2-1～6、第15表）

1・2・6は土器で、1・2はかわらけ、6は焙烙である。

3～5は陶器である。

()は現存値及び推定値

挿図・ 図版番号	遺構名	種別	器種	法 量			製 作 の 特 徴 等	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
図版14-3-1	93 D	陶器	丸碗	—	—	—	口縁部小破片／文様あり／胎土の色調は白色を基調／御深釉／京焼風	瀬戸	19c以後
図版14-3-2	93 D	陶器	笠原鉢	—	—	—	体部小破片／胎土の色調は淡黄色／白濁釉に緑釉	瀬戸	19c
図版14-3-3	93 D	陶器	徳利	—	—	—	体部破片／外面に鉄葉	瀬戸	19c中
図版14-3-4	93 D	白磁	筒碗	(4.5)	—	—	口縁部から体部破片／透明釉		19c以後
図版14-3-5	93 D	土器	焙烙	—	—	—	口縁部から体部の小破片／色調は黒色	在地系	17c後
第32図1 図版14-3-1	94 D	土器	かわらけ	2.8	10.6	6.8	かわらけ／内面口縁部にタール状の付着物あり／灯明具と思われる／外面に粘土巻き上げ痕が残る／底部に回転糸切り痕あり	在地系	16c後
図版14-3-2	94 D	陶器	小皿	3.2	—	—	小破片／志野釉／胎土の色調は黄白色／高台は削り高台	瀬戸	16c末
図版14-3-3	94 D	陶器	甕	—	—	—	胴部破片／外面胴部破片／外面鉄釉／胎土の色調は暗灰褐色鉄釉／胎土の色調は暗灰褐色	常滑	15～16c
図版14-3-1	96 D	土器	焙烙	—	—	—	口縁部から体部の小破片／口縁部はやや内湾する／色調は淡茶褐色／外面に黒斑あり／	在地系	18c後
第35図1 図版15-2-1	24 M	土器	皿	2.7	13.5	6.8	偏平な器形／外面体部に「千」の墨書あり／ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕あり／色調は明橙色／遺存度は70%	在地系	16c後
第35図2 図版15-2-2	24 M	土器	坏	3.6	(13.6)	(7.0)	口縁部付近にタール状の付着物あり／灯明具と思われる／ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕あり／色調は暗茶褐色を基調／遺存度は20%	在地系	16c後
図版-15-2-3	24 M	陶器	捏鉢	—	—	—	口縁部破片／胎土の色調は灰白色／内面には灰釉が施される	常滑	16c中
図版-15-2-4	24 M	陶器	大甕	—	—	—	胴部破片／色調は暗茶褐色を基調／外面には鉄釉が施される／5と同一個体か	常滑	16c後
図版-15-2-5	24 M	陶器	搦鉢	(3.0)	—	—	体部破片／内面には6本一単位の刷毛目痕あり／外面には成形による押捺が施され、指紋が顕著に残る／色調は明橙色を基調／4と同一個体か	瀬戸	16c後
図版-15-2-6	24 M	土器	焙烙	5.5	—	—	色調は黒色、断面はサンドイッチ構造／調整は横ナデが施されるが、体部下半に指頭押捺痕が残る	在地系	16c後

(単位:cm)

第15表 土坑・溝跡出土の陶磁器・土器一覧

第5節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文時代の石器、縄文時代の土器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳時代中・後期の土器、奈良・平安時代の遺物、中世以降の遺物に分類する。

(1) 旧石器・縄文時代の石器 (第36図1～3、第16表)

1は旧石器時代の石器で、尖頭器である。

2・3は縄文時代の石器で、2は石鏃、3は石鏃未製品である。

(2) 縄文時代の土器 (第36～38図4～74、第17表)

縄文時代の遺物は、後世の遺構からの出土が多い。遺物の時期については、早期・前期・中期・後期・晩期のものが出土している。城山遺跡では前期から中期初頭のものが多く傾向にあるが、本調査地点では後期のものも比較的多く出土した。

4・5は早期条痕文系土器の破片。4は小破片ながら鵜が島台式の文様の特徴が見てとれる。

6～27は前期の土器で、6～16は前期初頭から中葉の羽状縄文系土器の破片である。6は撚糸圧痕文を施文する花積下層式、7～9は半裁竹管状工具による施文をする黒浜式であろう。10～16は縄文地文のみで型式は判然としない。

17～27は前期後葉の諸磯式土器の破片。27に関しては或いは中期初頭の可能性もある。

28～50は中期の土器で、28～33は中期初頭の五領ヶ台式。37～45は後葉から末葉の加曾利E式。その他は中期の土器と思われるが形式は判然とせず、47～50は後期前葉の土器の可能性もある。

51～72は後期の土器で、51～57は後期初頭から前葉の称名寺式、58・59は前葉の堀之内式、60～62は中葉の加曾利B式、63～72は粗製土器である。

73は晩期の土器で、安行3cもしくは3d式であろう。

74は土製円盤。1/3は欠損し、文様も沈線文が1条のみで詳細は不明だが中期のものであろう。

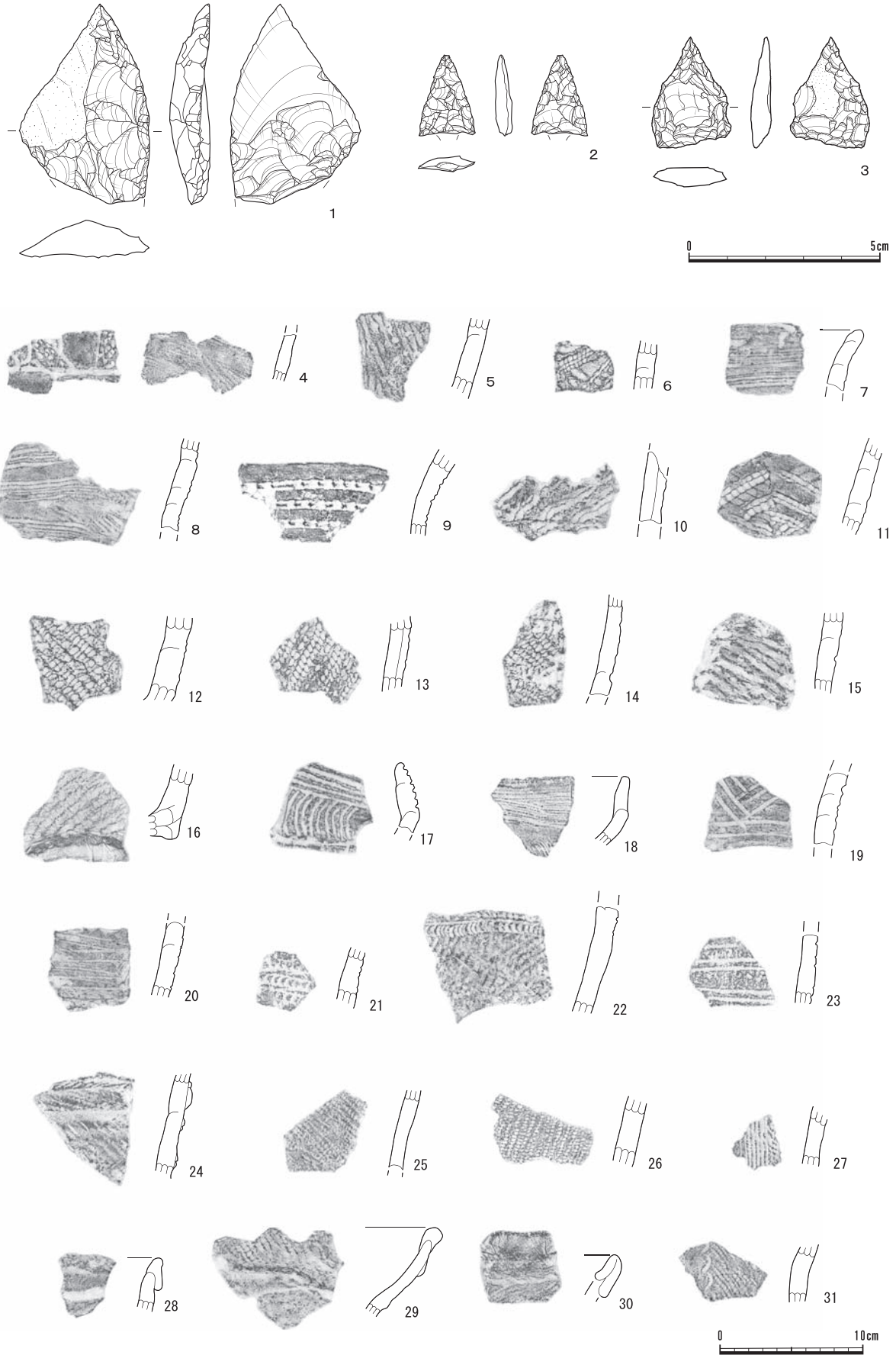
(3) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器 (第38図75～82、第18表)

75・76は高環形土器、77～79は壺形土器、80～82は甕形土器である。

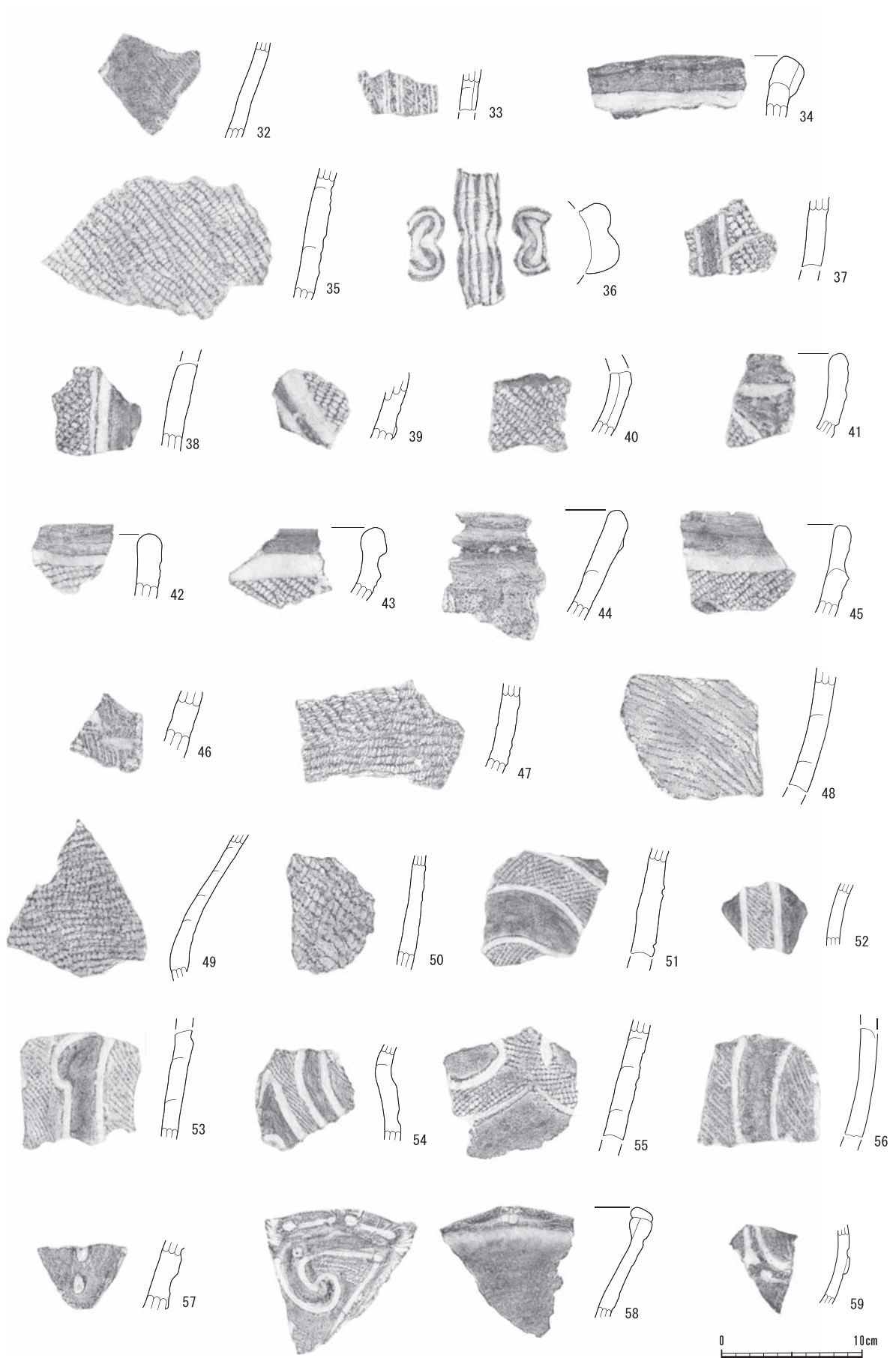
(4) 古墳時代中・後期の遺物 (第38図83～87、第18表)

83は土師器環形土器、84は土師器甕形土器、85は須恵器埴形土器、86は土師器埴形土器?である。

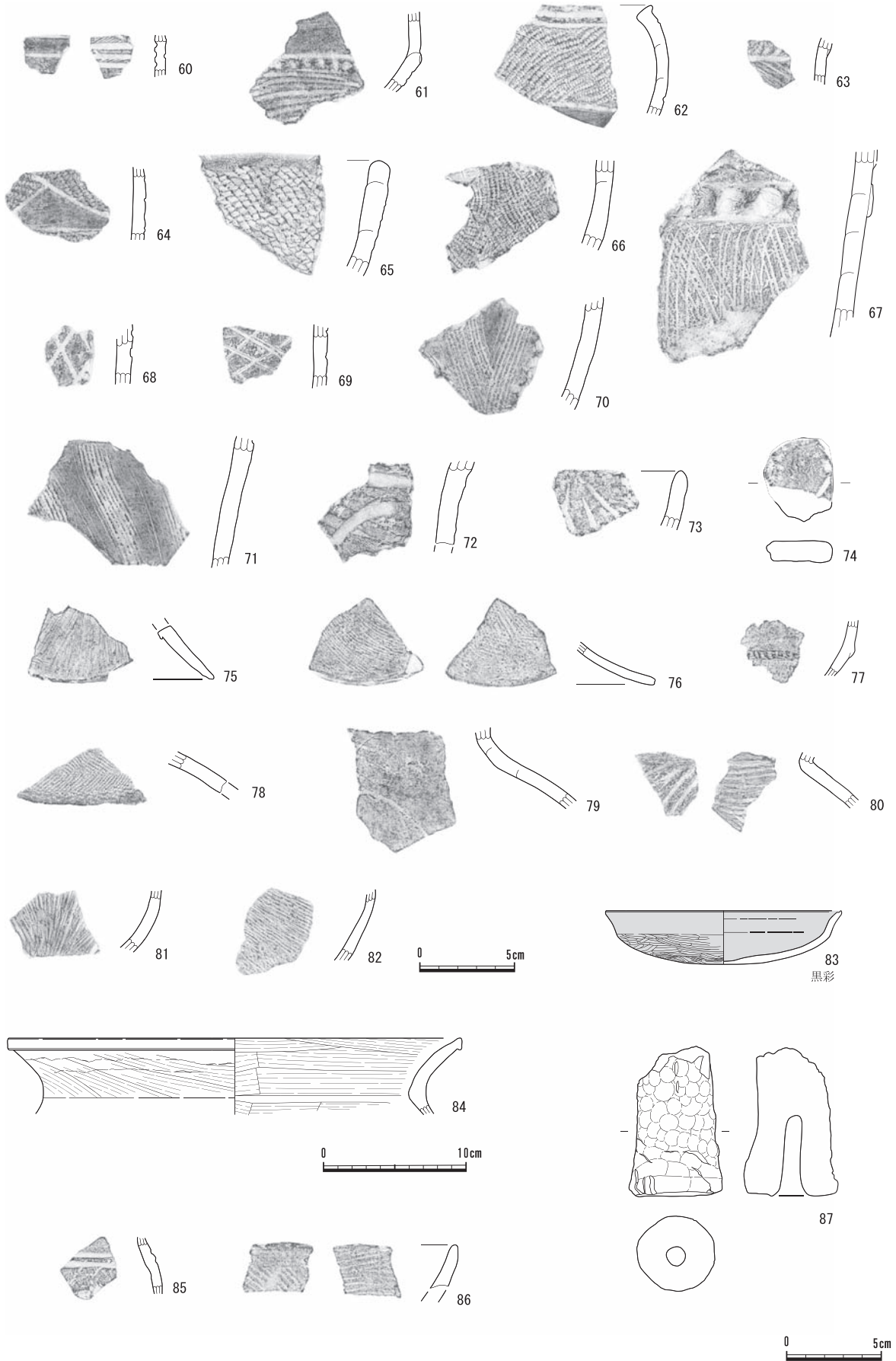
87は土製品で、支脚である。高さ10.4cm・最大幅6.5cm・重さ379g。円筒形を呈するが、下端はやや広がっている。上端は欠損する。表面全体に指頭による押捺痕が観察できる。色調は暗黄褐色～暗橙色で、粘土には金雲母・砂粒をやや多く含む。24Mからの出土である。



第36図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)



第37圖 遺構外出土遺物2 (1/3)



第38図 遺構外出土遺物3 (1/3・1/4)

(5) 奈良・平安時代の遺物 (第39図88～94、第18表)

88は土師器坏形土器で落合型坏と考えられる。

89～91は須恵器坏形土器、92は須恵器甕形土器である。

93・94は灰釉陶器で、93は耳皿、94は壺形土器であろうか。

(6) 中世以降の遺物 (第39図119、図版18－95～118、第19表)

[陶磁器・土器] (図版96～118図、第17表)

95～99は磁器、100～115は陶器、116～118は土器である。

[石製品] (第39図119)

砥石である。長さ9.2cm・最大幅3.3cm・重さ138.0g。使用面は4面で、表面には擦痕が観察できる。両端には敲打痕が残り、使用痕と思われる。石質は砂岩である。遺構外からの出土である。

[瓦] (図版18－120)

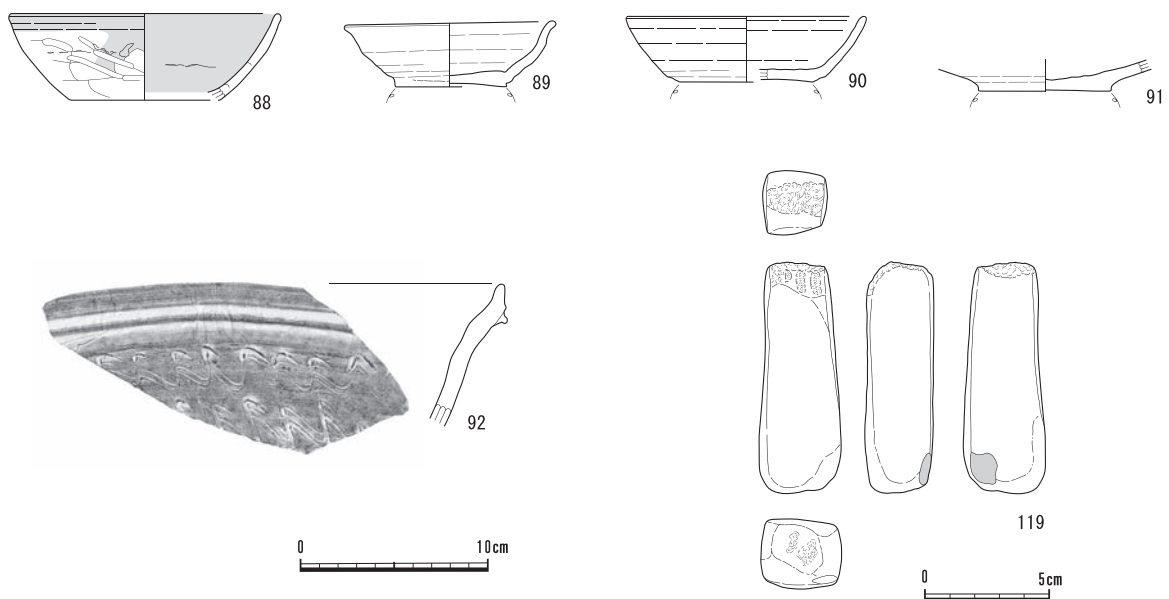
平瓦の破片である。長さ12.5cm・最大幅9.7cm・厚さ1.6cm。色調は淡黄色を基調とする。1箇所の釘留め穴あり。穴の径は約0.8cm。遺存状態はやや不良で、上下面ともに剥離が著しい。遺構外からの出土である。

[鑄造関連の遺物] (図版18－121・122)

いずれも鑄造関連の遺物である。これらと同類の資料は、本地点のすぐ東側に存在する城山遺跡第35地点(尾形・深井 1999)からも出土しており、関連性もたれる。

121は溶解炉の炉壁である。厚さ1.3cmほどの砂質でできた炉壁の内側には高熱で溶けた鉄と鉄の精製に必要な炭化材が冷えて固まった状態で付着している。重さ305g。

122は湯口部分の鉄塊と思われる。長さ6.8cm・最大幅6.7cm・厚さ2.3cm・重さ127g。下端は欠損しているが、円錐状ではなく、一文字状のものと思われる。



第39図 遺構外出土遺物4 (1/4・1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第36図1	尖頭器	黒曜石	52.3	33.9	11.8	12.8	左側縁が「く」の字状に張り出す/両面に平坦剥離/正面に原礫面有り/素材は幅広の不定形剥片/先端部に湾曲有り/基部を一部欠損/断面形状は三角形	96 D
第36図2	石 鏃	チャート	20.9	14.4	4.5	1.1	舌部を欠損/調整順序は裏面左側縁→裏面右側縁→正面左側縁→正面右側縁/裏面に素材面有り	110 H
第36図3	石鏃未製品	頁岩	28.2	20.7	5.4	2.7	先端部は細かな調整/基部は粗い調整/裏面に原礫面が広く残置	105 H

(単位: mm・g)

第16表 遺構外出土の旧石器・縄文時代の石器一覧

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第36図4	胴	襷状の沈線区画内に刺突文/内面貝殻条痕文	7.5YR7/6 橙	鶺鴒ヶ島台				○	織	111H (D-4) G	
第36図5	胴	貝殻条痕文	5YR5/4 にぶい赤褐	条痕文系				○	織	111H	繊維は少量
第36図6	胴	撚糸圧痕文	7.5YR5/4 にぶい褐	花積下層			○	○	織	109H	
第36図7	口縁	半裁竹管による平行沈線文	5YR5/4 にぶい赤褐	黒浜	○			○	織	(B-3) G	繊維は少量 磁石に付く
第36図8	胴	半裁竹管による平行沈線文	5YR6/4 にぶい橙	黒浜				○	織	24M	繊維は少量
第36図9	胴	半裁竹管による結節沈線文	10YR6/3 にぶい黄橙	黒浜				○	織	109H	内面はにぶい赤褐色
第36図10	胴	羽状縄文(異条斜縄文)	2.5YR5/6 明赤褐	羽状縄文系					織	109H	内面は黒褐色 磁石に付く
第36図11	胴	菱形の羽状縄文(異条斜縄文)	7.5YR6/4 にぶい橙	羽状縄文系				○	織	(E-1) G	繊維は少量
第36図12	胴	縄文LR	5YR6/6 橙	羽状縄文系				○	織	(A-1) G	内面は黒色 磁石に付く
第36図13	胴	縄文LR	10YR3/2 黒褐	羽状縄文系					織	109H	
第36図14	胴	縄文RL	7.5YR5/4 にぶい褐	羽状縄文系					織	(C-3) G	内面は黒褐色
第36図15	胴	無節縄文R?	2.5YR5/6 明赤褐	羽状縄文系					織	113H	磁石に付く
第36図16	底	縄文L/上げ底状	7.5YR5/3 にぶい褐	羽状縄文系				○	織	110H	
第36図17	口縁	半裁竹管による平行沈線文	2.5YR4/6 赤褐	諸磯b	○		○	○		遺構外	
第36図18	口縁	口縁部屈曲/ハケ状工具による条線文	5YR4/6 赤褐	諸磯b?		○		○		遺構外	
第36図19	胴	平行沈線文	2.5YR3/3 暗赤褐	諸磯				○	○	109H	
第36図20	胴	半裁竹管による平行沈線文	10YR6/4 にぶい黄橙	諸磯b				○	○	(D-6) G	内面は黒褐色
第36図21	胴	浮線文/爪形文	2.5YR4/4 にぶい赤褐	諸磯b	○			○	○	109H	
第36図22	胴	縄文LR/平行沈線間に爪形文	2.5YR6/8 橙	諸磯a~b	○			○		遺構外	内面はにぶい黄橙色
第36図23	胴	地文縄文LRか/半裁竹管による平行沈線文	5YR5/6 明赤褐	諸磯				○	○	24M	
第36図24	胴	縄文LR/浮線文	10YR7/2 にぶい黄橙	諸磯b					○	黒	遺構外
第36図25	胴	縄文RL	2.5YR4/4 にぶい赤褐	諸磯					○	109H	内面は灰褐
第36図26	胴	縄文RL	2.5YR4/4 にぶい赤褐	諸磯					○	111H	
第36図27	胴	条線文	7.5YR6/6 橙	前期末~ 中期初頭				○	○	(B-2) G	
第36図28	口縁	口縁部肥厚	10YR4/1 褐灰	五領ヶ台	○			○		105H	

* 石:石英 角:角閃石・輝石 礫:細礫 砂:砂粒 織:繊維 褐:褐色粒子 黒:黒褐色粒子 金:金雲母 白:白色粒子

第17表 遺構外出土の縄文土器一覧(1)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考	
					石	角	礫	砂	他			
第36図30	口縁	縄文LR／結節文／口縁部肥厚	10YR5/3 にぶい黄褐	五領ケ台				○		115H		
第36図31	胴	縄文LR／結節文	10YR4/3 にぶい黄褐	五領ケ台	○		○	○		遺構外		
第37図32	胴	縄文LR／結節文？	10YR5/2 灰黄褐	五領ケ台	○		○	○		(D-3) G		
第37図33	胴	半裁竹管による細い平行沈線／細い隆帯／ 三角形の刺突文	5YR4/3 にぶい赤褐	五領ケ台				○		(D-6) G		
第37図34	口縁	口唇部肥厚	10YR6/4 にぶい黄橙	中期				○		24M	浅鉢か？	
第37図35	胴	縄文LR	5YR6/6 橙	中期				○	○	遺構外		
第37図36	把手	Bの字形をした把手／沈線文	7.5YR8/4 浅黄橙	勝坂～曾利	○			○		110H		
第37図37	胴	縄文LRL／磨消懸垂文	5YR6/6 橙	加曾利EⅢ				○		110H	内面は明黄褐色	
第37図38	胴	縄文RL／磨消懸垂文	7.5YR6/3 にぶい褐	加曾利EⅢ				○	褐	(A-1) G		
第37図39	胴	縄文RL／微隆起線の区画文	7.5YR7/4 にぶい橙	加曾利EⅢ ～Ⅳ			○	○		(E-5) G		
第37図40	胴	縄文RL／磨消？	7.5YR7/4 にぶい橙	加曾利EⅢ ～Ⅳ				○		(E-1) G		
第37図41	口縁	沈線による区画内に縄文LR／沈線区画の 口縁部無文帯	10YR6/3 にぶい黄橙	加曾利EⅣ				○		114H	内面は灰黄褐色	
第37図42	口縁	縄文LR／沈線区画の口縁部無文帯	10YR6/3 にぶい黄橙	加曾利EⅣ				○		(D-1) G		
第37図43	口縁	縄文RL／沈線区画の口縁部無文帯	5YR6/6 橙	加曾利EⅣ				○		(A-1) G		
第37図44	口縁	微隆起線区画の口縁部無文帯／条線文	10YR7/4 にぶい黄橙	加曾利EⅣ				○		111H	内面は黒褐色	
第37図45	口縁	微隆起線区画の口縁部無文帯／縄文LR／ 波状口縁？	7.5YR3/1 黒褐色	加曾利EⅣ				○	褐	96D	内面は暗赤褐色	
第37図46	胴	条線文	5YR6/6 橙	中期末葉				○		24M		
第37図47	胴	縄文LR	7.5YR8/6 浅黄橙	中期末～ 後期前葉				○	褐	111H		
第37図48	胴	縄文LR	5YR6/4 にぶい橙	中期末～ 後期前葉	○			○		(B-3) G		
第37図49	胴	縄文LR	7.5YR8/4 浅黄橙	中期末～ 後期前葉				○		(C-2) G		
第37図50	胴	縄文LR	7.5YR6/4 にぶい橙	中期末～ 後期前葉				○		(E-1) G		
第37図51	胴	平行した沈線の区画内に縄文LR	7.5YR7/6 橙	称名寺Ⅰ				○		遺構外		
第37図52	胴	平行した沈線の区画内に縄文LR	7.5YR4/1 褐灰	称名寺Ⅰ				○		109H		
第37図53	胴	平行した沈線の区画内に縄文LR	10YR3/2 黒褐	称名寺Ⅰ	○			○		24M	内面は赤褐色	
第37図54	胴	平行した沈線の区画内に縄文LR	5YR5/4 にぶい赤褐	称名寺Ⅰ				○	○	褐	24M	
第37図55	胴	平行した沈線の区画内に縄文LR	7.5YR4/2 褐灰	称名寺Ⅰ				○	○	褐	遺構外	内面はにぶい赤褐色
第37図56	胴	縄文LR／平行した沈線の区画内を磨消	5YR6/6 橙	称名寺				○		(B-2) G		
第37図57	胴	沈線区画に列点文	7.5YR6/4 にぶい橙	称名寺Ⅱ				○		110H	内面は黒褐色	
第37図58	口縁	口縁部屈曲／小波状口縁／波頂部内面に円 形刺突文／波状の口唇部外面に一点鎖線状 の沈線と刺突文／縄文LR／沈線で縁取ら れた蕨手状の貼付文	10YR3/1 黒褐	堀之内Ⅰ				○	○	遺構外		
第37図59	胴	縄文LR／沈線で縁取られた隆帯／刺突文	5YR6/6 橙	堀之内				○		(G-2) G	内面は黒色	

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：繊維 褐：褐色粒子 黒：黒褐色粒子 金：金雲母 白：白色粒子

第17表 遺構外出土の縄文土器一覽（2）

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第37図61	胴	ソロバン玉状体部／張出部に刻み／胴下部に沈線文	5YR5/4にぶい赤褐	加曾利B2～3	○			○		108H	
第37図62	口縁	口唇部内面を面取り／横位の並行沈線区画内に縄文LRを充填	10YR2/1黒	加曾利B3～曾谷				○		110H	小型の浅鉢
第37図63	胴	刻みの有る紐線文／沈線文	10YR3/2黒褐	後期後葉				○		115H	
第37図64	胴	互連弧充填縄文	2.5YR5/6明赤褐	後期後葉	○			○		110H	
第37図65	口縁	縄文L	10YR6/2灰黄褐	後期粗製				○	褐	108H	内面はにぶい黄橙色
第37図66	胴	縄文LR／貼付の剥落痕	7.5YR7/4にぶい橙	後期粗製				○		(A-1) G	
第37図67	胴	条線文／指頭押捺をもつ紐線文（2条か?）	7.5YR6/4にぶい橙	後期粗製				○		111H	
第37図68	胴	格子状の沈線文	7.5YR6/4にぶい橙	後期粗製			○	○		108H	チャートの細礫が目立つ
第37図69	胴	格子状の沈線文	10YR7/4にぶい黄橙	後期粗製				○		(D-4) G	
第37図70	胴	交差する条線文	5YR6/6橙	後期粗製			○	○		(C-1) G	磁石に付く
第37図71	胴	条線文	5YR5/4にぶい赤褐	後期粗製		○		○		(A-1) G	内面は橙色磁石に付く
第37図72	胴	浅い沈線	10YR7/3にぶい黄橙	後期粗製?				○	褐	(I-2) G	内面は明赤褐色
第37図73	胴	沈線文の間に列点文	7.5YR8/4浅黄橙	安行3c～3d				○		24M	
第37図74	—	土製円盤	5YR6/6橙							(A-1) G	

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：繊維 褐：褐色粒子 黒：黒褐色粒子 金：金雲母 白：白色粒子

第17表 遺構外出土の縄文土器一覧（3）

（ ）は現存値及び推定値

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時期
第38図75	高坏	(3.0)	—	—	高坏の脚台部／途中に穿孔あり／裾端部はヘラ磨き調整により面取り気味／無彩	暗黄褐色	砂粒を僅かに含む	内面：ヘラナデ、裾端部はヘラ磨き調整／外面：縦方向にヘラ磨き調整	脚台部破片	108 H	弥生後期～古墳前期
第38図76	高坏	(2.5)	—	—	高坏の脚台部／裾部は大きく外反する／無彩	暗黄褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面：ハケ目調整後裾部は横ナデ	脚台部破片	遺構外	弥生後期～古墳前期
第38図77	壺	—	—	—	壺の複合口縁部分か／複合部上端に沿って櫛描刺突文が施文される	淡茶褐色	橙色粒子を含む	内外面：ヘラ磨き調整	口縁部小破片か	遺構外	弥生後期～古墳前期
第38図78	壺	—	—	—	肩部文様帯／文様は単節斜縄文を2段とその直下に2条の自縄結節文が施文される／外面無文部は赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はヘラ磨き調整	肩部破片	遺構外	弥生後期～古墳前期
第38図79	壺	—	—	—	頸部から胴部上半の移行はやや屈曲する／外面及び内面頸部は赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面：頸部は横方向のヘラ磨き調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	頸部～胴部上半破片	110 H / 遺構外	弥生後期～古墳前期
第38図80	甕	—	—	—	頸部は屈曲する／「く」の字口縁と思われる	暗茶褐色	橙色粒子をやや多く含む	内外面：頸部は横ナデ、胴部は粗いハケ目調整	頸部～胴部上半破片	109 H	弥生後期～古墳前期
第38図81	甕	—	—	—	台付甕の胴部下半で脚台部への移行部分	淡明茶褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面：粗いヘラ磨き調整／外面：縦方向のハケ目調整	胴部下半破片	109 H	弥生後期～古墳前期

(単位:cm)

第18表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器・陶器一覧（1）

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時期
第38図82	甕	—	—	—	胴部破片／外面は黒く焼けている	胎土は暗褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後ナデ？／外面：斜方向のハケ目調整	胴部下 半破片	24 M	弥生後期～古墳前期
第38図83	土師器 環	3.8	(16.5)	—	大型有段環／口縁部は外反する／内面口唇部に沈線がまわり／精巧な作り／内外面黒彩／北関東系	胎土は暗茶褐色	茶褐色粒子を含む	内面：回転ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ヘラ磨き調整	30%	遺構外	古墳時代後期（6世紀中葉）
第38図84	土師器 甕	(5.3)	(31.6)	—	大型甕／口縁部は面取りされる／いわゆる須恵器模倣甕	淡黄褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石をやや多く含む	内外面：ハケ目調整	口縁部～頸部 20%	24 M	古墳時代後期（7世紀代か）
第38図85	須恵器 壺	—	—	—	小型品／把手付壺か／口縁部直下に2本の沈線がまわり、以下に櫛描波状文が施文される／産地不詳	灰褐色	精錬されており、ほとんど粒子を含まない	内外面：横ナデ	口縁部～体部 小破片	93 D	古墳時代後期（5世紀中葉か）
第38図86	土師器 埴?	—	—	—	器種の特定は難しい／全体に内湾する器形で、口縁部は僅かに直立気味である／内外面赤彩	胎土は暗赤褐色を基調	白色針状物質・砂粒を含む	内面：粗いハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、以下粗いハケ目調整後ヘラ磨き調整	口縁部 小破片	遺構外	古墳時代後期（5世紀後葉か）
第39図88	土師器 環	4.6	(14.4)	—	いわゆる落合型環／外面口縁部直下に巻き上げ痕あり／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒を含み、微細な金雲母を僅かに含む	内面：ロクロ成形に伴う回転ナデか／外面：ロクロ成形後体部中位以下はヘラ削り、その後部分的にヘラ磨き調整	口縁部～底部 破片 (2点) ／接合せず	110 H / 113 H	奈良時代（8c前葉）
第39図89	須恵器 壺	—	—	—	口縁部は外反する／体部中位にやや強いロクロ目の稜がまわる	濃青灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部には回転系切り痕あり	70%	24 M	平安時代（9世紀後葉か）
第39図90	須恵器 環	3.5	(12.8)	(7.0)	器形は底部から口縁部にかけて直線的に開くが、口縁部はやや内湾気味／鳩山製品	灰色	白色砂粒をやや多く、白色針状物質を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部には回転系切り痕あり	遺存度 は 30%	遺構外	平安時代（8世紀後葉）
第39図91	須恵器 皿	—	—	—	底部は平底／東金子製品	淡灰褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部には回転系切り痕あり	体部下 半～ 底部 80%	29 M	平安時代（9世紀後葉か）
第39図92	須恵器 甕	(7.7)	—	—	複合口縁／口縁部内面はやや受け口状／外面頸部に2段の櫛描波状文が施文される／櫛描文は4本一単位／東金子製品か	灰褐色	白色砂粒・小石をやや多く含む	内外面：回転ナデ	口縁部～頸部 破片	24 M	平安時代（9世紀代か）
図版17 —93	灰釉 耳皿	(1.8)	—	—	耳皿／口縁部くびれ部あり／内面を中心に灰釉が施釉される／猿投製品か	胎土は灰白色	黒色粒子・石英？を僅かに含む	内外面ロクロ目	口縁部～体部 下半破片	24 M	平安時代（9世紀代か）
図版17 —94	灰釉 壺?	(3.3)	—	—	壺か／口唇部は短く外反し、頸部は直線的である／口縁部から頸部の内外面に灰釉が施釉される／猿投製品か	胎土は灰白色	精錬されており、ほとんど粒子を含まない	内外面ロクロ目	口縁部～頸部 破片	24 M	平安時代（9世紀代か）

(単位：cm)

第18表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器・陶器一覧（2）

第3章 検出された遺構と遺物

() は現存値及び推定値

図版番号	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
			器高	口径	底径				
図版 18-95	白磁	紅皿	1.3	4.0	1.5	型造り	肥前系	遺構外	18c
図版 18-96	磁器	碗	(3.3)	(6.8)	—	口縁部～体部破片/染付/外面：草花文	肥前系	遺構外	19c後
図版 18-97	磁器	徳利	—	—	—	胴部破片/染付/外面：竹文	肥前系	遺構外	18c前
図版 18-98	磁器	碗	(3.2)	—	4.3	体部～底部破片/高台あり/内面：一条線、見込みに文様あり/外面：高台に一条線、草花文	肥前系	遺構外	18c後
図版 18-99	磁器	徳利	(2.2)	—	4.3	体部～底部破片/高台あり/外面：高台に一条線、文様は松葉文	肥前系	遺構外	18～19c
図版 18-100	陶器	皿	(2.3)	—	—	志野皿/口縁部小破片	瀬戸	遺構外	17c前
図版 18-101	陶器	蛇目皿	(3.0)	—	—	口縁部小破片/内面及び外面口縁部に灰釉/胎土の色調は灰白色	唐津	遺構外	17c前
図版 18-102	陶器	皿	—	—	—	白濁釉/口縁部小破片/色調は灰色/被熱あり	瀬戸	115 H	16c末
図版 18-103	陶器	灯明具	(2.6)	—	—	内外面に黒く煤けている箇所あり/鉄釉/胎土は灰色	?	遺構外	18c
図版 18-104	陶器	碗	(3.7)	—	—	御深釉/口縁部～体部破片/胎土の色調は黄白色	瀬戸	遺構外	17c
図版 18-105	陶器	皿	3.0	—	—	付高台/灰釉/胎土の色調は淡黄色	瀬戸	遺構外	17c前
図版 18-106	陶器	碗	(3.6)	—	4.7	付高台/内外面灰釉/胎土の色調は淡黄色	瀬戸	114 H	18c後
図版 18-107	陶器	鉢	(1.8)	—	—	付高台/内外面灰釉/胎土の色調は淡黄色	瀬戸	114 H	17c?
図版 18-108	陶器	皿	(1.9)	—	—	体部～底部破片/高台あり/胎土の色調は黄白色/蛇目剥ぎ	瀬戸	遺構外	17c
図版 18-109	陶器	徳利	—	—	—	胴部破片/緑釉	瀬戸	114 H	19c
図版 18-110	陶器	天目茶碗	—	—	—	体部破片/内面及び外面体部に鉄釉/胎土の色調は淡黄色	瀬戸	遺構外	16c末
図版 18-111	陶器	徳利	(2.3)	—	(4.3)	体部～底部破片/内面及び外面体部に鉄釉/碁笥底/胎土の色調は暗灰色	中国?	遺構外	16c中
図版 18-112	陶器	灯明皿	—	—	—	口縁部～体部破片/鉄釉/胎土の色調は灰褐色	瀬戸	遺構外	18～19c
図版 18-113	陶器	播鉢	(3.0)	—	—	口縁部小破片/複合口縁/内外面に鉄釉/胎土の色調は淡白色	瀬戸	遺構外	16c末
図版 18-114	陶器	播鉢	—	—	—	体部小破片/内面にハケ目あり/内外面に鉄釉/胎土の色調は淡黄色	瀬戸	遺構外	16c末
図版 18-115	陶器	播鉢	—	—	—	体部破片/内面にハケ目あり/内外面に鉄釉/色調は明茶褐色	備前系	遺構外	18～19c
図版 18-116	土器	焙烙	5.0	—	—	口縁部はやや内湾気味に外傾する/色調は黒褐色/外面には指頭による成形痕が観察できる/輪積痕あり	在地系	遺構外	16c後
図版 18-117	土器	焙烙	5.2	—	—	口縁部は直線的に外傾する/色調は黒色/胎土の色調は淡茶褐色/外面には指頭による成形痕が観察できる/補修孔2つあり/118と同一個体と思われる	在地系	遺構外	16c後
図版 18-118	土器	焙烙	(4.7)	—	—	口縁部はやや内湾気味に外傾する/色調は暗茶褐色/外面には指頭による成形痕が観察できる/補修孔1つあり/117と同一個体と思われる	在地系	遺構外	16c後

(単位：cm)

第19表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第4章 調査のまとめ

本書は、平成6年年度に志木市遺跡調査会が実施した城山遺跡第26地点の発掘調査成果を収録したものである。ここでは、今回検出された遺構・遺物について、いくつか気がついた点についての所見をまとめることにする。

第1節 古墳時代後期

(1) 住居跡出土の土器について

今回の調査により検出された古墳時代の遺構は、すべて古墳時代後期の住居跡である。住居跡の時期については、出土土器から見て、古い順から、5世紀後葉－107 H、6世紀中葉－105・108・111・114 H、7世紀中葉－113・115 Hと列記することができる。

ここでは、以上の住居跡から出土した土器について、以下のように時期区分を行い、志木市における土師器編年（尾形 2000・2001）を基準にその変遷を見てみることにする。105 Hについては、小破片のみの出土で、図示できる資料がなかったため、ここでは割愛することにする。

1期（5世紀後葉）－107号住居跡

本住居跡については、住居北西コーナーのみの検出であるため、出土遺物は土師器埴形土器（以下、「形土器」を省略。）あるいは土師器埴と思われる深身の土器1点と少なかった（第6図1）。この土器は、口縁部を欠損しており、底部はやや平底気味であることから、6世紀より古い5世紀後葉と考えられる。

2期（6世紀中葉）－105・108・111・114号住居跡

○108号住居跡出土土器（第10～12図）

焼失住居である本住居跡からは、多くの土器が出土している。器種構成としては、土師器坏・壺・鉢・甕・甑である。

①土師器坏（1～6）

口径14～17cmの大型の有段坏で、赤色系土器（1～4）、黒色系土器（5・6）に分類できる。さらに、赤色系土器の胎土の色調に注目すると、そのうち、1・2・4は暗赤褐色を基本とすることから、入間系土師器と考えられる（尾形 2008）。

黒色系土器の2点については、両者共に精巧な作りの土器で、口唇部はシャープに面取りが施され、忠実に須恵器坏蓋模倣を再現している印象を受ける。おそらく、陶邑編年（田辺 1966・1981）では、口径が飛躍的に大型化するMT 15型式段階に相当する製品の模倣坏と考えてよいであろう。内面には放射状の暗文が施文され、外面にもていねいなヘラ磨き調整が施されている。北関東系からの搬入品と考えられる。これらは、志木市における土師器編年では、坏形土器のD 5類に分類され、8期（6

世紀3／5段階)に比定される。

②土師器壺(7)

複合口縁を呈し、肩の張りが強い壺と考えられる。口頸部内外面および外面胴部上半には赤彩が施されている。城山遺跡第62地点での報告(尾形・徳留他 2012)では、3期(6世紀前葉)にはすでに壺は姿を消すという状況であったが、志木市における土師器編年では、8期(6世紀3／5段階)に「頸部に稜をもつ壺形土器に類似するもの」と甕の範疇で捉えたA類があるが、これも本来は壺とした方がよいであろう。よって、この土器は壺としての最終形態と考えられ、時期は6世紀中葉に比定できる。

③土師器鉢(8)

「コ」の字口縁の鉢である。「コ」の字口縁の出現の時期は、志木市における土師器編年では、7期(6世紀2／5段階)以降と考えられる。

④土師器甕(9～17)

口縁部に注目すると、しっかりとした「く」の字口縁は、9・13・15の土器に限られ、10・14は屈曲せずに緩やかなカーブをもっており、さらに12は屈曲するが、口縁部が間延びしてしまい直立気味になっている。つまり、4世紀から伝統的に固守されてきた「く」の字口縁が崩れ、口縁部の形態に変化を見ることができると同時に口縁部形態にバラエティーが誕生したことにつながるものであろう。

また、胴部形態に注目すると、前段階の様相より、長胴化が顕現する土器(12)も出現している。

調整技術面では、ヘラ削り・ヘラナデそして最終仕上げとしては、粗いヘラ磨き調整を基本としている。10・11・17の土器には、ハケ目調整が施されているが、5世紀代の緻密なハケ目痕とは異なるため、おそらくヘラ状工具の先端がささくれ状になっているような工具で施されたと思われる。

17は胴部がやや球状を呈することから、壺の可能性はある。外面の胴部上半～中位にかけては仕上げにハケ目調整が施されている。

⑤土師器甗(18～21)

4点のうち、3点(18・19・21)が複合口縁を呈する土器で、志木市では、小型製品を除く大型製品では、5期(5世紀5／5段階)～9期(6世紀4／5段階)まで存続するタイプである。20の単純口縁を呈する土器は、後続するタイプと考えられる。

また、21は外面全体に籠目痕を残す土器で、城山遺跡第62地点(尾形・徳留他 2012)でも市内で初めての出土として、5世紀中葉の壺を紹介したが、今回は壺ではなく、甗ということで、さらに類例を知らないところである。今後の資料の増加を待って改めて触れることにしたい。

○111・114号住居跡出土土器(第14図)

111Hと114Hは調査の際には、別住居と捉えられていたが、可能性としては、1軒の住居の拡張住居の可能性はある。器種構成としては、須恵器坏蓋、土師器坏・甕である。

①須恵器坏蓋(1)

推定口径11.5cmの小型化傾向にある湖西製品の坏蓋である。口縁部と天井部の境には沈線がまわる。湖西編年(後藤 1989)によると、合子状坏蓋D1ないしD2に分類されるもので、時期については、D1がⅡ期第5小期(7世紀第Ⅰ四半世紀)、D2がⅡ期第6小期(7世紀第Ⅱ四半世紀)に比定される。

②土師器坏（2～4）

2は深身タイプで、口縁部は短く外反する。内斜口縁坏に類似する器形であるが、赤彩が施される土器である。志木市における土師器編年では、坏形土器のB2類に分類され、存続時期は短く、3期（5世紀3／5段階）～4期（5世紀4／5段階）に比定できる。

3・4は黒色系土器である。これらは、118H出土の2点（第10図5・6）が須恵器坏蓋模倣であるのに対し、須恵器坏身模倣である。両者共に精巧な作りの土器で、口唇部はシャープに面取りが施されている。118H同様に陶邑編年（田辺 1966・1981）では、MT15段階に相当する製品の模倣坏と考えてよいであろう。やはり内面には放射状の暗文が施文され、外面にもていねいなヘラ磨き調整が施されている。北関東系からの搬入品と考えられる。これらは、志木市における土師器編年では、坏形土器のD5類に分類され、8期（6世紀3／5段階）に比定される。

③土師器甕（5・6）

特に5については、口縁部は大きく外反するが、「く」の字口縁がやや崩れており、胴部も5世紀のものに比べ、長胴化の兆しが見られる。志木市における土師器編年では、8期（6世紀3／5段階）に比定されている。

以上、本住居跡から出土した土器については、時期にばらつきがあり、1の須恵器坏蓋は7世紀前～中葉、2は5世紀後葉、3～6は6世紀中葉に比定される。ここでは特に3～6の土器が安定した状態であることから、111H・114Hは6世紀中葉を中心とした時期と比定することにした。

3期（7世紀中葉）－113・115号住居跡

○113号住居跡出土土器（第16・17図）

カマド及び貯蔵穴周辺から土器がまとまって出土している。器種構成としては、須恵器坏身、土師器坏・壺・甕・甑である。土師器については、2のいわゆる比企型坏を除き、すべて在在系土師器（尾形 2005・2006）と考えられる。

①須恵器坏身（1）

推定口径11.5cmの小型化傾向にある湖西製品の坏蓋である。口縁部と天井部の境には沈線がまわる。湖西編年（後藤他 1989）によると、合子状坏蓋D1ないしD2に分類されるもので、時期については、D1がⅡ期第5小期（7世紀第Ⅰ四半世紀）、D2がⅡ期第6小期（7世紀第Ⅱ四半世紀）に比定される。

②土師器坏（2・3）

2は推定口径12.0cmのいわゆる比企型坏である。胎土の色調が暗赤褐色を呈することから、人間系土師器と考えられる。小型化傾向にあることから、志木市における土師器編年では、13期（7世紀3／5段階）に比定されるであろう。3は無彩有稜坏でやや深身タイプである。

③土師器壺（4）

口縁部葉は直立気味に外反し、肩部は強く張り、やや胴部はつぶれ底部は大きめである。一見、器種としては壺と思われるが、調整技法は伝統的な技法であるヘラ磨き調整ではなく、ヘラ削りを中心としているため、小型丸甕の類とした方が良いかもしれない。

④土師器甕（5～14）

志木市では、7世紀以降、甕は丸甕（5～7）と長甕（8～14）に明確に分類することができる。

まず、丸甕であるが、これらを時間的な変化で明確に捉えることは困難である。おそらく、在地系土師器のバリエーションの豊富さにより、把握しづらい状況となっているのであろう。

長甕については、丸甕や甑同様に変化の速度が遅いため、個体レベルで捉えるのは難しいが、本住居出土の長甕については、12がやや新相であるが、まだ口径が胴部最大径を大きく越えるタイプではないことから、志木市の土師器編年では、おおよそ13期（7世紀3／5段階）に比定できるであろう。

⑤土師器甑（15）

胴部下半から底部にかけての小型甑の破片である。調整技法にはハケ目調整が施されていることからやや時期的に符号しないため、混入品の可能性がある。

以上、本住居跡から出土した土器については、おおよそ7世紀中葉に比定したが、1の須恵器坏身から考えるとやや7世紀前葉に近い様相と言えるであろう。

○115号住居跡出土土器（第19図）

器種構成としては、土師器坏・鉢・甕である。1・2のいわゆる比企型坏を除き、すべて在地系土師器と考えられる。

①土師器坏（1～3）

1・2はいわゆる比企型坏である。胎土の色調が暗赤褐色を呈することから、入間系土師器と考えられる。1は口縁部と底部との境の有段は弱い、須恵器坏蓋の模倣タイプであろうか。志木市における土師器編年では、12期（7世紀2／5段階）に比定されるであろう。3は在地系土師器の無彩有稜坏である。外面口縁部直下には指頭による成形痕が観察されることから、やや粗雑な製品と言えるであろう。

②土師器鉢（4）

口縁部に最大径をもつ小型の鉢であろう。在地系土師器では、7世紀代を通して普遍的に見られるものである。

③土師器甕（5・6）

5は胴部中位に膨らみをもち、口径が胴部最大径を大きく越えるタイプではないことから、志木市の土師器編年では、おおよそ13期（7世紀3／5段階）に比定できるであろう。

以上、本住居跡から出土した土器については、おおよそ7世紀中葉に比定したが、1の比企型坏と3の無彩有稜坏の推定口径が13cmであることから、やや7世紀前葉に近い様相かもしれない。

（3）113号住居跡出土の耳環（金環）について

縄文時代において、装身具である耳飾りは、土製・石製の耳環、そして石製の玦状耳飾りが使用されていたが、古墳時代になると金・銀・銅などの金属製品が使用されるようになった。

そして、古墳時代の耳環については、本例のような銅の素材に鍍金を施した製品が主流であると思われる。しかし、神奈川県指定有形文化財「江古田金環塚古墳出土一括遺物」のように純金製の金環（2点）は有名なところである。

また、こうした耳環が出土する遺構としては、埼玉県内でも古墳からの出土例は多くあるが、本例のように住居跡からの出土例は極めて少ないと言える。

志木市周辺での耳環の類例は、朝霞市八塚古墳（柳田・早川 1965）の金環がある。また、所沢市

東内手遺跡（木暮 1992）の金環は、住居跡（第2号住居跡）からの出土であることは注目に値する。

古墳時代における耳環の用途としては、古墳からの出土例が多いことから、副葬品として使われたものであるが、寺院の心礎などからの出土は慎壇具としての役割をもっていたものであろう。しかし、本例のような住居跡からの出土については、どのように考えるべきか、今後、資料を集成しその出土位置等を検討することにより解明すべき課題であろう。

第2節 奈良・平安時代

（1）奈良・平安時代の遺構・遺物について

第26地点全体で検出された平安時代の主な遺構は、住居跡4軒（106・109・110・112H）・土坑2基（91・97D）である。ここでは、各遺構から出土した土器について簡単にまとめることにする。

住居跡を時期的に古い順に列記すると、8世紀中葉－112H、8世紀後葉－109H、9世紀後葉－106H、9世紀末葉－110Hと考えられる。

112号住居跡－8世紀中葉

須恵器坏4点が出土した（第27図）。

1は須恵器蓋で、東金子製品と思われる。器形は天井部の水平化を特徴とし、全体に偏平である。

2～4は須恵器坏である。そのうち、3・4は胎土に白色針状物質を含むことから、鳩山製品と考えられる。2は口径11.6cmの小型品であるが、器形は箱形を呈し、底部は全面回転ヘラ削りが施されることから古い様相と言える。3は歪みがあり、口径は12.8～14.8cmである。底部は全面ヘラ削りにはならない。4は推定口径14.6cmで、底部は全面回転ヘラ削りであろうか。

以上、特に2～4の須恵器坏形土器のうち、3・4については、やや器高が高く、14cm台の口径をもつことから、鳩山編年のHBⅢ期（8世紀中葉）に比定できる（渡辺 1990）。

109号住居跡－8世紀後葉

出土土器は、須恵器坏4点（1～4）、土師器甕3点（5～7）、須恵器甕（8・9）で構成される（第23図）。

まず、須恵器坏は、1・2・4が東金子製品で、3が鳩山製品と考えられる。特に1が口径13.4cm、2が推定口径12.6cmで、これらは108Hに比べ法量が一回り小さいことから、鳩山編年のHBⅣ期（8世紀後葉）に比定できる。

須恵器甕はすべて武蔵型甕で、口縁部が「く」の字状を呈し、胴部上半が張った器形を特徴とする。根本編年（根本 1999）によるⅣ期（8世紀後半）に比定されるであろう。

以上、109Hの出土土器は、須恵器坏と土師器甕の特徴ともにほぼ年代は一致すると考えられることから、8世紀後葉に位置付けられる。

106号住居跡－9世紀後葉

須恵器坏3点が出土した（第21図）。

特に全容がわかる1の土器については、器高4.6cm・推定口径14.0cm・底径5.2cmであり、口径―底径比では、底径が口径の1/2を下回ることから、鳩山編年のHBⅧ期（9世紀後葉）に比定できる。

110号住居跡―9世紀末葉

出土土器としては、須恵器坏・埴6点（1～6）・甕（7）で構成される（第25図）。

まず、須恵器坏であるが、1は器高4.2cm・口径14.0cm・底径5.6cm、2は器高4.2cm・推定口径13.1cm・底径5.2cmで、いずれも口径―底径比では、底径が口径の1/2を下回るが、1の口縁部の特徴として、直線的に口唇部もあまり肥厚しないことから、鳩山編年のHBⅧ期（9世紀後葉）よりやや新しい様相と思われるため、9世紀末葉と考えた。須恵器埴は、高台付埴である。底部はかなり縮小しており、体部は腰も消え、丸味をもち口径も飛躍的に大きくなる特徴から、やはり鳩山編年のHBⅧ期（9世紀後葉）よりやや新しい様相と思われる。

第3節 中世以降

（1）「柏の城」関連遺構について

本地点から検出された24号溝跡（24M）については、柏の城関連の遺構と考えられる。柏の城については、昭和55（1980）年の市史編さん室（志木市史編さん室 1986）や昭和60年（1985）年の志木市遺跡調査会による第1地点（佐々木・尾形 1988）の発掘調査により、「柏城落城後の屋敷割の図」（志木市教育委員会 2013）に相当する大堀跡を確認し、柏の城が本当に実在することを裏付けたことで大変重要な調査であったと評価できる。

柏の城関連の遺構と考えられる主な遺構は、土坑・井戸跡・堀跡（＝溝跡）であるが、屋敷跡などに関連するピット群（＝柱跡）については、余りにも多く検出され、さらに重複することから、1遺構としての把握はされていないというのが実態である。

ここでは、以下に柏の城関連の中で「大堀」と思われる遺構について、24Mを含め簡単に触れることにする。

①外側三之大堀

前述した市史編さん室の調査、志木市遺跡調査会による第1地点の調査の後、平成13（2001）年の第42地点（尾形・深井・青木 2005）、第60地点（尾形・藤波・鈴木・中村 2008）から確認されている。規模については、市史編さん室の調査により、上幅12.2m（推定）・下幅1.6m・深さ4.7m（地表から）と報告されている。

②本丸西側の大堀

第15地点（尾形・佐々木・深井恵子他 2002）の12号溝跡が相当する。規模は上幅約9m・下幅約1m・深さ3.7m前後（地表から）と推定されている。

③二の丸東側の大堀

第71地点（尾形・大久保・中山他 2013）の59号溝跡（59M）は、二の丸の東側を南北方向に走向する「大堀」に該当するものである。本報告の24号溝跡（24M）については、位置的に59Mの南側において西側に屈曲後の東西方向に走向する大堀と思われたが、59Mの規模は上幅5.04m～7.03

m・下幅1.31m～1.94m・深さ2.20mであり、24Mの規模は上幅2.4m～3.0m・下幅0.68m～1.22m・深さ1.32～1.540mと規模が小さく到底同一の遺構とは考えづらいものである。24Mについては、図示されていない中規模の堀跡ということになるであろう。また、59Mの南側における西側に屈曲する部分は、第35地点（尾形・深井 1999）調査の際には確認できなかったため、その手前で屈曲することになる予想である。

[引用・参考文献]

- 尾形則敏・大久保聡・中山哲也他 2013『城山遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・佐々木保俊・深井恵子他 2002『埋蔵文化財調査報告書3』志木市の文化財第34集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀他 2012『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2005『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・藤波啓容・鈴木徹・中村真理 2008『城山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏 1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識—（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として—」『埼玉考古』第43号 埼玉考古学会
- 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
- 2001「志木市における古墳時代の土師器の編年（2）」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 2005「第4章 まとめ」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集
- 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例—」『埼玉考古II』埼玉考古学会
- 木暮広史 1992『柳瀬川流域遺跡群（X）』所沢市文化財調査報告書第30集 埼玉県所沢市教育委員会
- 後藤建一他 1989『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 志木市教育委員会 2013『『館村日記』解読分と解説』
- 志木市史編さん室 1986『志木市史 中世資料編』
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- 1981『須恵器大成』角川書店
- 根本 靖 1999「所沢市の東の上遺跡の基礎研究 II—土師器煮沸具の変遷について—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 柳田敏司・早川智明 1965「朝霞市八塚古墳発掘調査報告」『埼玉考古』第3号 埼玉考古学会
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

圖 版



1. 92号土坑



2. 105号住居跡



3. 107号住居跡・90号土坑



4. 108号住居跡遺物出土状態



5. 108号住居跡遺物出土状態



6. 108号住居跡遺物出土状態



7. 108号住居跡遺物出土状態



8. 108号住居跡遺物出土状態



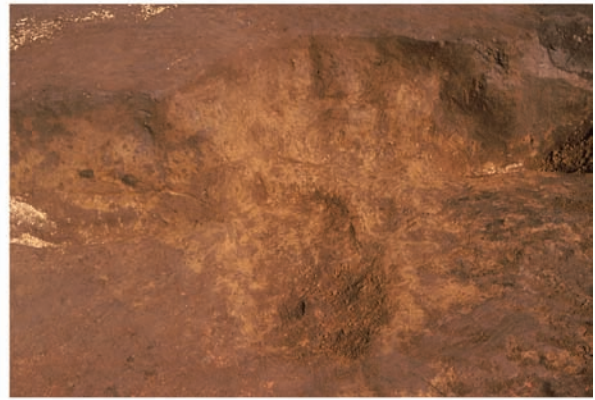
1. 108号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



2. 108号住居跡カマド遺物出土状態



3. 108号住居跡貯蔵穴



4. 108号住居跡カマド掘り方



5. 108号住居跡



6. 108号住居跡



7. 111・114号住居跡



8. 発掘風景



1. 113号住居跡遺物出土狀態



2. 113号住居跡遺物出土狀態



3. 113号住居跡遺物出土狀態



4. 113号住居跡貯藏穴遺物出土狀態



5. 115号住居跡遺物出土狀態



6. 115号住居跡遺物出土狀態



7. 106号住居跡



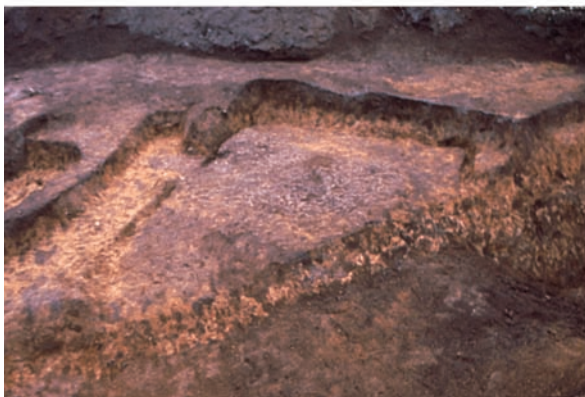
8. 109号住居跡遺物出土狀態



1. 109号住居跡遺物出土状態



2. 109号住居跡遺物出土状態



3. 109号住居跡



4. 109号住居跡掘り方



5. 110号住居跡



6. 110号住居跡掘り方



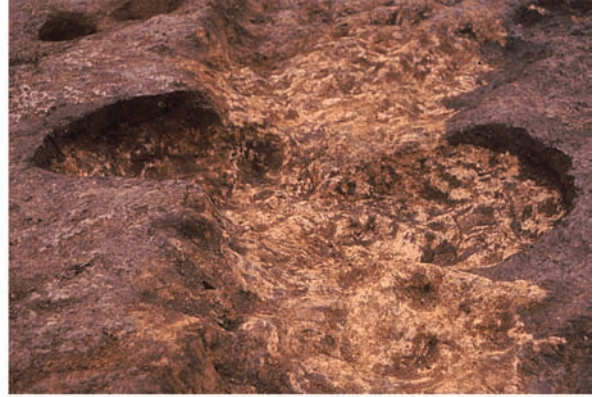
7. 112号住居跡



8. 112号住居跡掘り方



1. 91号土坑



2. 97号土坑



3. 93号土坑竖坑



4. 93号土坑内部



5. 93号土坑内部



6. 94号土坑竖坑



7. 94号土坑連絡部



8. 94号土坑主体部



1. 95号土坑



2. 96号土坑



3. 98・99・100号土坑



4. 23号溝跡



5. 24号溝跡（東から）



6. 24号溝跡（西から）



7. 24号溝跡



8. 24号溝跡発掘風景



1. 92号土坑出土遺物



2. 107号住居跡出土遺物



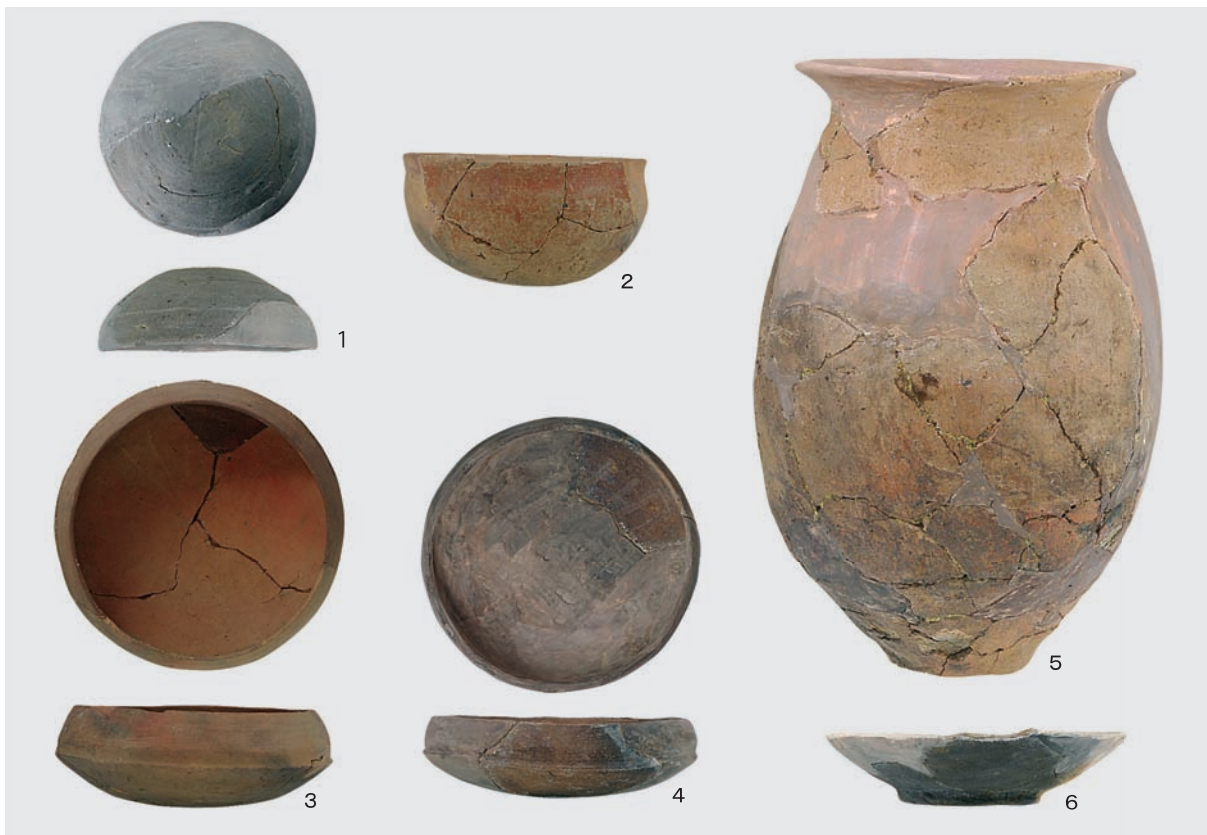
3. 108号住居跡出土遺物 1



108号住居跡出土遺物 2



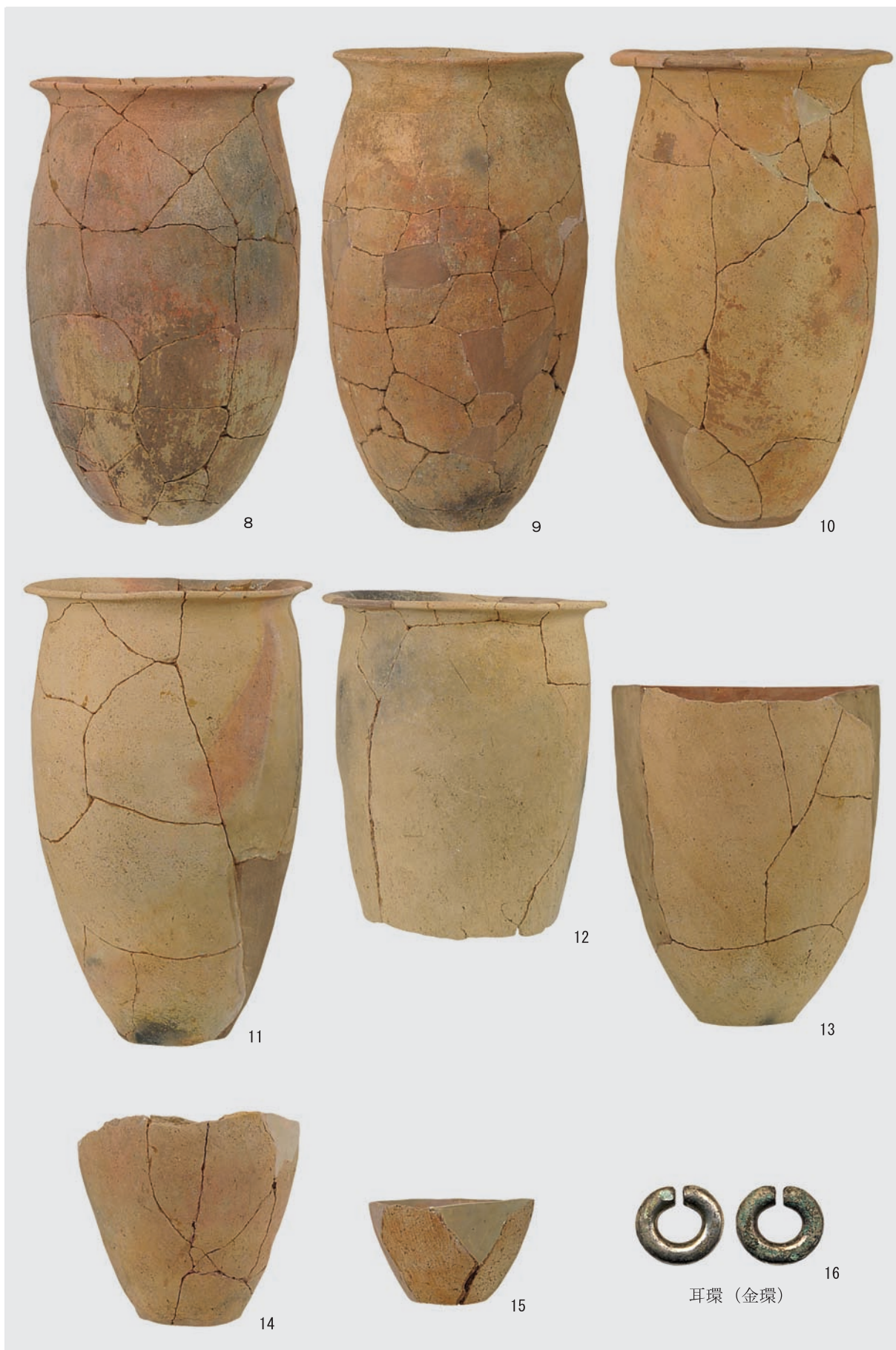
108号住居跡出土遺物 3



1. 111号住居跡出土遺物



2. 113号住居跡出土遺物 1



113号住居跡出土遺物 2



1. 115号住居跡出土遺物



2. 106号住居跡出土遺物



3. 109号住居跡出土遺物 1



1. 109号住居跡出土遺物 2



2. 110号住居跡出土遺物



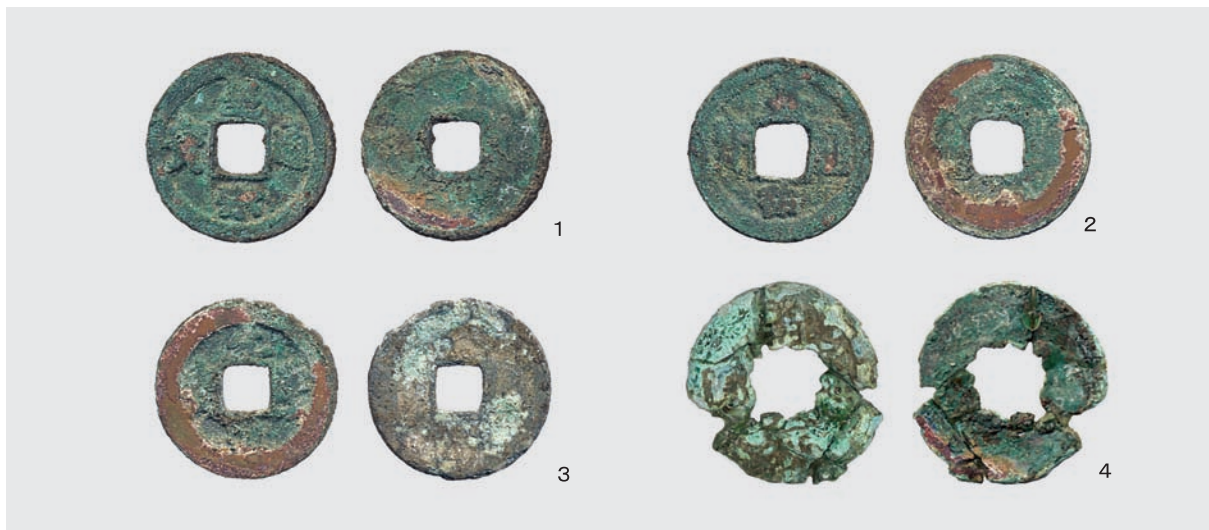
1. 112号住居跡出土遺物



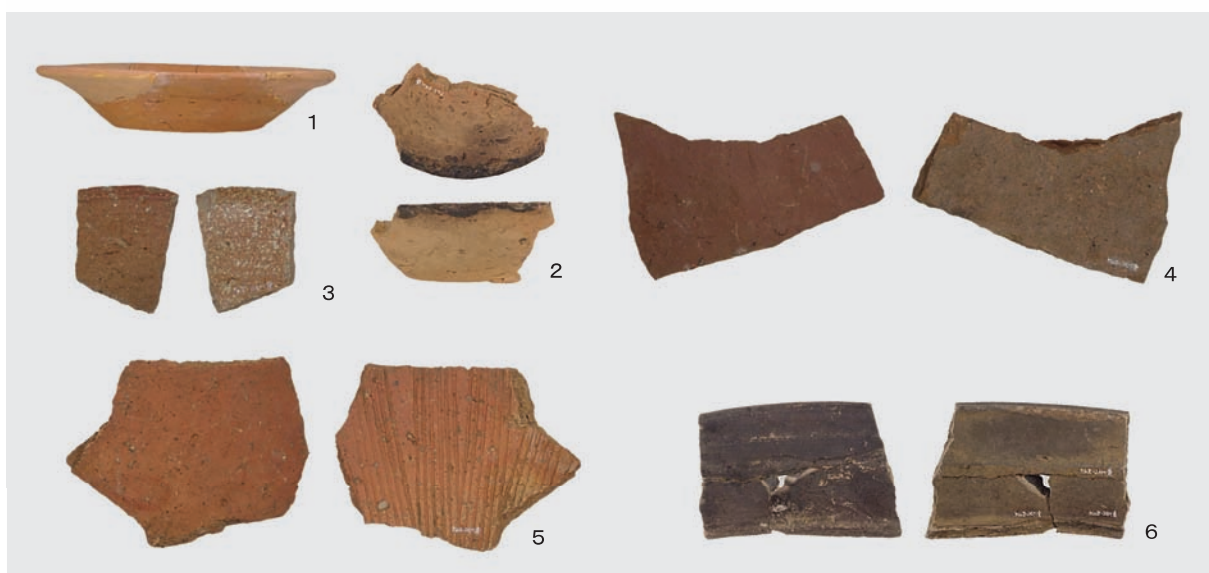
2. 91・97号土坑出土遺物



3. 土坑出土遺物



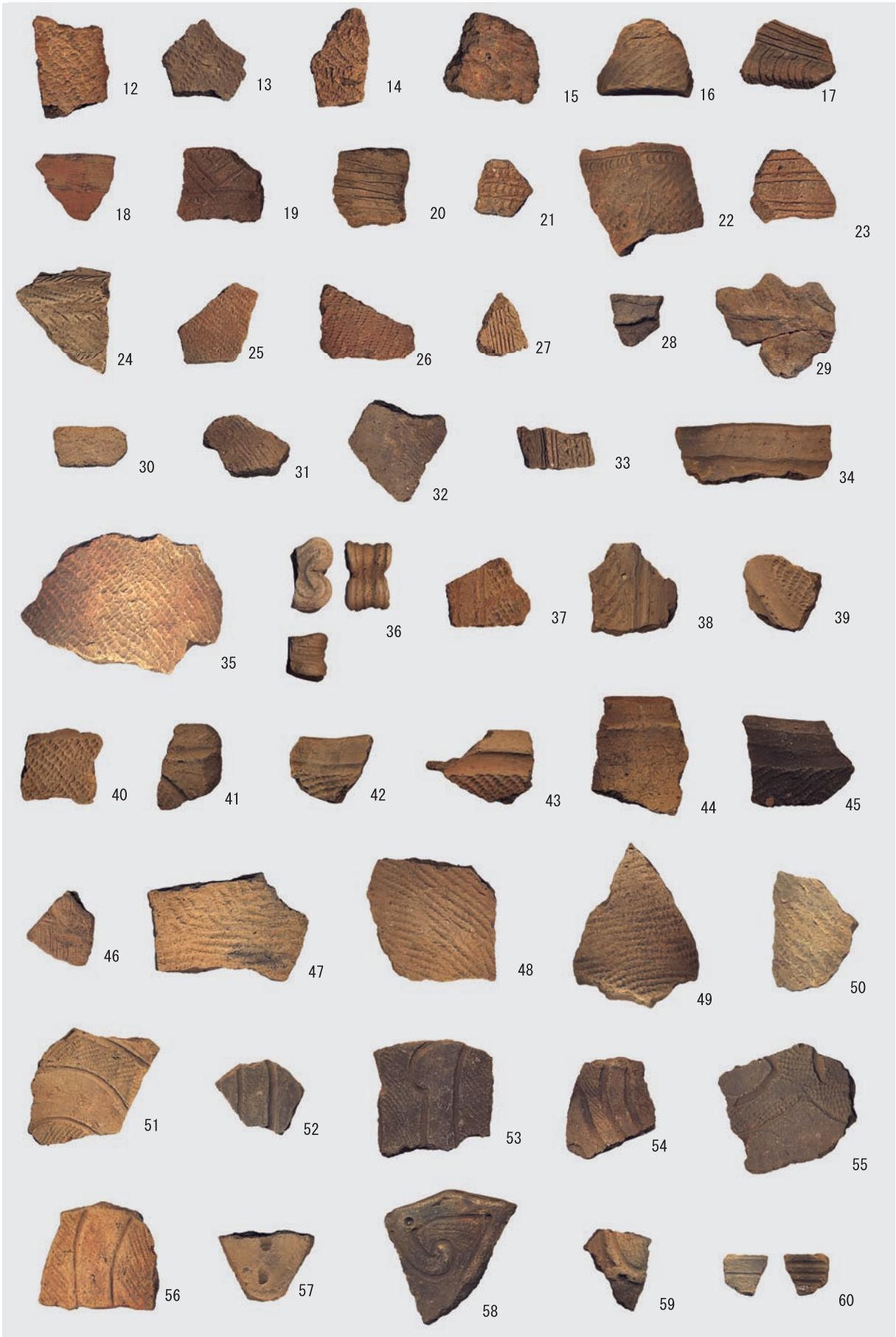
1. 98号土坑出土遺物



2. 24号溝跡出土遺物



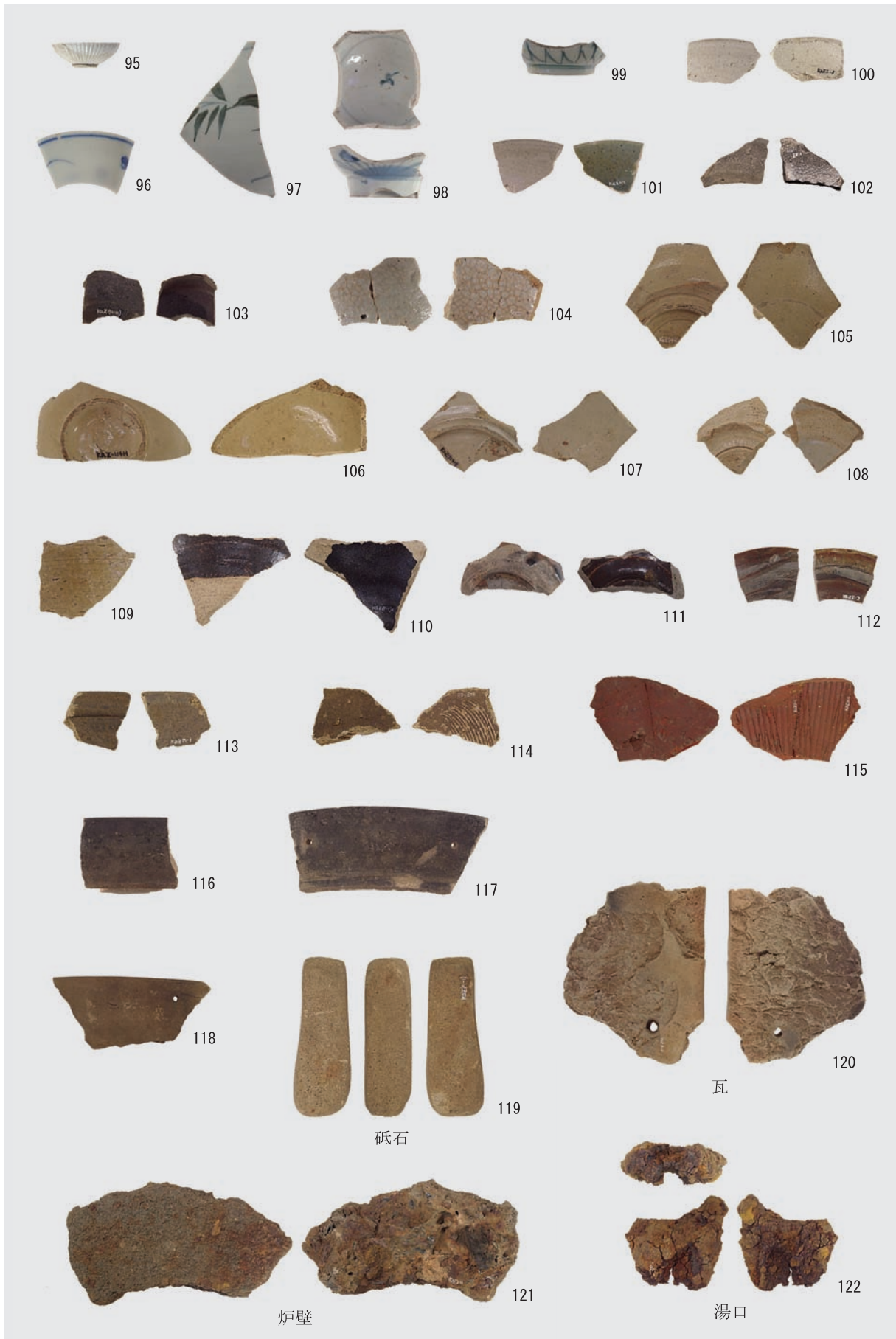
3. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



遺構外出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	しきしまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ5
書名	志木市埋蔵文化財調査報告書5
シリーズ名	志木市の文化財
シリーズ番号	第59集
編著者	尾形則敏 大久保 聡 深井恵子 青木 修
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111
発行年月日	平成26 (2014) 年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	発掘調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやまいせき 城山遺跡 (第26地点)	しきしかわちよう 志木市柏町 3丁目2618-14、 2620-1・13・14	11228	09- 003	35° 49' 57"	139° 34' 12"	19940822 ～ 19941021	410.00	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
城山遺跡 (第26地点)	集落・ 城館跡	縄文時代	土坑	1軒	土器	市内初となる耳環 (金環)が古墳時代 後期の113号住居 跡から出土した。
		古墳時代後期	住居跡	7軒	土師器・須恵器、金環 炭化種実	
		奈良・平安時代	住居跡	4軒	土師器・須恵器・土製	
		中世以降	土坑 地下室 溝跡	2基 7基 2基 2本	品、石製品、布目瓦 陶磁器・土器・石製品 瓦・銭貨 陶磁器・土器	

要約
<p>城山遺跡は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。今回報告する第26地点からは、縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡7軒、奈良・平安時代の住居跡4軒・土坑2基、中世以降の土坑7基・地下室2基・溝跡2本が検出された。これらの遺構は、調査区内全面に広がっており、城山遺跡における遺構の密度の濃さをよく示していると言える。中でも特筆すべきは、古墳時代後期の113号住居跡から耳環（金環）1点が出土したことである。また、本地点は「柏の城跡」の城内に位置することから、中世以降の溝跡のうち、東西方向に走向する24号溝跡は、「柏の城」関連遺構と考えられる。</p>

志木市の文化財 第59集

埼玉県志木市

埋蔵文化財発掘調査報告書5

発行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成26(2014)年3月31日

印刷 株式会社白峰社